

靈界物語 第一卷 靈主體從 子の卷

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第一卷』愛善世界社

一九九二(平成〇四)年十二月〇八日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

二〇〇九年十一月二〇日修正

# 目次

序 じよ

基本宣傳歌 きほんせんてんか

發端 ほつたん

第一篇

幽界の探險 いがかい たんけん

第一章

靈山修業 れいざん しうげふ (一)

第二章

業の意義 げふ いぎ (二)

第三章

現界の苦行 げんかい くぎやう (三)

第四章

現實的苦行 げんじつてきくぎやう (四)

第五章

靈界の修業 れいかい しうげふ (五)

第六章

八衢の光景 やちまた くわうけい (六)

第七章 幽廳いっちやうの審判しんぱん〔七〕

第八章 女神めがみの出現しゅつげん〔八〕

第九章 雜草ざっさうの原野げんや〔九〕

第一〇章 二段目にだんめの水獄すゐごく〔一〇〕

第十一章 大幣おほぬさの靈驗れいけん〔一一〕

第二篇 幽界いっかいより神界しんかいへ

第一二章 顯幽けんいっ一致いっち〔一二〕

第一三章 天使てんしの來迎らいがう〔一三〕

第一四章 神界旅行しんかいりよかうの一〔一四〕

第一五章 神界旅行しんかいりよかうの二〔一五〕

第一六章 神界旅行しんかいりよかうの三〔一六〕

第一七章 神界旅行しんかいりよかうの四〔一七〕

第一八章 靈界の情勢〔一八〕

第一九章 盲目の神使〔一九〕

第三篇 天地の剖判

第二〇章 日月の發生〔二〇〕

第二一章 大地の修理固成〔二一〕

第二二章 國祖御隱退の御因縁〔二二〕

第二三章 黄金の大橋〔二三〕

第二四章 神世開基と神息統合〔二四〕

第四篇 龍宮占領戰

第二五章 武藏彦一派の惡計〔二五〕

第二六章	魔軍 <small>まぐん</small> の敗戦 <small>はいせん</small> 〔二六〕
第二七章	龍宮城 <small>りゅうくわうじやう</small> の死守 <small>ししゆ</small> 〔二七〕
第二八章	崑崙山 <small>こんろんざん</small> の戦闘 <small>せんとう</small> 〔二八〕
第二九章	天津神 <small>あまつかみ</small> の神算 <small>しんさん</small> 鬼謀 <small>きぼう</small> 〔二九〕
第三〇章	黄河畔 <small>くわうがはん</small> の戦闘 <small>せんとう</small> 〔三〇〕
第三一章	九山八海 <small>きうざんはつかい</small> 〔三一〕
第三二章	三個 <small>さんこ</small> の寶珠 <small>ほっしゆ</small> 〔三二〕
第三三章	エデンの燒盡 <small>せうじん</small> 〔三三〕
第三四章	シナイ山 <small>ざん</small> の戦闘 <small>せんとう</small> 〔三四〕
第三五章	一輪 <small>いちりん</small> の祕密 <small>ひみつ</small> 〔三五〕
第三六章	一輪 <small>いちりん</small> の仕組 <small>しぐみ</small> 〔三六〕
第五篇	御玉 <small>みたま</small> の爭奪 <small>そうだつ</small>
第三七章	顯國 <small>つしくに</small> の御玉 <small>みたま</small> 〔三七〕

第三八章	黄金水の精 <small>わうごんすゐ</small> 〔三八〕
第三九章	白玉の行衛 <small>しらたま</small> 〔三九〕
第四〇章	黒玉の行衛 <small>くろたま</small> 〔四〇〕
第四一章	八尋殿の酒宴 <small>やひろどの</small> の一〔四一〕
第四二章	八尋殿の酒宴 <small>やひろどの</small> の二〔四二〕
第四三章	丹頂の鶴 <small>たんちやう</small> 〔四三〕
第四四章	緑毛の龜 <small>りよくまう</small> 〔四四〕
第四五章	黄玉の行衛 <small>わうぎよく</small> 〔四五〕
第四六章	一島の松 <small>ひとしま</small> 〔四六〕
第四七章	エデン城塞陷落 <small>じやうさいかんらく</small> 〔四七〕
第四八章	鬼熊の終焉 <small>おにくま</small> 〔四八〕
第四九章	バイカル湖の出現 <small>こ</small> 〔四九〕
第五〇章	死海の出現 <small>しかい</small> 〔五〇〕
附記	靈界物語について



この『靈界物語』は、天地剖判の初めより天の岩戸開き後、神素盞鳴命が地球上に跋扈跳梁せる八岐大蛇を寸斷し、つひに叢雲寶劍をえて天祖に奉り、至誠を天地に表はし五六七神政の成就、松の世を建設し、國祖を地上靈界の主宰神たらしめたまひし太古の神代の物語および靈界探險の主要を略述し、苦・集・滅・道を説き、道・法・禮・節を開示せしものにして、決して現界の事象にたいし、偶意的に編述せしものにあらず。されど神界幽界の出來事は、古今東西の區別なく、現界に現はれ來ることも、あながち否み難きは事實にして、單に神幽兩界の事のみと解し等閑に附せず、これによりて心魂を清め言行を改め、靈主體從の本旨を實行されむことを希望す。

讀者諸子のうちには、諸神の御活動にたいし、一字か二字、神名のわが姓名に似たる文字ありとして、ただちに自己の過去における靈的活動なりと、速解される傾向ありと聞く。實に誤れるの甚だしきものといふべし。切に注意を乞ふ次第

なり。

大正十年十月廿日 午後一時

於松雲閣 瑞月 出口王仁三郎誌

基本宣傳歌

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも

曲津の神は荒ぶとも

誠の力は世を救ふ

三千世界の梅の花  
開いて散りて實を結ぶ

一度に開く神の教  
月日と地の恩を知れ

この世を救ふ生神は

高天原に神集ふ

神が表に現はれて

善と悪とを立別ける

この世を造りし神直日

心も廣き大直日

ただ何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

身の過は宣り直せ。

### 發端

自分が明治三十一年舊二月九日、神使に伴なはれ丹波穴太の靈山高熊山に、一週間の靈的修業を了へてより天眼通、天耳通、自他神通、天言通、宿命通の主要を心得し、神明の教義をして今日あるに至らしめたるについては、千變萬化の波瀾があり、縦横無限の曲折がある。舊役員の反抗、信者の離反、その筋の誤解、

宗教家の迫害、親族、知友の總攻撃、新聞雜誌、單行本の熱罵嘲笑、實に筆紙口舌のよくするところのものでない。自分はただただ開教後廿四年間の經緯を、きわめて簡単に記憶より呼び起して、その一端を示すことにする。

龍宮館には變性男子の神系と、變性女子の神系との二大系統が、歴然として區別されてゐる。變性男子は神政出現の豫言、警告を發し、千辛萬苦、神示を傳達し、水をもつて身魂の洗禮を施し、救世主の再生、再臨を待つてをられた。ヨハネの初めてキリストに對面するまでには、ほとんど七年の間、野に叫びつつあつたのである。變性男子の肉宮は女體男靈にして、五十七才はじめてここに嚴の御魂の神業に参加したまひ、明治二十五年の正月元旦より、同四十五年の正月元旦まで、前後滿二十年間の水洗禮をもつて、現世の汚濁せる靈體兩系一切に洗禮を施し、世界改造の神策を顯示したまうた。かの歐洲大戰亂のごときは、嚴の御魂の神業發動の一端にして、三千世界の一大警告であつたと思ふ。

變性女子の肉宮は瑞の御魂の神業に参加奉仕し、火をもつて世界萬民に洗禮を施すの神務である。明治三十一年の舊二月九日をもつて神業に参加し、大正七年

にぐわつこのか  
二月九日をもつて前後滿二十年間の靈的神業をほとんど完成した。物質萬能主義、  
無神無靈魂説に、心醉累惑せる體主靈從の現代も、やや覺醒の域に達し、神靈の  
實在を認識するもの、日に月に多きを加へきたれるは、すなはち神靈の偉大なる  
神機發動の結果にして、決して人智人力の致すところではないと思ふ。  
變性男子の肉宮は神政開祖の神業に入り、爾來二十有七年間神筆を揮ひ、もつ  
て靈體兩界の大改造を促進し、今や靈界に入りても、その神業を繼續奉仕されつ  
つあるのである。

つぎに變性女子は三十年間の神業に奉仕して、もつて五六七神政の成就を待ち、  
世界を善道にみちびき、もつて神明の徳澤に浴せしむるの神業である。神業奉仕  
以來、本年をもつて滿二十三年、殘る七ヶ年こそ最も重大なる任務遂行の難關で  
ある。神諭に曰く、

『三十年で身魂の立替立直しをいたすぞよ』

と。變性男子の三十年の神業成就は、大正十一年の正月元旦である。變性女子の  
三十年の神業成就は、大正十七年二月九日である。神諭に、

□ 身魂の立替立直し□

とあるを、よく考へてみると、主として水洗禮の靈體兩系の改造が三十年であつて、これはヨハネの奉仕すべき神業であり、體靈洗禮の靈魂的改造が前後三十年を要するといふ神示である。しかしながら三十年と神示されたのは、大要を示されたもので、決して確定的のものではない。伸縮遲速は、たうてい免れないと思ふ。要するに、神界の御方針は一定不變であつても、天地經綸の司宰たるべき奉仕者の身魂の研不研の結果によつて變更されるのは止むをえないのである。

神諭に、

□ 天地の元の先祖の神の心が眞實に徹底了解たものが少しありたら、樹替樹直しは立派にできあがるなれど、神界の誠が解りた人民が無いから、神はいつまでも世に出ることができぬから、早く改心いたして下されよ。一人が判りたら皆の者が判つてくるなれど、肝心のものに判らぬといふのも、これには何か一つの原因が無ければならぬぞよ。自然に氣のつくまで待つてをれば、神業はだんだん遅れるばかりなり、心から發根の改心でなければ、教へてもらうてから合點する身魂

では、到底この御用は務まらぬぞよ。云々<sup>うんぬん</sup>」

實際の御經綸が分つてこなくては、空前絶後の大神業に完全に奉仕することはできるものではない。御神諭に身魂の樹替樹直しといふことがある。ミタマといへば、靈魂のみのことと思つてゐる人が澤山にあるらしい。身は身體、または物質界を指し、魂とは靈魂、心性、神界等を指したまうたのである。すべて宇宙は靈が本で、體が末となつてゐる。身の方面、物質的現界の改造を斷行されるのは國祖大國常立神であり、精神界、神靈界の改造を斷行したまふのは、豊國主神の神權である。ゆゑに宇宙一切は靈界が主であり、現界が従であるから、これを稱して靈主體従といふのである。

靈主體従の身魂を靈の本の身魂といひ、體主靈従の身魂を自己愛智の身魂といふ。靈主體従の身魂は、一切天地の律法に適ひたる行動を好んで遂行せむとし、常に天下公共のために心身をささげ、犠牲的行動をもつて本懐となし、至眞、至善、至美、至直の大精神を發揮する、救世の神業に奉仕する神や人の身魂である。體主靈従の身魂は私利私欲にふけり、天地の神明を畏れず、體欲を重んじ、衣食

住にのみ心を煩はし、利によりて集まり、利によつて散じ、その行動は常に正鵠を缺き、利己主義を強調するのほか、一片の義務を辨へず、慈悲を知らず、心はあたかも豺狼のごとき不善の神や、人をいふのである。

天の大神は、最初に天足彦、胞場姫のふたりを造りて、人體の祖となしたまひ、靈主體從の神木に體主靈從の果實を實らせ、

「この果實を喰ふべからず」

と嚴命し、その性質のいかんを試みたまうた。ふたりは體欲にかられて、つひにその嚴命を犯し、神の怒りにふれた。

これより世界は體主靈從の妖氣發生し、神人界に邪惡分子の萌芽を見るにいたつたのである。

かくいふ時は、人あるひは言はむ。

「神は全智全能にして智徳圓滿なり。なんぞ體主靈從の萌芽を刈りとり、さらに靈主體從の人體の祖を改造せざりしや。體主靈從の祖を何ゆゑに放任し、もつて邪惡の世界をつくり、みづからその處置に困むや。ここにいたりて吾人は神の存



在と、神力とを疑はざるを得じ」

とは、實に巧妙にしてもつとも至極な議論である。

されど神明には、毫末の依怙なく、逆行的神業なし。一度手を降したる神業は

昨日の今日たり難きがごとく、弓をはなれたる矢の中途に還りきたらざるごとく、

ふたたび之を更改するは、天地自然の經緯に背反す。ゆゑに神代一代は、これを

革正すること能はざるところに儼然たる神の權威をともしなふのである。また一度

出でたる神勅も、これを更改すべからず。神にしてしばしばその神勅を更改し給

ふごときことありとせば、宇宙の秩序はここに全く紊亂し、つひには自由放漫の

端を開くをもつてである。古の諺にも「武士の言葉に二言なし」といふ。いはん

や、宇宙の大主宰たる、神明においてをやである。神諭にも、

「時節には神も叶はぬぞよ。時節を待てば煎豆にも花の咲く時節が参りて、世に

落ちてをりた神も、世に出て働く時節が参りたぞよ。時節ほど恐いものの結構な

ものは無いぞよ、云々」

と示されたるがごとく、天地の神明も「時」の力のみは、いかんとも爲したまふ

ことはできないのである。

天地剖判の始めより、五十六億七千萬年の星霜を経て、いよいよ彌勒出現の曉となり、彌勒の神下生して三界の大革正を成就し、松の世を顯現するため、ここに神柱をたて、苦・集・滅・道を説き、道・法・禮・節を開示し、善を勧め、惡を懲し、至仁至愛の教を布き、至治泰平の天則を啓示し、天意のままの善政を天地に擴充したまふ時期に近づいてきたのである。

吾人はかかる千萬億歳にわたりて、ためしもなき聖世の過渡時代に生れ出で、神業に奉仕することを得ば、何の幸か之に如かむやである。神示にいふ。

『神は萬物普遍の聖靈にして、人は天地經綸の司宰なり』

と。ア、吾人はこの時をにおいて何れの代にか、天地の神業に奉仕することを得む。ア、言靈の幸はふ國、言靈の天照る國、言靈の生ける國、言靈の助ける國、神の造りし國、神徳の充てる國に生を稟けたる神國の人においてをや。神の恩の高く、深きに感謝し、もつて國祖の大御心に報い奉らねばならぬ次第である。

第一篇 幽界の探険

第一章 靈山修業（一）

高熊山は上古は高御座山と稱し、のちに高座といひ、ついで高倉と書し、つひに轉訛して高熊山となつたのである。丹波穴太の山奥にある高臺で、上古には開化天皇を祭りたる延喜式内小幡神社の在つた所である。武烈天皇が繼嗣を定めむとなしたまうたときに、穴太の皇子はこの山中に隠れたまひ、高倉山に一生を送らせたまうたといふ古老の傳説が遺つてをる靈山である。天皇はどうしても皇子の行方がわからぬので、やむをえず皇族の裔を探しだして、繼體天皇に御位を譲りたまうたといふことである。またこの高熊山には古來一つの謎が遺つてをる。

「朝日照る、夕日輝く、高倉の、三ツ葉躑躅の其の下に、黄金の鷄小判千兩埋けおいた」

昔むかしから時々ときどき名なも知しれぬ鳥とりが鳴ないて、里人さとびとに告つげたといふことである。自分じぶんは登とぎ山さんするごとに、三ツ葉躑躅みつばつづじの株かぶは無ないかと探さがしてみたが、いつも見み當あたらなかつた。大正九年たいしやうくねんの春はる、再度さいど登山とぎんして休息きうそくしてをると、自分じぶんの脚あしもと下に、その三ツ葉躑躅みつばつづじが生はえてをるのを見み出し、はじめてその歌うたの謎なぞが解とけたのである。

『朝日照あさひてる』といふ意義いぎは、天津日あまつひの神かみの御み稜いづ威げが旭日昇天きよくじつしやうてんの勢いきほひをもつて、八はつ紘かうに輝かがやきわたり、夕日輝ゆふひかがやくてふ、他の國々たのくにくにまでも神德しんとくを光被くわつひしたまふ黄金時代わうこんじだいの來くることであつて、この靈山れいざんに神威靈德しんあれいとくを祕ひめおかれたといふ神界しんかいの謎なぞである。

『三ツ葉躑躅』とは、三つの御靈みたま、瑞靈ずみれいの意いである。ツツジの言靈ことたまは、萬古不ばんこふえ易きの意いである。『小判千兩埋こばんせんりやうけおいた』大判おほばんは上かみを意味いみし、小判こばんは下しもにして、確かく固不動こふどうの權けんりよく力を判ばんといふのである。すなわち小判こばんは小幡こばんともなり、神教しん顯現げん地ちともなる。穴太あなをの産土神社うぶすなじんじやの鎮座ちんざありしも、御祭神ごさいしんが開化天皇かいくわてんのうであつたのも深い神しん策さくのありませることと恐察きようさつし得えられる。これを思おもへばア、明治卅一年めいじさんじふいちねん如月きさらぎの九日このか、富士淺間神社ふじせんげんじんじやの祭神さいしん、木花咲耶姫命このはなさくやひめのみことの天使てんし、松岡芙蓉仙人まつおかふようせんじんに導みちびかれて、當山たうざんに自じぶ分ぶんが一週間いっしゅうかんの修業しうげふを命めいぜられたのも、決けつして偶然ぐうぜんではないとおもふ。

神示しんじのまにまに高熊山たかくまやまに出修しゅつじうしたる自分の靈力發達の程度ていどは、非常に迅速ひじやうじんそくであった。汽車きしやよりも飛行機ひかうきよりも電光石火でんくわうせきくわよりも、すみやかに靈的研究れいてきけんきうは進歩しんぽしたやうに思おもうた。たとへば幼稚園えうちえんの生徒せいとが大學だいがくを卒業そつげふして博士はくしの地位ちゐに瞬間しゆんかんに進すすんだやうな進歩しんぽであつた。過去くわこ、現在げんざい、未來みらいに透徹とうてつし、神界しんかいの祕奥ひおうを窺知きちし得うるとともに、現界げんかいの出來事できごとなどは數百年數千年すうひやくねんすうせんねんの後のちまで知悉ちしつし得えられたのである。しかしながら、すべて一切いっさい神祕しんぴに屬ぞくし、今日こんにちこれを詳細しやうさいに發表はつぱうすることのできないのを遺憾あかんとする。

## 第二章 業げふの意義いぎ（二）

靈界れいかいの業げふといへば世間せけん一般いっぱんに深山幽谷しんざんいうこくに入いつて、出世間しゆつせけん的てき難行苦行なんぎやうくぎやうをなすこととのみ考かんがへてをる人ひとが多いやうである。跣足はだしや裸はだかになつて、山神さんじんの社やしろに立籠たてこもり斷だん食じきをなし、斷湯だんたうを守り火食くわしよくをやめて、神佛しんぶつに祈願きぐわんを凝こらし、妙めうな動作どうさや異行いぎやうを敢あへ

てすることをもつて、徹底的修行が完了したやうに思ひ誇る人々が多い。

すべて業は行である以上は、顯幽一致、身魂一本の眞理により、顯界において可急の大活動をなし、もつて天地の經綸に奉仕するのが第一の行である。たとへ一ヶ月でも人界の事業を廢して山林に隱遁し怪行異業に熱中するは、すなはち一ヶ月間の社會の損害であつて、いはゆる神界の怠業者もしくは罷業者である。すべて神界の業といふものは現界において生成化育、進取發展の事業につくすをもつて第一の要件とせなくてはならぬ。

大本の一部の人士のごとく、何事も「惟神かむながら」といつて難きを避け、易きに就かむとするは神界より御覽になれば、實に不都合不届至極の人間といはれてもしかたはない。少しも責任觀念といふものがないのみか、盡すべき道をつくさず、かへつて神業の妨害ばかりしながら、いつも神界にたいし奉り、不足ばかりいつてゐる。これがいはゆる黄泉醜人である。神諭に、  
「世界の落武者が出て来るから用心なされよ」  
といふことが示されあるを考へてみるがよい。神界の業といふものは、そんな輕々

しき容易なものではない。しかるに自分から山林に分入りて修行することを非難しておきながら、かんじんの御本尊は一週間も高熊山で業をしたのは、自家撞着もはなはだしいではないか……との反問も出るであらうが、しかし自分はそれまでに二十七年間の俗界での悲痛な修行を遂行した。その卒業式ともいふべきものであつて、生存中ただ一回のみ空前絶後の實修であつたのである。

世には……釋迦でさへ檀特山において數ヶ年間の難行苦行をやつて、佛敎を開いたではないか、それに僅か一週間ぐらゐの業で、三世を達觀することを得るやうになつたとは、あまりの大言ではあるまいか……と、疑問を抱く人々もあるであらうが、釋迦は印度國淨飯王の太子と生れて、社會の荒き風波に遇つたことのない坊ンさんであつたから、數年間の種々の苦難を味はつたのである。自分はこれに反し幼少より極貧の家庭に生れて、社會のあらゆる辛酸を嘗めつくしてきたために、高熊山に登るまでに顯界の修行を了へ、また幾分かは幽界の消息にも通じてをつたからである。

### 第三章 現界の苦行〔三〕

高熊山の修行は一時間神界の修行を命せられると、現界は二時間の比例で修行をさせられた。しかし二時間の現界の修行より、一時間の神界の修行の方が数十倍も苦かつた。現界の修行といつては寒天に襦袢一枚となつて、前後一週間水一杯飲まず、一食もせず、岩の上に静坐して無言でをつたことである。その間には降雨もあり、寒風も吹ききたり、夜中になつても狐狸の聲も聞かず、蟲の音もなく、ときどき山も崩れむばかりの怪音や、なんとも言へぬ厭らしい身の毛の震慄する怪聲が耳朶を打つ。寂しいとも、恐ろしいとも、なんとも形容のできぬ光景であつた。……たとへ狐でも、狸でも、虎狼でもかまはぬ、生ある動物ができて生きた聲を聞かして欲しい。その姿なりと、生物であつたら、一眼見たいものだと、憧憬れるやうになつた。ア、生物ぐらゐ人の力になるものはない……と思つてゐると、かたはらの小篠の中からガサガサと足音をさして、黒い影の動物が、自分の静坐する、一尺ほど前までやつてきた。夜眼には、確にそれと分りかねる



が、非常に大きな熊のやうであつた。

この山の主は巨大な熊であるといふことを、常に古老から聞かされてをつた。そして夜中に人を見つけたが最後、その巨熊が八裂きにして、松の枝に懸けてゆくといふことを聞いてゐた。自分は今夜こそこの巨熊に引裂かれて死ぬのかも知れないと、その瞬間に心臓の血を躍らした。

ままよ何事も惟神に一任するに如かず……と、心を臍下丹田に落着けた。サアさうなると恐ろしいと思つた巨熊の姿が大變な力となり、その呻聲が戀しく懐しくなつた。世界一切の生物に、仁慈の神の生魂が宿りたまふといふことが、適切に感じられたのである。

かかる猛獸でさへも寂しいときには力になるものを、況んや萬物の靈長たる人においてをやだ。ア、世界の人々を悪んだり、怒らしたり、侮つたり、苦しめたり、人を何とも思はず、日々を暮してきた自分は、何とした勿體ない罰當りであつたのか、たとへ仇敵悪人といへども、皆神様の靈が宿つてゐる。人は神である。否人ばかりではない、一切の動物も植物も、皆われわれのためには、必要な力で

あり、頼みの杖であり、神の斷片である。

人はどうしても一人でも世に立つことはできぬものだ。四恩といふことを忘れては人の道が立たぬ。人は持ちつ持たれつ相互に助け合つてゆくべきものである。人と名がつけば、たとへ其の心は鬼でも蛇でもかまはぬ。大切にしなければならぬ。それに人はすこしの感情や、利害の打算上から、たがひに憎み嫉み争ふとは、何たる矛盾であらう、不眞面目であらう。人間は神様である。人間をおいて力になつてくれる神様がどこにあるであらうか。

神界には神様が第一の力であり、便りであるが、現界では人間こそ、吾等を助くる誠の生きたる尊い神様であると、かう心の底から考へてくると、人間が尊く有難くなつて、粗末に取扱ふことは、天地の神明にたいし奉り、恐れありといふことを強く悟了したのである。

これが自分の萬有に對する、慈悲心の發芽であつて、有難き大神業に奉仕する基礎的實習であつた。ア、惟神靈幸倍坐世。

## 第四章

### 現實的苦行（四）

つぎに自分の第一に有難く感じたのは水である。一週間といふものは、水一滴口に入れることもできず、咽喉は時々刻々に渴きだし、何とも言へぬ苦痛であつた。たとへ泥水でもいい、水氣のあるものが欲しい。木の葉でも噛んでみたら、少々くらの水は含んでをるであらうが、それも一週間は神界から飲食一切を禁止されてをるので、手近にある木の葉一枚さへも、口に入れるといふわけにはゆかない。その上時々刻々に空腹を感じ、氣力は次第に衰へてくる。されど神の御許しがないので、お土の一片も口にすることはできぬ。膝は崎嶇たる巖上に静坐せることとて、是くらゐ痛くて苦しいことはない。寒風は肌身を切るやうであつた。自分がふと空をあふぐ途端に、松の露がポトポトと雨後の風に揺られて、自分の唇邊に落ちかかつた。何心なくこれを嘗めた。ただ一滴の松葉の露のその味は、甘露とも何ともたとへられぬ美味さであつた。

これを考へてみても、結構な水を火にかけ湯に沸して、温いの熱いのと、小言

を言つてゐるくらゐ勿體ないことはない。

草木の葉一枚でも、神様の御許しが無ければ、戴くことはできず、衣服は何ほど持つてをうても、神様の御許しなき以上は着ることもできず、あたかも餓鬼道の修業であつた。そのお蔭によつて水の恩を知り、衣食住の大恩を覺り、贅澤なぞは夢にも思はず、どんな苦難に逢ふも驚かず、悲しまず、いかなる反對や、熱罵嘲笑も、ただ勿體ない、有難い有難いで、平氣で、社會に泰然自若、感謝のみの生活を樂むことができるやうになつたのも、全く修行の御利益である。

それについて今一つ衣食住よりも、人間にとつて尊く、有難いものは空氣である。飲食物は十日や廿日くらゐ廢したところで、死ぬやうな事はめつたにないが、空氣はただの二三分間でも呼吸せなかつたならば、ただちに死んでしまふより途はない。自分がこの修行中にも空氣を呼吸することだけは許されたのは、神様の無限の仁慈であると思つた。

人は衣食住の大恩を知ると同時に、空氣の御恩を感謝せなくてはならない。しかし以上述べたところは、自分が高熊山における修行の、現界的すなはち肉體

上<sup>やう</sup>における神示<sup>しんじ</sup>の修行<sup>しうぎやう</sup>である。靈界<sup>れいかい</sup>における神示<sup>しんじ</sup>の修行<sup>しうぎやう</sup>は、到底<sup>たうてい</sup>前述<sup>ぜんじゆつ</sup>のごとき輕<sup>かる</sup>い容易<sup>ようい</sup>なものではなかつた。幾十倍<sup>いくじふばい</sup>とも幾百倍<sup>いくひやくばい</sup>ともしれぬ大苦難<sup>だいくなん</sup>的<sup>てき</sup>修練<sup>しうれん</sup>であつた。

## 第五章 靈界<sup>れいかい</sup>の修業<sup>しうげふ</sup>〔五〕

靈界<sup>れいかい</sup>には天界<sup>てんかい</sup>と、地獄界<sup>ぢごくかい</sup>と、中有界<sup>ちゆうかい</sup>との三大境域<sup>さんだいきやうみき</sup>があつて、天界<sup>てんかい</sup>は正<sup>ただ</sup>しき神々<sup>かみがみ</sup>や正<sup>ただ</sup>しき人々<sup>ひとびと</sup>の靈魂<sup>れいこん</sup>の安住<sup>あんぢう</sup>する國<sup>くに</sup>であり、地獄界<sup>ぢごくかい</sup>は邪神<sup>じゃしん</sup>の集<sup>あつ</sup>まる國<sup>くに</sup>であり、罪惡<sup>ざいあく</sup>者の墮<sup>お</sup>ちてゆく國<sup>くに</sup>である。そして天界<sup>てんかい</sup>は至善<sup>しぜん</sup>、至美<sup>しび</sup>、至明<sup>しめい</sup>、至樂<sup>しらく</sup>の神境<sup>しんきやう</sup>で、天<sup>てん</sup>の神界<sup>しんかい</sup>、地<sup>ち</sup>の神界<sup>しんかい</sup>に別<sup>わか</sup>れてをり、天<sup>てん</sup>の神界<sup>しんかい</sup>にも地<sup>ち</sup>の神界<sup>しんかい</sup>にも、各自<sup>かくじ</sup>三段<sup>さんだん</sup>の區劃<sup>くくわく</sup>が定<sup>さだ</sup>まり、上中下<sup>じやちゆうげ</sup>の三段<sup>さんだん</sup>の御魂<sup>みたま</sup>が、それぞれに鎮<sup>しづ</sup>まる樂園<sup>らくえん</sup>である。地獄界<sup>ぢごくかい</sup>も根<sup>ね</sup>の國<sup>くに</sup>、底<sup>そこ</sup>の國<sup>くに</sup>にわかれ、各自<sup>かくじ</sup>三段<sup>さんだん</sup>に區劃<sup>くくわく</sup>され、罪<sup>つみ</sup>の輕重<sup>けいちゆう</sup>、大小<sup>だいせう</sup>によりて、それぞれに墮<sup>お</sup>ちてゆく至惡<sup>しあく</sup>、至醜<sup>ししゆう</sup>、至寒<sup>しかん</sup>、至苦<sup>しく</sup>の刑域<sup>けいみき</sup>である。今<sup>いま</sup>自分<sup>じぶん</sup>はここに靈界<sup>れいかい</sup>の御許<sup>おゆる</sup>しを得<sup>え</sup>て、天界<sup>てんかい</sup>、地獄界<sup>ぢごくかい</sup>などの大要<sup>たいえう</sup>を表示<sup>へうじ</sup>して見<sup>み</sup>やう。

「靈界」

「天界」：また「神界」といふ

「天の神界」三段

「地の神界」三段

「中有界」：また「精靈界」といふ

「淨罪界」

「地獄界」：また「幽界」といふ

「根の國」三段

「底の國」三段

靈界の大要は大略前記のとほりであるが、自分は芙蓉仙人の先導にて、靈界探險の途に上ることとなつた。勿論身は高熊山に端坐して、ただ靈魂のみが往つたのである。

行くこと數百千里、空中飛行船以上の大速度で、足も地につかず、ほとんど十分ばかり進行をつづけたと思ふと、たちまち芙蓉仙人は立留まつて自分を顧み、

「いよいよ是からが靈界の關門である」  
といつて、大變な大きな河の邊に立つた。一寸見たところでは非常に深いやうであるが、渡つて見ると餘り深くはない。不思議にも自分の着てゐた紺衣は、水に洗はれたのか忽ち純白に變じた。別に衣服の一端をも水に浸したとも思はぬに、肩先まで全部が清白になつた。芙蓉仙人とともに、名も知らぬこの大河を對岸へ渡りきり、水瀬を眺めると不思議にも水の流れと思つたのは誤りか、大蛇が幾百萬とも限りなきほど集まつて、各自に頭をもたげ、火焰の舌を吐いてをるのには驚かされた。それから次々に涉りきたる數多の旅人らしきものが、いづれも皆大河と思つたと見えて、自分の涉つたやうに、各自に裾を捲きあげてをる。そして不思議なことには各自の衣服が種々の色に變化することであつた。あるひは黒に、あるひは黄色に茶褐色に、その他雜多の色に忽然として變つてくるのを、どこともなく、五六人の恐い顔をした男が、一々姓名を呼びとめて、一人々々に切符のやうなものをその衣服につけてやる。そして速く立てよと促す。旅人は各自に前方に向つて歩を進め、一里ばかりも進んだと思ふ所に、一つの役所のやうなものが

建つてあつた。その中から四五の番卒が現はれて、その切符を剥ぎとり、衣服の變色の模様によつて、上衣を一枚脱ぎとるもあり、或ひは二枚にしられるもあり、丸裸にしられるものもある。また一枚も脱ぎとらずに、他の旅人から取つた衣物を、或ひは一枚あるいは二枚三枚、中には七八枚も被せられて苦しうにして出てゆくものもある。一人々々に番卒が付き添ひ、各自規定の場所へ送られて行くのを見た。

## 第六章 八衢の光景〔六〕

ここは黄泉の八衢といふ所で米の字形の辻である。その真中に一つの靈界の政廳があつて、牛頭馬頭の恐い番卒が、猛獸の皮衣を身につけたものもあり、丸裸に猛獸の皮の褌を締めこみ、突棒や、手槍や、鋸や、斧、鐵棒に、長い火箸などを携へた奴が澤山に出てくる。自分は芙蓉仙人の案内で、ズツト奥へ通ると、その



中の小頭ともいふやうな鬼面の男が、長劍を杖に突きながら出迎へた。そして芙蓉仙人に向つて、

「御遠方の所はるばる御苦勞でした。今日は何の御用にて御來幽になりましたかと恐い顔に似合はぬ慇懃な挨拶をしてゐる。自分は意外の感にうたれて、兩者の應答を聞くのみであつた。芙蓉仙人は一禮を報いながら、

「大神の命により大切なる修業者を案内申して参りました。すなはちこの精靈であります、今回は現、神、幽の三界的使命を帯び、第一に幽界の視察を兼ねて修業にきたのです。この精靈は丹州高倉山に古來秘めおかれました、三つ葉躑躅の靈魂です。何とぞ大王にこの旨御傳達をねがひます」

と、言葉に力をこめての依頼であつた。小頭は仙人に軽く一禮して急ぎ奥に行つた。待つことやや少時、奥には何事の起りしかと思はるるばかりの物音が聞ゆる。芙蓉仙人に、

「あの物音は何でせうか」

と尋ねてみた。仙人はただちに、

「修業者の來幽につき準備せむがためである」

と答へられた。自分は怪しみて、

「修業者とは誰ですか」

と問ふ。仙人は答へていふ、

「汝のことだ。肉體ある精靈、幽界に來るときは、いつも廳内の模様を一時變更

さるる定めである。今日は別けて、神界より前もつて沙汰なかりし故に、幽廳で

は、狼狽の體と見える」

と仰せられた。しばらくありて靜かに隔ての戸を開いて、前の小頭は先導に立ち、

數名の守卒らしきものと共に出できたり、軽く二人に目禮し前後に付添うて、奥

へ奥へと導きゆく。上段の間には白髪異様の老神が、机を前におき端座したまふ。

何となく威嚴があり且つ優しみがある。そしてきはめて美しい面貌であつた。

芙蓉仙人は少しく腰を屈めながら、その右前側に坐して何事か奏上する様子で

ある。判神は綺羅星のごとくに中段の間に列んでゐた。老神は自分を見て美はし

き慈光をたたへ笑顔を作りながら、

「修業者殿、遠方大儀である。はやく是に」と老神の左前側に自分を着座しめられた。老神と芙蓉仙人と自分とは、三角形の陣をとつた。自分は座につき老神に向つて低頭平身敬意を表した。老神もまた同じく敬意を表して頓首したまひ、

「吾は根の國底の國の監督を天神より命ぜられ、三千有餘年當廳に主たり、大王たり。今や天運循環、いよいよわが任務は一年餘にして終る。餘は汝とともに靈界、現界において相提携して、以て宇宙の大神業に参加せむ。しかしながら吾はすでに永年幽界を主宰したれば今さら幽界を探究するの要なし。汝は今はじめの來幽なれば、現幽兩界のため、實地について研究さるの要あり。しからざれば今後において、三界を救ふべき大慈の神人たることを得ざるべし。是非々々根の國、底の國を探究の上歸顯あれよ。汝の産土の神を招き奉らむ」として、天の石笛の音もさはやかに吹きたてたまへば、忽然として白衣の神姿、雲に乗りて降りたまひ、三者の前に現はれ、叮重なる態度をもつて、何事か小聲に大王に詔らせたまひ、つぎに幽廳列座の神にむかひ厚く禮を述べ、つぎに芙蓉仙

人に對して、氏子を御世話であつたと感謝され、最後に自分にむかつて一巻の書を授けたまひ、頭上より神息を吹きこみたまふや、自分の腹部ことに臍下丹田は、にはかに暖か味を感じ、身魂の全部に無限無量の力を與へられたやうに覺えた。

## 第七章 幽廳の審判〔七〕

ここに大王の聽許をえて、自分は産土神、芙蓉仙人とともに審判廷の傍聽をなすことを得た。仰ぎ見るばかりの高座には大王出御あり、二三尺下の座には、形相すさまじき冥官らが列座してゐる。最下の審判廷には數多の者が土下座になつて畏まつてゐる。見わたせば自分につづいて大蛇の川をわたつてきた旅人も、すでに多數の者の中に混じりこんで審判の言ひ渡しを待つてゐる。日本人ばかりかと思へば、支那人、朝鮮人、西洋人なぞも澤山にゐるのを見た。自分はある川柳に、

唐人を入り込みにせぬ地獄の繪

といふのがある、それを思ひだして、この光景を怪しみ、仙人に耳語してその故を尋ねた。何と思つたか、仙人は頭を左右に振つたきり、一言も答へてくれぬ。自分も強て尋ねることを控へた。

ふと大王の容貌を見ると、アツと驚いて倒れむばかりになつた。そこを産土の神と仙人とが左右から支へて下さつた。もしこのときに二柱の御介抱がなかつたら、自分は氣絶したかも知れぬ。今まで温和優美にして犯すべからざる威嚴を具へ、美はしき無限の笑をたたへたまひし大王の形相は、たちまち眞紅と變じ、眼は非常に巨大に、口は耳のあたりまで引裂け、口内より火焰の舌を吐きたまふ。冥官また同じく形相すさまじく、面をあげて見る能はず、審判廷にはかに物凄さを増してきた。

大王は中段に坐せる冥官の一人を手招きしたまへば、冥官かしこまりて御前に出づ。大王は冥官に一卷の書帳を授けたまへば、冥官うやうやしく押いただき元の座に歸りて、一々罪人の姓名を呼びて判決文を朗讀するのである。番卒は順次

に呼ばれたる罪人を引きたてて幽廷を退く。現界の裁判のごとく豫審だの、控訴だの、大審院だのといふやうな設備もなければ、辨護人もなく、單に判決の言ひ渡しのみで、きはめて簡單である。自分は仙人を顧みて、

「何ゆゑに冥界の審判は斯くのごとく簡單なりや」

と尋ねた。仙人は答へて、

「人間界の裁判は常に誤判がある。人間は形の見へぬものには一切駄目である。

ゆゑに幾度も慎重に審査せなくてはならぬが、冥界の審判は三世洞察自在の神の審判なれば、何ほど簡單であつても毫末も過誤はない。また罪の輕重大小は、大蛇川を渡るとき着衣の變色によりて明白に判ずるをもつて、ふたたび審判の必要は絶無なり」

と教へられた。一順言ひ渡しがすむと、大王はしづかに座を立ちて、元の御居間に歸られた。自分もまた再び大王の御前に招ぜられ、恐る恐る顔を上げると、コハそもいかに、今までの恐ろしき形相は跡形もなく變らせたまひて、また元の温和にして慈愛に富める、美はしき御面貌に返つてをられた。神諭に、

□ 因縁ありて、昔から鬼神と言はれた、良の金神のそのままの御魂であるから、改心のできた、誠の人民が前へ参りたら、結構な、いふに言はれぬ、優しき神であれども、ちよつとでも、心に身欲がありたり、慢神いたしたり、思惑がありたり、神に敵対心のある人民が、傍へ出て参りたら、すぐに相好は變りて、鬼か、大蛇のやうになる恐い身魂であるぞよ」

と示されてあるのを初めて拜したときは、どうしても、今度の冥界にきたりて大王に對面したときの光景を、思ひ出さずにはをられなかつた。また教祖をはじめて拜顔したときに、その優美にして温和、かつ慈愛に富める御面貌を見て、大王の御顔を思ひ出さずにはをられなかつた。

大王は座より立つて自分の手を堅く握りながら、兩眼に涙をたたへて、

□ 三葉殿御苦勞なれど、これから冥界の修業の實行をはじめられよ。顯幽兩界のメシヤたるものは、メシヤの實學を習つておかねばならぬ。湯なりと進ぜたいは山々なれど、湯も水も修行中には禁制である。さて一時も早く實習にかかれよ」と御聲さへも濕らせたまふた。ここで産土の神は大王に、

『何分よろしく御頼み申し上げます』  
と仰せられたまま、後をもむかず再び高き雲に乗りて、いづれへか歸つてゆかれた。

仙人もまた大王に黙禮して、自分には何も言はず早々に退座せられた。跡に取りのこされた自分は少しく狼狽の體であつた。大王の御面相は、俄然一變してその眼は鏡のごとく光り輝き、口は耳まで裂け、ふたたび面を向けることができぬほどの恐ろしさ。そこへ先ほどの冥官が番卒を引連れ來たり、たちまち自分の白衣を脱がせ、灰色の衣服に着替させ、第一の門から突き出してしまつた。

突き出されて四邊を見れば、一筋の汚い細い道路に枯草が塞がり、その枯草が皆氷の針のやうになつてゐる。後へも歸れず、進むこともできず、横へゆかうと思へば、深い廣い溝が掘つてあり、その溝の中には、恐ろしい厭らしい蟲が充満してゐる。自分は進みかね、思案にくれてゐると、空には眞黒な怪しい雲が現はれ、雲の間から恐ろしい鬼のやうな物が睨みつめてゐる。後からは恐い顔した柿色の法被を着た冥卒が、穂先の十字形をなした鋭利な槍をもつて突き刺さうとす



る。止むをえず逃げるやうにして進みゆく。

四五丁ばかり往つた處に、橋のない深い廣い川がある。何心なく覗いてみると、何人とも見分けはつかぬが、汚い血とも膿ともわからぬ水に落ちて、身體中を蛭が集つて空身の無い所まで血を吸うてゐる。旅人は苦さうな悲しさうな聲でヒシつてゐる。自分もこの溝を越えねばならぬが、翼なき身は如何にして此の廣い深い溝が飛び越えられやうか。後からは赤い顔した番卒が、鬼の相好に化つて鋭利の槍をもつて突刺さうとして追ひかけてくる。進退これきはまつて、泣くにも泣けず煩悶してをつた。にはかに思ひ出したのは、先ほど産土の神から授かつた一巻の書である。懷中より取出し押しいただき披いて見ると、畏くも「天照大神、惟神靈幸倍坐世」と筆蹟、墨色ともに、美はしく鮮かに認めてある。自分は思はず知らず「天照大神、惟神靈幸倍坐世」と唱へたとたんに、身は溝の向ふへ渡つてをつた。

番卒はスゴスゴと元の途へ歸つてゆく。まづ一安心して歩を進めると、にはかに寒氣酷烈になり、手足が凍えてどうすることも出来ぬ。かかるところへ現はれ

たのは黄金色の光であつた。ハツと思つて自分が驚いて見てゐるまに、光の玉が脚下二三尺の所に、忽然として降つてきた。

## 第八章 女神の出現（八）

不思議に堪へずして、自分は金色燦爛たる珍玉の明光を拜して、何となく力強く感じられ、眺めてゐた。次第々に玉は大きくなるとともに、水晶のごとくに澄みきり、たちまち美はしき女神の御姿と變化した。全身金色にして佛祖のいはゆる、紫摩黄金の肌で、その上に玲瓏透明にましまし、白の衣裳と、下は緋の袴を穿ちたまふ、愛情あふるるばかりの女神であつた。女神は、自分の手を取り笑を含んで、

「われは大便所の神なり。汝に之を捧げむ」  
と言下に御懐中より、八寸ばかりの比禮を自分の左手に握らせたまひ、再會を約

して、また元のごとく金色の玉となりて中空に舞ひ上り、電光石火のごとく、九重の雲深く天上に歸らせたまうた。

その當時は、いかなる神様なるや、また自分にたいして何ゆゑに、かくのごとき珍寶を、かかる寂寥の境域に降りて、授けたまひしやが疑問であつた。しかし參綾後はじめて氷解ができた。

教祖の御話に、

「金勝要神は、全身黄金色であつて、大便所に永年のあひだ落され、苦勞艱難の修行を積んだ大地の金神様である。その修行が積んで、今度は世に出て、結構な御用を遊ばすやうになりたのであるから、人間は大便所の掃除から、歡んで致すやうな精神にならぬと、誠の神の御用はできぬ。それに今の人民さんは、高い處へ上つて、高い役をしたがるが、神の御用をいたすものは、汚穢所を、美しくするのを樂んで致すものでないと、三千世界の洗濯、大掃除の御用は、到底勤め上りませぬ」

との御言葉を承はり、かつ神諭の何處にも記されたるを拜して、奇異の感に打た

れ、神界の深遠微妙なる御經綸に驚いた。

女神に別れ、ただ一人、太陽も月も星も見えぬ山野を深く進みゆく。

山深く分け入る吾は日も月も

星さへも見ぬ狼の聲

冷たい途の傍に沼とも、池とも知れぬ汚い水溜りがあつて、その水に美しい三十歳餘りの青年が陥り、諸々の蟲に集られ、顔はそのままであるが首から下は全部蚯蚓になつてしまひ、見るまに顔までがすつかり數萬の蛆蟲になつてしまつた。私は思はず、「天照大神、産土神、惟神靈幸倍坐世」と二回ばかり繰返した。不思議にも元の美しい青年になつて、その水溜りから這ひ上り、嬉しさうな顔して禮を述べた。その青年の語るところによると、  
龍女を犯した祖先の罪によつて、自分もまた悪い後繼者となつて龍女を犯しました。その罪によつて、かういふ苦しみを受くることになつたのであります。

今、あなたの神文を聞いて忽ちこの通りに助かりました」といつて感謝する。

それから自分は、天照大神の御神號を一心不亂に唱へつつ前進した。月もなく、鳥もなく、霜は天地に充ち、寒さ酷しく膚を斷るごとく、手も足も棒のやうになり息も凍らむとする時、またもや「天照大御神、惟神靈幸倍坐世」と口唱し奉つた。不思議にも言靈の神力著しく、たちまち全身に暖を覚え、手も足も湯に入りしごとくとなつた。

ア、地獄で神とは、このことであると、感謝の涙は瀧と流るるばかりであつた。四五十丁も辿り行くと、そこに一つの斷崖に衝き當る。止むをえず、引き返さむとすれば鋭利なる槍の尖が、近く五六寸の處にきてゐる。この上は神に任し奉らむと決意して、氷に足をすべらせつつ右手を見れば、深き谷川があつて激潭飛沫、流聲物すごき中に、名も知れぬ見た事もなき恐ろしき動物が、川へ落ちたる旅人を口にくはへて、谷川の流に浮いたり、沈んだり、旅人は「助けて助けて」と、一點張に叫んでゐる。自分は、ふたたび神號を奉唱すると、旅人をくはへてゐた

怪物の姿は沫と消えてしまった。

助かつた旅人の名は舟木といふ。彼は喜んで自分の後に跟いてきた。一人の道連れを得て、幾分か心は丈夫になつてきた。危き斷崖を辛うじて五六十丁ばかり進むと、途が無くなつた。薄暗い途を行く二人は、ここに停立して思案にくれてゐた。さうすると何處ともなく大聲で、

「ソレ彼ら二人を、免がすな」

と呼ぶ。にはかに騒々しき物音しきりに聞え來たり、口の巨大なる怪物が幾百ともなく、二人の方へ向つて襲ひくる様子である。二人は進退これ谷まり、いかがはせむと狼狽の體であつた。何ほど神號を唱へても、少しも退却せずますます迫つてくる。今まで怪物と思つたのが、不思議にもその面部だけは人間になつてしまつた。その中で巨魁らしき魔物は、たちまち長劍を揮つて兩人に迫りきたり、今や斬り殺されむとする刹那に、白衣金膚の女神が、ふたたびその場に光りとともに現はれた。そして、「比禮を振らせたまへ」と言つて姿は忽ち消えてしまつた。懷中より神器の比禮を出すや否や、上下左右に被つた。怪物はおひおひと遠

く退却する。ヤレ嬉しやと思ふまもなく、忽然として大蛇が現はれ、巨口を開いて兩人を呑んでしまった。兩人は大蛇の腹の中を探り探り進んで行く。今まで寒さに困つてゐた肉體は、どこともなく、暖い湯に浴したやうな心持であつた。轟然たる音響とともに幾百千丈ともわからぬ、奈落の底へ落ちゆくのであつた。ふと氣がつけば幾千丈とも知れぬ、高い瀧の下に兩人は身を横たへてゐた。自分の周圍は氷の柱が、幾萬本とも知れぬほど立つてをる。兩人は、この高い瀑布から、地底へ急轉直落したことを覺つた。一寸でも、一分でも身動きすれば、冷きつた氷の劍で身を破る。起きるにも起きられず、同伴の舟木を見ると、魚を串に刺したやうに、長い鋭い氷劍に胸のあたりを貫かれ、非常に苦しんでゐる。自分分は満身の力をこめて、「アマテラスオホミカミサマ」と、一言づつ切れ切れに、やうやくにして唱へ奉つた。神徳たちまち現はれ、自分も舟木も身體自由になつてきた。今までの瀑布は、どこともなく、消え失せて、ただ茫茫たる雪の原野と化してゐた。

雪の中に、幾百人とも分らぬほど人間の手や足や頭の一部が出てゐる。自分の

頭の上から、にはかに山嶽も崩るばかりの響がして、雪塊が落下し來り、自分の全身を埋めてしまふ。にはかに比禮を振らうとしたが、容易に手がいふことをきかぬ。丁度鐵でこしらへた手のやうになつた。一生懸命に「惟神靈幸倍坐世」を漸く一言づつ唱へた。幸に自分の身體は自由が利くやうになつた。四邊を見れば、舟木の全身が、また雪に埋められ、頭髮だけが現はれてゐる。その上を比禮をもつて二三回左右と振りまはすと、舟木は苦しさうな顔をして、雪中から全身をあらはした。天の一方より、またまた金色の光現はれて二人の身邊を照した。原野の雪は、見渡すかぎり、一度にパツト消えて、短い雑草の原と變つた。

あまたの人々は満面笑を含んで自分の前にひれ伏し、救主の出現と一齊に感謝の意を表し、今後は救主とともに、三千世界の神業に参加奉仕せむことを希望する人々も澤山あつた。その中には實業家もあれば、教育家もあり、醫者や、學者も、澤山に混つてをつた。

以上は、水獄の中にて第一番の處であつた。第二段、第三段となると、こんな軽々しき苦痛ではなかつたのである。自分は、今この時のことを思ひだすと、慄



然として肌に粟を生ずる次第である。

## 第九章 雑草の原野（九）

雑草の原野の状況は、實に殺風景であつた。自分は、いつしか又一人となつてみた。頭の上からザラザラと怪しい音がする。何心なく仰向くとたんに兩眼に焼砂のやうなものが飛び込み、眼を開くこともできず、第一に眼の球が焼けるやうな痛さを感じるとともに四面暗黒になつたと思ふと、何物とも知らず自分の左右の手を抜けんばかりに曳くものがある。また兩脚を左右に引き裂かうとする。なんと形容のできぬ苦しきである。頭上からは冷たい冷たい氷の刃で梨割りにされる。百雷の一時に轟くやうな音がして、地上は波のやうに上下左右に激動する。怪しい、いやらしい、悲しい聲が聞える。自分は一生懸命になつて、例の「アマテラスオホミカミ」を、切れぎれに漸つと口唱するとたんに、天地開明の心地し

て目の痛もなほり、不思議や自分は女神の姿に化してゐた。

舟木ははるかの方から、比禮を振りつつ此方へむかつて歸つてくる。その姿を見たときの嬉しさ、二人は再會の歡喜に充ち、暫時休息してゐると、後より「松」といふ惡鬼が現はれ、光すさまじき氷の刃で切つてかかる。舟木はただちに比禮を振る、自分は神名を唱へる。惡鬼は二三の同類とともに足早く南方さして逃げてゆく。

どこからともなく「北へ北へ」と呼ばはる聲に、機械のごとく自分の身體が自然に進んで行く。そこへ「坤」といふ字のついた、王冠をいただいた女神が、小松林といふ白髮の老人とともに現はれて、一本の太い長い筆を自分に渡して姿を隠された。見るまに不思議やその筆の筒から硯が出る、墨が出る、半紙が山ほど出てくる。そして姿は少しも見えぬが、頭の上から「筆を持って」といふ聲がする。二三人の童子が現はれて硯に水を注ぎ墨を摺つたまま、これも姿をかくした。

自分は立派な女神の姿に變化したままで、一生懸命に半紙にむかつて機械的に筆をはしらす。ずるぶん長い時間であつたが、冊數はたしかに五百六十七であつ

たやうに思ふ。そこへにはかに何物かの足音が聞えたと思ふまもなく、前の「中」といふ鬼が現はれ、槍の先に數十冊づつ突き刺し、をりからの暴風目がけ中空に散亂させてしまつた。さうすると、又もや數十冊分の同じ容積の半紙が、自分の前にとこからともなく湧いてくる。また是も筆をはしらすねばならぬやうな氣がするので、寒風の吹きすさぶ野原の枯草の上に坐つて、凹凸のはなはだしい石の机に紙を伸べ、左手に押さへては、セツセと何事かを書いてゐた。そこへ今度は眼球の四ツある怪物を先導に、「平」だの、「中」だの、「木」だの、「後」だの、「田」だの、「竹」だの、「村」だの、「與」だの、「藤」だの、「井」だのの印の入つた法被を着た鬼がやつてきて、残らず引さらへ、二三丁先の草の中へ積み重ねて、これに火をかけて焼く。

そこへ、「西」といふ色の蒼白い男が出てきて、一抱へ抜きだして自分の前へ持つてくる。鬼どもは一生懸命に「西」を追ひかけてくる。自分が比禮をふると驚いて皆逃げてゆく。火は大變な勢で自分の書いたものを灰にしてゐる。黒い煙が龍の姿に化つて天上へ昇つてゆく。天上では電光のやうに光つて、數限りなき

星と化してしまつた。その星明りに「西」は書類を抱へて、南の空高く姿を雲に隠した。女神の自分の姿は、いつとはなしに又元の囚人の衣に復つてをつた。俄然寒風吹き荒み、齒はガチガチと震うてきた。そして何だかおそろしいものに、襲はれたやうな寂しい心持がしだした。

## 第一〇章 二段目の水獄（一〇）

自分は寒さと寂しさにただ一人、「天照大神」の神號を唱へ奉ると、にはかに全身暖かくなり、空中に神光輝きわたる間もなく、芙蓉仙人が眼前に現はれた。あまりの嬉しさに近寄り抱付かうとすれば、仙人はつひに見たこともない險惡な顔色をして、

「いけませぬ。大王の命なれば、三ツ葉殿、吾に近寄つては今までの修業は水泡に歸すべし。これにて一段目は大略探險されしならむ。第二段の門扉を開くため

に來たれり」

と言ひも終らぬに、早くもギーと怪しい音がした一刹那、自分は門内に投込まれてゐた。仙人の影はそこらに無い。

ヒヤヒヤとする氷結した暗い途を倒つ轉びつ、地の底へ地の底へとすべりこんだ。暗黒で何一つ見えぬが、前後左右に何とも言へぬ苦悶の聲がする。はるか前方に、女の苦しさうな叫び聲が聞える。血醒さい臭氣が鼻を衝いて、胸が悪くて嘔吐を催してくる。たちまち脚元がすべつて、何百間とも知れぬやうな深い地底へ急轉直落した。腰も足も頭も顔も岩角に打たれて血塗になつた。神名を奉唱すると、自分の四邊數十間ばかりがややや明るくなつてきた。自分は身體一面の傷を見て大いに驚き「惟神靈幸倍坐世」を二度繰返して、手に息をかけ全身を撫でさすつてみた。神徳たちまち現はれ、傷も痛みも全部恢復した。ただちに大神様に拍手し感謝した。言靈の神力で四邊遠く暗は晴れわたり、にはかに陽氣づいてきた。

再び上の方で、ギーと音がした瞬間に、十二三人の男女が轉落して自分の脚

下に現はれ、「助けて助けて」としきりに合掌する。自分は比禮をその頭上目がけて振つてやると、たちまち起きあがり「三ツ葉様」と叫んで、一同聲を合して泣きたてる。一同の中には宗教家、教育家、思想家、新聞雑誌記者、藥種商、醫業者も混つてゐた。一同は氷の途をとぼとぼと自分の背後からついてくる。

## 第一章 大幣の靈驗（一一一）

一歩々々辛うじて前進すると、廣大な池があつた。池の中には全部いやらしい毛蟲がウザウザしてをる。その中に混つて馬の首を四ツ合せたやうな顔をした蛇體で角が生えたものが、舌をペロペロ吐き出してをる。この廣い池には、細い細い氷の橋が一筋長く向ふ側へ渡してあるばかりである。後から「松」「中」「畑」といふ鬼が十字形の尖つた槍をもつて突きにくるので、前へすすむより仕方はない。十人が十人ながら、池へすべり落ちて毛蟲に刺され、どれもこれも全身腫あが

つて、痛さと寒さに苦悶の聲をしばらく、蟲の鳴くやうに呻つてをる状態は、ほとんど瀕死の病人同様である。その上、怪蛇が一人々々カブツとくはへては吐きだし、骨も肉も搾つたやうにいぢめてをる。自分もこの橋を渡らねばならぬ。自分は幸に首尾よく渡りうるも、連の人々はどうするであらうかと心配でならぬ。躊躇逡巡進みかねたるところへ、「三葉殿」と頭の上から優しい女の聲が聞えて、たちまち一本の大幣が前に降つてきた。手早く手にとつて、思はず「被戸大神被ひたまへ清めたまへ」と唱へた。廣い池はたちまち平原と化し、鬼も怪蛇も姿を消してしまつた。數萬人の老若男女の幽體はたちまち蘇生したやうに元氣な顔をして、一齊に「三ツ葉様」と叫んだ。その聲は、天地も崩れんばかりであつた。各人の産土の神は綺羅星のごとくに出現したまひ、自分の氏子々々を引連れ、歡び勇んで歸つて行かれる有難さ。

自分は比禮の神器を舟木に渡して、困つてをつたところへ、金勝要神より、大幣をたまはつたので、百萬の援軍を得たる心地して、名も知れぬ平原をただ一人またもや進んで行く。

一つの巨大な洋館が、儼然として高く雲表にそびえ立つてをる。門口には厳めしき冥官が鏡のやうな眼を見張つて、前後左右に首をめぐらし監視してをる。部下の冥卒が數限りもなく現はれ、各自に亡人を酷遇するその光景は筆紙につくされない慘酷さである。自分は大幣を振りながら、館内へ歩をすすめた。冥卒も、冥卒もただ黙して自分の通行するの知らぬふうをしてゐる。「キヤツキヤツ」と叫ぶ聲にふりかへると、澤山の婦女子が口から血を吐いたり、槍で腹部を突き刺されたり、赤兒の群に全身の血を吸はれたり、毒蛇に首を捲かれたりして、悲鳴をあげ七轉八倒してゐた。冥卒が竹槍の穂で、頭といはず、腹といはず、身體處かまはず突きさす恐ろしさ、血は流れて瀧となり、異臭を放ち、慘状目もあてられぬ光景である。またもや大幣を左右左に二三回振りまはした。今までのすさまじき幕はとざされ、婦女子の多勢が自分の脚下に涙を流して集まりきたり、中には身體に口をつけ「三ツ葉様、有難う、辱なう」と、異口同音に嬉し泣きに泣いてをる。一天たちまち明光現はれ、各人の産土神は氏子を伴なひ、合掌しながら、光とともにどこともなく歸らせたまうた。天の一方には歡喜にみちた聲が聞



える。聲は次第に遠ざかつて終には風の音のみ耳へ浸みこむ。

## 第二篇 幽界より神界へ

### 第一二章 顯幽一致（一一一）

自分が高熊山中における、顯界と、靈界の修業の間に、親しく實踐したる大略の一端を略述してみたのは、眞の一小部分に過ぎない。

すべて宇宙の一切は、顯幽一致、善惡一如にして、絶對の善もなければ、絶對の惡もない。従つてまた、絶對の極樂もなければ、絶對の苦難もないといつて良いくらゐだ。歡樂の内に艱苦があり、艱苦の内に歡樂のあるものだ。ゆゑに根の

國、底の國に墜ちて、無限の苦惱を受けるのは、要するに、自己の身魂より産出したる報いである。また顯界の者の靈魂が、常に靈界に通じ、靈界からは、常に顯界と交通を保ち、幾百千萬年といへども易ることはない。神諭に、……天國も地獄も皆自己の身魂より顯出する。故に世の中には悲觀を離れた樂觀はなく、罪惡と別立したる眞善美もない。苦痛を除いては、眞の快樂を求められるものでない。また凡夫の他に神はない。言を換えていへば善惡不二にして正邪一如である。……佛典にいふ。「煩惱即菩提。生死即涅槃。娑婆即淨土。佛凡本來不二」である。神の道からいへば「神俗本來不二」が眞理である。

佛の大慈悲といふも、神の道の恵み幸はひといふも、凡夫の欲望といふのも、その本質においては大した變りはない。凡俗の持てる性質そのままが神であるといつてよい。神の持つてをらるる性質の全體が、皆ことごとく凡俗に備はつてをるといつてもよい。

天國淨土と社會娑婆とは、その本質において、毫末の差異もないものである。かくの如く本質においては全然同一のものでありながら、何ゆゑに神俗、淨穢、

正邪、善悪が分るのであらうか。要するに此の本然の性質を十分に發揮して、適當なる活動をする、せぬとの程度に對して、附したる假定的の符號に過ぎないのだ。

善悪といふものは決して一定不變のものではなく、時と處と位置によつて、善も悪となり、惡も善となることがある。

道の大原にいふ。「善は天下公共のために處し、惡は一人の私有に所す。正心徳行は善なり、不正無行は惡なり」と。何ほど善き事といへども、自己一人の私に所するための善は、決して眞の善ではない。たとへ少々ぐらゐ惡が有つても、天下公共のためになる事なれば、これは矢張善と言はねばならぬ。文王一たび怒つて天下治まる。怒るもまた可なり、といふべしである。

これより推し考ふる時は、小さい悲觀の取るに足らざるとともに、勝論外道の暫有的小樂觀もいけない。大樂觀と大悲觀とは結局同一に歸するものであつて、神は大樂觀者であると同時に、大悲觀者である。

凡俗は小なる悲觀者であり、また小なる樂觀者である。社會、娑婆、現界は、

小苦小樂の境界であり、靈界は、大樂大苦の位置である。理趣經には、「大貪大癡是れ三摩地、是れ淨菩提、淫欲是道」とあつて、いはゆる當相即道の眞諦である。

禁欲主義はいけぬ、戀愛は神聖であるといつて、しかも之を自然主義的、本能的で、すなはち自己と同大程度に決行し、満足せむとするのが凡夫である。これを擴充して宇宙大に實行するのが神である。

神は三千世界の蒼生は、皆わが愛子となし、一切の萬有を濟度せむとするの、大欲望がある。凡俗はわが妻子眷屬のみを愛し、すこしも他を顧みないのみならず、自己のみが満足し、他を知らざるの小貪欲を擅にするものである。人の身魂そのものは本來は神である。ゆゑに宇宙大に活動し得べき、天賦的本能を具備してをる。それで此の天賦の本質なる、智、愛、勇、親を開發し、實現するのが人生の本分である。これを善惡の標準論よりみれば、自我實現主義とでもいふべきか。吾人の善惡兩様の動作が、社會人類のため濟度のために、そのまま賞罰二面の大活動を呈するやうになるものである。この大なる威力と活動とが、すなはち

神であり、いはゆる自我の宇宙的擴大である。

いづれにしても、この分段生死の肉身、有漏雑染の識心を捨てず、また苦穢濁惡不公平なる現社會に離れずして、ことごとく之を美化し、樂化し、天國淨土を眼前に實現せしむるのが、吾人の成神觀であつて、また一大眼目とするところである。

(大正一〇・二・八 王仁)

### 第一三章 天使の來迎〔一三〕

自分はなほ進んで二段目を奥深く究め、また三段目をも探險せむとした時、にはかに天上から何ともいへぬ嚙曉たる音樂が聞えてきた。

そこで空を仰いでみると、白衣盛装の天使が數人の御供を伴れて、自分の方にむかつて降臨されつつあるのを拜んだ。さうすると何十里とも知れぬ、はるか東

南なんの方ほうに當あたつて、ほんのちひ小さい富士ふじの山頂さんちやうが見みえてくるやうな氣きがした。

自分じぶんのその時ときの心持こころもちは、富士山ふじさんが見みえたのであるから、富士山ふじさんの芙蓉仙人ふようせんじんが來きたものと思おもつた。しかししてその前まへに降りおりてきた天使てんしを見みると、實じつに何なんとも言いへぬ威嚴ゐげんのある、かつ優やさしい白髮はくはつの、そして白鬚しらひげを胸前むなさきまで垂たれた神人しんじんであつた。

神人しんじんは自分じぶんに向むかつて、

「産土神うぶすなのかみからの御迎おむかへであるから、一時いちじ歸かへるがよい」

との仰あふせであつた。しかし自分じぶんは折角せつかくここまで來きたのだから、今いま一度いちど詳くはしく調しらべてみたいと御願おねがひしてみた。

けれども御許おゆるしがなく、

「都合つがふによつて天界てんかいの修業しうげふが急いそぐから、一ひとまづ歸かへれ」

と言いはるる其その言葉ことばが未だ終まらぬうちに、紫むらさきの雲くもにわが全身ぜんしんが包つつまれて、ほとんど三四十分さんしじつぶんと思おもはるる間あひだ、ふわりふわりと上うへに昇のぼつてゆくやうな氣きがした。しかしてにはかに膝ひざが痛いたみだし、ブルブルと身體からだが寒さむさに慄ふるへてゐるのを覺おぼえた。

その時ときには、まだ精神せいしんが朦朧もうろうとしてゐたから、よくは判わからなかつたが、まもな

く自分は高熊山の巖窟の前に端坐してゐることに、明瞭と氣が付いた。

それから約一時間ばかり正氣になつてをると、今度はだんだん睡氣を催してきたり、ふたたび靈界の人となつてしまつた。さうすると其處へ、小幡神社の大神として現はれた神様があつた。

それは自分の産土の神様であつて、

「今日は實に靈界も切迫し、また現界も切迫して來てをるから、一まづ地底の幽冥界を探究する必要はあるけれども、それよりも神界の探險を先にせねばならぬ。またそれについては、靈肉ともに修業を積まねばならぬから、神界修業の方に向へ」

と仰せられた。そこで自分は、

「承知しました」

と答へて、命のまにまに隨ふことにした。

さうすると今度は自分の身體を誰とも知らず、非常に大きな手であたかも鷹が雀を引摺んだやうに、捉まへたものがあつた。

やがて降おろされた所ところを見ると、ちやうど三保みほの松原まつばらかと思おもはるやうな、綺麗きれいな海邊うみべに出でてゐた。ところが先さきに二段目にだんめで見た富士山ふじさんが、もつと近くちかに大きく見みえだしたので、今いまそれを思おもふと三穗神社みほのじんしゃだと思おもはれる所ところに、ただ一人ひとり行いつたのである。すると其處そこに二人ふたりの夫婦ふうふうの神様かみさまが現あらはれて、天然笛てんねんぶえと鎮魂ちんこんの玉たまとを授さづけて下さつたので、それを有難ありがたく頂戴ちやうだいして懐ふところに入いれたと思おもふ一刹那いちせつな、にはかに場面ばめんが變かはつてしまひ、不思議ふしぎにも自分じぶんの郷里きやうりにある産土神社うぶすなじんしゃの前まへに、身體しんたいは端坐たんざしてゐたのである。

ふと氣きがついて見みると、自分じぶんの家いへは「ついで」そこであるから、一遍いっぺん歸宅かへつて見みたいやうな氣きがしたとたんにはかに足あしが痛いたくなり、寒さむくなりして空腹くうぶくを感じかんじ、親兄弟姉妹おやきやうだいしまいの事ことから家政上かせいじやうの事ことまで憶おもひ出だされてきた。さうすると天使てんしが、  
□ 御身おんみが今人間いまにんげんに復かへつては、神かみの經綸しぐみができぬから神かみにかへれ  
□ と言いひながら、白布しらぬのを全身ぜんしんに覆おほひかぶされた。不思議ふしぎにも心こころに浮うかんだ種々しゆじゆの事ことは打忘うちわすれ、いよいよこれから神界しんかいへ旅立たびだつといふことになつた。しかして其その時とき持もつてをるものとは、ただ天然笛てんねんぶえと鎮魂ちんこんの玉たまとの二つふたのみで、しかも何時いつのまに



か自分は羽織袴の黒装束になつてゐた。その處へ今一人の天使が、産土神の横に現はれて、教へたまふやう、

「今や神界、幽界ともに非常な混亂状態に陥つてをるから、このまま放つておけば、世界は丸潰れになる」

と仰せられ、しかして、

「御身はこれから、この神の命ずるがままに神界に旅立ちして高天原に上るべし」と嚴命された。

しかしながら自分は、高天原に上るには何方を向いて行けばよいか判らぬから、何を目標として行けばよいか、また神様が伴って行つて下さるのか」

とたづねてみると、

「天の八衢までは送つてやるが、それから後は、さうはゆかぬから天の八衢で待つてをれ。さうすると神界の方すなはち高天原の方に行くには、鮮花色の神人が立つてをるからよくわかる。また黒い黒い何ともしれぬ嫌な顔のものが立つてをる方は地獄で、黄膽病みのやうに黄色い顔したものが立つてゐる方は餓鬼道で、

また眞蒼な顔のものが立つてをる方は畜生道で、肝癢筋を立てて鬼のやうに怖ろしい顔のものが立つてゐる方は修羅道であつて、争ひばかりの世界へゆくのだ』  
と懇切に教示され、また、

『汝が先に行つて探險したのは地獄の入口で、一番易い所であつたのだ。それでは今度は鮮花色の顔した神人の立つてゐる方へ行け。さうすればそれが神界へゆく道である』

と教へられた。しかして又、

『神界といへども苦しみはあり、地獄といへどもそれ相當の樂しみはあるから、神界だからといつてさう良い事ばかりあるとは思ふな。しかし高天原の方へ行く時の苦しみは苦しんだだけの効果があるが、反對の地獄の方へ行くのは、昔から其の身魂に罪業があるのであるから、單に罪業を償ふのみで、苦勞しても何の善果も來さない。もつとも、地獄でも苦勞をすれば、罪業を償ふといふだけの効果はある。またこの現界と靈界とは相關聯してをつて、いはゆる靈體不二であるから、現界の事は靈界にうつり、靈界の事はまた現界にうつり、幽界の方も現界の

肉體にくたいにうつつてくる。ここになほ注意ちゅういすべきは、神界しんかいにいたる道みちにおいて神界しんかいを  
占領せんりやうせむとする悪魔あくまがあることである。それで汝なんぢが今いま、神界しんかいを探險たんけんせむとすれば  
必ずかならず悪魔あくまが出てきて汝なんぢを妨げさまたげ、悪魔あくま自身じしん神界しんかいを探險たんけん占領せんりやうせむとしてをるから、そ  
れをさうさせぬやうに、汝なんぢを神界しんかいへ遣つかはされるのだ。また神界しんかいへいたる道路みちにも、  
廣ひろい道路みちもあればまた狭せまい道路みちもあつて、決して廣ひろい道路みちばかりでなく、あたか  
も瓢箪へうたんを「いくつ」も豎たてに列ならべたやうな格好かくかうをしてゐるから、細ほそい狭せまい道路みちを通とほ  
つてゐるときには、「たつた」一人ひとりしか通とほれないから、悪魔あくまといへども後あとから追おひ  
越こすといふわけには行ゆかぬが、廣ひろい所ところへ出でると、四方しほう八方はつぱうから悪魔あくまが襲おそつて來く  
るので、かへつて苦くるしめられることが多いおほい。  
と教をしへられた。間まもなく、神様かみさまの天使てんしは姿すがたを隠かくさせたまひ、自分じぶんはただ一人ひとり天然てんねん  
笛ぶえと鎮魂ちんこんの玉たまを持もち、天蒼てんあをく水青みづあをく、山やままた青あをき道路みちを羽織袴はおりはかまの装束しやうぞくで、神界しんかい  
へと旅立たびだちすることとなつた。

(大正一〇・一〇・一八 舊九・一八 外山豊二録)

第一四章 神界旅行の一（一四）

瓢箪のやうな細い道をただ一人なんとなく心急はしく進んでゆくと、背後の山の上から數十人の叫び聲が誰を呼ぶともなしに聞えてくる。

そこで何がなしに後をふり返つて見ると、最早二三丁も來たと思つたのに、いつの間にか、また元の八衢に返つてゐた。そこには地獄へ墜ちて行くものと見えて、眞黒の汚い顔をしたものが打ち倒れてゐる。これは現界で今肉體が息を引取つたもので、その幽體がこの所に横たはつたのであり、また先の大きな叫び聲は、親族故舊が魂呼びをしてをる聲であることが分つた。さうすると見てをる間に、その眞黒い三十五六の男の姿が何百丈とも知れぬ地の底へ、地が割れると共に墜ち込んでしまつた。これが自分には不審でたまらなかつた。といふのは、地獄に行くのには相當の道がついてをる筈である。しかるに、忽ち急轉直下の勢で地の底へ墜ちこむといふのが、不思議に思はれたからである。とに角かういふふうになる人を現界の肉體から見れば、腦充血とか腦溢血とか心臓破裂とかの病氣で、

遺言もなしに頓死したやうなものである。そこで天然笛を吹いてみた。天の一方から光となつて芙蓉仙人が現はれ給うた。

「一體地獄といふものには道は無いのでせうか」  
とたづねてみた。仙人いふ。

「この者は前世においても、現世においても悪事をなし、殊に氏神の社を毀つた大罪がある。それは舊い社であるからといふて安價で買取り、金物は賣り、材木は焼き棄てたり、または薪の代りに焚いたりした。それから一週間も経たぬまに病床について、黒死病のごときものとなつた。それがため息を引取るとともに、地が割れて奈落の底へ墜ち込んだのである。すなはちこれは地獄の中でも一番罪が重いので、口から血を吐き泡を吹き、虚空を掴んで悶え死に死んだのだ。しかもその肉體は傳染の憂ひがあるといふので、上の役人がきて石油をかけ焼き棄てられた」

との答へである。そこで自分は、

「悶え死をしたものは何故かういふふうに直様地の底へ墜ちるのでせうか」

と尋ねてみた。仙人は答へて、

「すべて人は死ぬと、死有から中有に、中有から生有といふ順序になるので、現界で息を引取るとともに死有になり、死有から中有になるのは殆ど同時である。それから大抵七七四十九日の間を中有といひ、五十日目から生有と言つて、親が定まり兄弟が定まるのである。ただし元來そこには山河、草木、人類、家屋のごとき萬有はあれども、眼には觸れず單に親兄弟がわかるのみで、そのときの、幽體は、あたかも三才の童子のごとく縮小されて、中有になると同時に親子兄弟の情が、靈覺的に湧いてくるのである。」

さうして中有の四十九日間は幽界で迷つてをるから、この間に近親者が十分の追善供養をしてやらねばならぬ。又これが親子兄弟の務めである。この中有にある間の追善供養は、生有に多大の關係がある。すなはち大善と大惡には中有なく、大善は死有から直ちに生有となり、大惡はただちに地獄すなはち根底の國に墜ちる。ゆゑに眞に極善のものは眠るがごとく美しい顔をしたまま國替して、ただちに天國に生まれ變るのである。また大極惡のものは前記のごとき徑路をとつて、

悶え苦しみつつ死んで、ただちに地獄に墜ちて行くのである。』  
と。自分はそれだけのことを聞いて、高天原の方へむかひ神界旅行にかからうとした。ところが顔一杯に凸凹のできた妙な婦人が、八衢の中心に忽然として現はれた。自分の姿を見るなり、長い舌をペロリと吐きだし、ことさらに凹んだ眼の玉を、ギロギロと異様に光らせながら、足早に神界の入口さして一目散に駆けだした。

自分は……變な奴が出てきたものだ、一つ跡を追って彼の正體を見届けてくれむ……と、やや好奇心にかられて、ドンドンと追跡した。かの怪女はほとんど空中を走るがごとく、一目散に傍の山林に逃込んだ。自分はとうとう怪女の姿を見失つてしまひ、途方にくれて芝生の上に腰を降し、鼬に最後屁を嗅されたやうな青白いつまらぬ顔をして、四邊の光景をキヨロキヨロと見まはしてゐた。どこともなく妙な聲が耳朶を打つた。

耳を澄まして考へてゐると、鳥の啼き聲とも、猿の叫び聲ともわからぬ怪しき聲である。恐いもの見たさに、その聞ゆる方向を辿つて荊を押しわけ、岩石を踏

み越え溪流を渡り、峻坂を攀ぢ登り、色々と苦心して漸く一つの平坦なる地點に  
驅けついた。

見ると最前みた怪女を中心ちゆうしんに、あまたの異様な人物らしいものが、何かしきりに  
囁き合つてゐた。自分は大木の蔭かげに身を潜めて、彼らの様子を熟視してゐると、  
中央ちゆうあうに座を構へた凸凹でこぼこの顔をした醜い女みにくの後方から、太いふとい尻尾しつぽが現はれた。  
彼はその尻尾をピヨンと左の方へ振つた。あまたの人三化七にんさんばけしちのやうな怪物が、そ  
の尻尾の向いたる方へ雪崩を打つて、一生懸命に驅け出した。

怪女はまたもや尻尾を右の方へ振つた。あまたの動物とも人間とも區別もつか  
ぬやうな怪物は、先を争ふやうにして又もや、右の方へ一目散に驅け出した。怪  
女はまたもや尻尾を天に向つてピヨンと振りあげた。

あまたの怪物は一齊に、天上目がけて投り上げられ、しばらくすると、その怪  
物は雨のごとくなつて降り來たり、あるひは溪谷に陥り、負傷をするものもあり、  
あるひは荆棘の叢くさむらに落込み全身を破り、血に塗れて行きも歸りもならず、苦悶し  
てをるのもあつた。中には大木にひつかかり、半死半生のていにて苦しき呻いて



あるのもある。中には墜落とともに頭骨を打ち挫き、鮮血淋漓として迸り、血の泉をなした。

怪女は、さも嬉しさうな顔色をあらはし、流るる血潮を片つ端から美味さうに呑んでゐた。怪女の體は見るみる太り出した。彼の額部には俄にニユツと二本の角が発生した。口はたちまち耳の邊まで裂けてきた。牙はだんだんと伸びて劍のやうに鋭く尖り、かつ、キラキラと光りだしてきた。

自分は神界の旅行をしてをるつもりなのに、なぜこんな鬼女のあるやうな處へ來たのであらうかと、胸に手をあてて暫く考へてゐた。前後左右に、怪しい、いやらしい身の毛の戦慄つやうな音がまたもや、耳を掠めるのである。自分はどうしても合點がゆかなかつた。途方にくれた揚句に、神様のお助けを願はうといふ心がおこつてきた。

自分は四邊の恐ろしいそして殊更に穢らはしい光景の、眼に觸れないやうにと思つて瞑目し静座して、大聲に天津祝詞を奏上した。ややあつて「眼を開け」と教ゆる聲が緩やかに聞えた。自分はあまりに眼前の光景の恐ろしさ、無残さを再

び目睹することが不快でたまらないので、なほも瞑目の態度を持ちつづけ、さうすると今度は、前とはやや大きな、そして少し尖りのあるやうな聲で、  
『迷ふなかれ、早く活眼を開いて、神世の莊嚴なる状況に眼を醒ませ』  
と叫ぶものがあつた。自分は心のうちにて妖怪變化の誑惑と思ひつめ、……そんなことに乗るものかい、尻でも喰へ……と素知らぬふうをして猶も瞑目をつづけた。

『迷へるものよ、時は近づいた。一時も早く眼を開いて、神界の經綸の容易ならざる實況を熟視せよ。神國は眼前に近づけり。されど眼なきものは、憐れなるかな。汝いつまで八衢に踏み迷ひ、神の命ずる神界の探險旅行に出立せざるや』  
と言ふものがある。自分は心の中で……神界旅行を試み、今かくのごとき不愉快なることを目撃してをるのに、神界の探險せよとは、何者の言ぞ。馬鹿を言ふな、古狸奴、大きな尻尾をさげて居よつて、俺が知らんと思つて居やがるか知らんが、おれは天眼通でチャンと看破してをるのだ。鬼化け狸に他人は欺されても、おれは貴様のやうな古狸には、誑らかされないぞ。見る眼も汚れる……と考へた。そ

うするとまた前のやうな聲に、すこし怒りを帯びたやうな調子で、  
「貴様は道知らぬ奴だ」と吠鳴る。

そのとたんに目を思はず開いて見ると、前の光景とは打つて變つた莊嚴無比の寶座が眼前に現はれた。その一刹那、松吹く風の音に氣がつくと、豈計らんや、自分は高熊山のガマ岩の上に端座してゐた。

(大正一〇・一〇・一八 舊九・一八 外山豊二録)

## 第一五章 神界旅行の二(一五)

神界の旅行と思つたのは自分の間違ひであつたことを覺り、今度は心を改め、好奇心を戒め一直線に神界の旅路についた。

細い道路をただ一人、足をはやめて側眼もふらず、神言を唱へながら進み行く。

そこへ「幸」といふ二十才くらの男と「琴」といふ二十二才ばかりの女とが突  
然現はれて、自分の後になり前になつて跟いてくる。そのとき自分は非常に力を  
得たやうに思ふた。

その女の方は今幽體となり、男の方はある由緒ある神社に、神官として仕へて  
をる。その兩人には小松林、正守といふ二柱の守護神が付随してゐた。そして小  
松林はある時期において、ある肉體とともに神界に働くことになられた。

細い道路はだんだん廣くなつて、そしてまた行くに従つてすぼんで細い道路に  
なつてきた。たとへば扇をひろげて天と天とを合せたやうなものである。扇の骨  
のやうな道路は、幾條となく展開してゐる。そのとき自分はどの道路を選んでよ  
いか途方に暮れざるを得なかつた。その道路は扇の骨と骨との隙間のやうに、兩  
側には非常に深い溝渠が掘られてあつた。

水は美しく、天は青く、非常に愉快であるが、さりとして少しも油断はできぬ。  
油断をすれば落ちこむ恐れがある。自分は高天原に行く道路は、平々坦々たるも  
のと思ふてゐたのに、かかる迷路と危険の多いには驚かざるを得ない。その中

でまづ正中と思ふ小徑を選んで進むことにした。

見渡すかぎり山もなく、何も無い美しい平原である。その道路を行くと幾つともなく種々の橋が架けられてあつた。中には荒廢した危ないものもある。さういふのに出會した時は、「天照大神」の御神名を唱へて、一足飛びに飛び越したこともあつた。

そこへ突然として現はれたのが白衣の男女である。見るまに白狐の姿に變つてしまつた。「琴」と「幸」との二人は同じくついてきた。急いで行くと、突然また橋のあるところに来た。橋の袂から眞黒な四足動物が四五頭現はれて、いきなり自分を橋の下の深い川に放り込んでしまつた。二人の連も、共に川に放りこまれた。

自分は道路の左側の溝を泳ぐなり、二人は道の右側の溝を泳いで、元の道路まで来た。前の動物は追かけ來たり、また飛びつかうと狙ふその時、たちまち二匹の白狐が現はれて動物を追ひ拂つた。三人はもとの扇形の處に歸り、衣服を乾かして休息した。その時非常なる大きな太陽が現はれて、瞬くまに乾いてしまつた。

三人は思はず合掌して、「天照大神」の御名を唱へて感謝した。

今度は三人が各自異なる道路をとつて進んだ。「幸」といふ男は左側の端を、

「琴」といふ女は右側の道路をえらんだ。それはまさかの時、この路なれば一方

が平原に續いてゐるから、その方へ逃げるための用意であつた。自分も中央の道

路を避けて三ツばかり傍の道路を進んだ。依然として兩側に溝がある。最前の失

敗に懲りて、兩側と前後に非常の注意を拂つて進んで行つた。横にもまた澤山の

溝があり、非常に堅固な石橋が架つてゐた。不思議にも今まで平原だと思つてゐ

たのに中途からそれが山になり、山また山に連なつた場面に變つてゐる。

さうして其の山は壁のやうに屹立し、鏡のやうに光つてゐるのみならず、滑つ

て足をかける餘地がない。さりとて引き返すのは残念であると途方にくれ、ここ

に自分は疑ひはじめた。これは高天原にゆく道路とは聞けど、或ひは地獄への道

路と間違つたのではあるまいかと。かう疑つてみると、どうしてよいか分らず、

進退谷まり吐息をつきながら、「天照大神」の御名を唱へ奉り、「惟神靈幸倍坐

世」を三唱した。

不思議にもその山は、少しなだらかになつて、自分は知らぬまに、山の中腹に達してゐる。幹の周り一丈に餘るやうな松や、杉や、檜の茂つてゐる山道を、どんだん進んで登ると大きな瀑布に出會した。白龍が天に登るやうな形をしてゐる。ともかくもその瀧で身を清めたいと、近よつて裸になり瀧に打たれてみた。たちまち自分の姿は瀑布のやうな大蛇になつてしまつた。自分はこんな姿になつてしまつたことを、非常に残念に思つてゐると、下の方から自分の名を大聲に呼ぶものがある。姿は眞黒な大蛇であつて、顔は「琴」といふ女の顔であつた。そして苦しさに、のた打ちまはつて暴れ狂ふてゐた。よくよく見ると大きな目の玉は血走つて巴形の血斑が兩眼の白いところに現はれてゐた。自分は蛇體になりながら、女を哀れに思ひ救ふてやりたいと考へてゐると、その山が急に大坂灣のやうな海に變つてしまつた。そのうちに「琴」女の大蛇が火を吐きながら、非常な勢で、浪を起して海中に水音たてて飛び込んだ。自分は水を吐きながら、後を追ひかけて同じく海に飛び入つて救ふてやらうとした。されど、あたかも十ノツトの軍艦で、三十ノツトの軍艦を追ふやうに速力及ばぬところから、だんだんかけ

離れて救ふてやる事ができない。そのうちに黒い大蛇はまつしぐらに泳いで遙かあなたへ行つて、黒い煙が立つたと思ふと姿は消えてしまつた。さうすると不思議にも海も山もなくなつて、自分はまた元の扇の要の道に歸つてゐた。

今度は決心して一番細い道路を行くことにした。そこには人が五六十人と思ふほど集まつてゐる。見るに目の悪いもの、足の立たないもの、腹の痛むものや、種々の病人がゐて何か一生懸命に祈つてゐる。

道路にふさがつて何を拜んでゐるかと思へば、非常に劫を経た古狸を人間が拜んでゐる。その狸は大きな坊主に見せてゐる。拜んでゐるものは、現體を持つた人間ばかりであつた。しかし一人も病氣にたいして何の效能もない。自分は狸坊主にむかつて鎮魂の姿勢をとると、その姿は煙のごとく消えてしまい、すべての人は皆病が癒えた。芙蓉仙人に聞いてみれば、古狸の靈が、僧侶と現はれて人を悩まし、そして自己を拜ましてゐたのであつた。その狸の靈を逐ひ拂つたとともに衆人が救はれ、盲人は見え、跛は歩み、靈は畜生道の仲間に入るのを助かつたのである。



衆人は非常に感謝して泣いて喜び、とり縋つて一歩も進ましてくれぬ。しかるに天の一方からは「進め、すすめ」の聲が聞えるので、天の石笛を吹くと、何も彼も跡形もなく消えて、扇の紙のやうな廣い平坦なところに進んでゐた。

(大正一〇・一〇・一八 舊九・一八 加藤明子録)

## 第一六章 神界旅行の三(一六)

扇でたとへると丁度骨を渡つて白紙のところへ着いた。ヤレヤレと一息して傍の芝生の上に身を横たへて一服してゐた。するとはるか遠く北方にあたつて、細い幽かな悲しい蚊の泣くやうな聲で、「オーイ、オーイ」と自分を呼びやらしい聲がしてきた。自分は思案にくれてゐると、南方の背後から四五人の聲で自分を呼び止める者がある。母や祖母や隣人の聲にどこか似てゐる。フト南方の聲に氣をひかれ氣が付けば、自分の身體はいつのまにか穴太の自宅へ歸つてゐた。

これは幽界のことだが、母の後に妙な顔をした、非常に悲しさうに、かつ立腹したやうな、一口に言へば怒つたのと泣いたのが一緒になつたやうな顔した者が付いてゐる。それが母の口を藉つていふには、

「今かうして老母や子供を放つておいて神界の御用にゆくのは結構だが、祖先の後を守らねばならぬ。それに今お前に出られたら、八十に餘る老母があり、たくさんさんの農事を自分一人でやらねばならぬ。とにかく思ひ止まつてくれ」  
と自分を引き止めて、行かさうとはささぬ。そこへまた隣家から「松」と「正」といふ二人が出てきて、祖先になり代つて意見すると言つて頻りに止める。二人は、

「お前、神界とか何とか言つたところで、家庭を一體どうするのだ」  
と喧しく言ひこめる。その時たちまち老祖母の衰弱した姿が男の神様に變つてしまつた。そして、

「汝は神界の命によつてするのであるから、小さい一身一家の事は心頭にかくるな。世界を此のままに放つておけば、混乱状態となつて全滅するより道はないか

ら、三千世界のために謹んで神命を拜受し、一時も早く此處を立ち去れよ」と戒められた。すると矢庭に「松」と「正」とが自分の羽織袴を奪つて丸裸になり、それから鎮魂の玉をも天然笛をも引たくつて池の中へ投げ込んでしまった。そこへ「幸」といふ男が出てきて、いきなり自分が裸になり、その衣服を自分に着せてくれ、天然笛も鎮魂の玉も池の中から拾うて私に渡してくれた。

自分は一切の執着を捨てて、神命のまにまに北へ北へと進んで、知らぬまに元の天の八衢へ歸つておつた。これは残念なことをしたと思つたが、もと来た道を「すう」と通つて、扇形の道を通りぬけ白紙の所へ辿りついた。その時、「幸」が白扇の紙の半ほどのところまで裸のまま送つて来たが、そこで何處ともなく姿を消してしまつた。やはり相變らず、細い悲しいイヤらしい聲が聞えて来る。その時、自分の身體は電氣に吸ひつけられるやうに、北方へ北方へと進んで行く。一方には大きな河が流れてあり、その河邊には面白い老松が竝んでゐる。左側には絶壁の山が屹立して、一方は河、一方は山で、其處をどうしても通らねばならぬ咽喉首である。その咽喉首の所へ行くと、地中から頭を又ツと差出し、つひに

は全身を顯はし、狭い道に立ち塞がつて、進めなくさせる男女のものがあつた。

そこで鎮魂の姿勢をとり天然笛を吹くと、二人の男女は温順な顔付にて、女は自分に一禮し、

「あなたは豫言者のやうに思ひますから、私の家へお入り下さいまし。色々お願ひしたいことがございます」

と言つた。その時フト小さな家が眼前にあらはれてきた。その夫婦に八頭八尾の守護神が憑依してゐた。夫婦の話によれば、

「大神の命により神界旅行の人を幾人も捉へてみたが、眞の人に會はなかつたが、はじめて今日目的の人に出會ひました。實は私は、地の高天原にあつて幽界を知ろしめす大王の肉身系統の者です。どうぞ貴方はこの道を北へ北へと取つていつて下さい、さうすれば大王に面會ができます。私が言傳をしたと言つて下さい」と言つて頼む。

「承知した、それなら行つて来よう」  
こう言つて立ち去らうとする時、男女の後に角の生えた恐い顔をした天狗と、

白狐の金毛九尾になつたのが眼についた。この肉體としては實に善い人間で、信仰の強い者だが、その背後には、容易ならぬ物が魅入つてゐることを悟つた。そのままにして自分は一直線に地の高天原へ進んで行つた。トボトボと暫くのあひだ北へ北へと進みゆくと、一つの木造の大橋がある。橋の袂へさしかかると川の向ふ岸にあたり、不思議な人間の泣き聲や狐の聲が聞えた。自分はその聲をたどつて道を北へとつて行くと、親子三人の者が寄つて集つて、穴にゐる四匹の狐を叩き殺してゐた。見るみる狐は殺され、同時にその靈は女に憑いてしまつた。女の名は「民」といふ。女は狐の怨靈のために忽ち膨れて脹滿のやうな病體になり、俄然苦悶しはじめた。そこで其の膨れた女にむかつて、自分は兩手を組んで鎮魂をし、神明に祈つてやると、その體は舊の健康體に復し、三人は合掌して自分にむかつて感謝する。されど彼の殺された四匹の狐の靈はなかなか承知しない。

『罪なきものを殺されて、これで黙つてをられぬから、あくまでも仇討をせねばおかぬ』

と、怨めしさうに三人を睨みつめてゐる。狐の方ではその肉體を機關として、四

匹ながら這入つて生活を續けてゆきたいから、神様に願つて許していただきたいと嘆願した。

自分はこの場の處置に惑うて、天にむかひ裁斷を仰いだ。すると天の一方より天使が顯はれ、産土の神も顯はれたまひて、

「是非なし」

と一言洩らされた。氏子であるとは言ひながら、罪なきものを打ち殺したこの女は、畜生道へ墮ちて狐の容器とならねばならなかつた。病氣は治つたが、極熱と極寒との苦しみを受け、數年後に國替した。現界で言へば稻荷下のやうなことをやつたのである。

やや西南方にあたつてまた非常な叫び聲が聞えてきた。すぐさま自分は聲を尋ねて行つてみると、盲目の親爺に狸が憑依し、また澤山の怨靈が彼をとりまいて、眼を痛めたり、空中へ身體を引き上げたり、さんざんに親爺を虐めてゐる。見ると親爺の肩の下のところには棒のやうなものがあつて、それに綱がかかつてをり、柱の眞に取付けられた太綱を寄つてたかつて、弛めたり引きしめたりしてゐるが、

落下する時は川の淵までつけられ、つり上げられる時は、太陽の極熱にあてられる。そして釣り上げられたり、曳き下されたりする上下の速さ。この親爺は「横」といふ男である。

なぜにこんな目に遇ふのかと理由を聞けば、この男は非常に強欲で、他人に金を貸しては家屋敷を抵當にとり、ほとんど何十軒とも知れぬほど、その手でやつては財産を作つてきた。そのために井戸にはまつたり、首を吊つたり、親子兄弟が離散したりした者さへ澤山にある。その靈がことごとく怨念のために畜生道へ墮ち入り、狐や狸の仲間入りをしてゐるのであつた。そのすべての生靈や亡靈が、身體の中からも、外からも、攻めて攻めて攻めぬいて命をとりにきてゐるのである。

何ゆゑ神界へ行く道において、地獄道のやうなことをしてゐるのを神がお許しになつてゐるかと問へば、天使の説明には、  
「懲戒のために神が許してある。その長い太い綱は首を吊つた者の綱が凝固つたのである。毒を嚙んで死んだ人があるから、毒が身の中に入つてゐる。川へはま

つた者があるから川へ突つ込まれる。これが濟めば畜生道へ墜ちて苦しみを受けるのである」

と。あまり可愛相であるから私は天照大御神へお願いして「惟神靈幸倍坐世」と唱へ天然笛を吹くと、その苦しみは忽ち止んでしまった。そして狐狸に化してゐる靈は嬉々として解脱した。その顔には櫻色を呈してきたものもある。これらの靈はすべて老若男女の人間に一變した。すると産土の神が現はれて喜び感謝された。自分もこれは善い修業をしたと神界へ感謝し、そこを立ち去つた。が、「横」といふ男の肉體は一週間ほど經て現界を去つた。

それからまた眞西にあたつて叫び聲がおこる。猿を責めるやうな叫び聲がする。その聲を尋ねてゆくと、本當の狐が數十匹集まり、一人の男を中において木にくくりつけ、「キヤツ、キヤツ」と言はして苦しめてゐる。その男の手足はもぎとられ、骨は一本々々碎かれ、滅茶々にやられてゐるのに現體が残つたままそこに立つてゐる。自分はこれを救ふべく、神名を奉唱し型のごとく鎮魂の姿勢をとるや否や、すべての狐は平伏してしまつた。何故そんな事をするのかと尋ねれば、



なか  
中なでも年とし老としつた狐きつねがすすみでて、

『この男おとこは山やま獵れが飯めしよりもすきで、狐きつね弄あそを作つくつたり、係わ蹄なをこしらへたりして樂たのしんである悪わるい奴やつです。それがために吾われ々われ一いち族ぞくのものは皆みな命いのちをとられた。生命いのちをとられるとは知しりつつも、油あぶら揚あげなどの好すきな物ものがあれば【つい】かかつて、ここにあるこれだけの狐ものはことごとく命いのちをとられました。それでこの男をの幽い體たい現げん體たい共ともに亡ほろぼして、幽い界かいで十分じふぶんに復ふく讎しゅうしたい考かんへである』

といふ。そこで私わたしは、

『命いのちをとられるのは自分じぶんも悪わるいからである。それよりはいつそ各めい自めい改かい心しんして人じん界かいへ生うまれたらどうだ』

と言いへば、

『人じん界かいへ生うまれますか』

と尋たづねる。自分じぶんは、

『生うまられるのだ』

と答こたふれば、

「自分らはこんな四ツ足だから駄目だ」

といふ絶望の意を表情で現はしたが、自分は、

「汝らに代つて天地へお詫をしてやらう」

と神々へお詫をするや否や、「中」といふ男の幽體は見るまに肉もつき骨も完全

になつて舊の身體に復り、いろいろの狐はたちまち男や女の人間の姿になつた。

その時の數十の狐の靈は、一部分今日でも神界の御用をしてゐるものもあり、途

中で逃げたものもある。中には再び畜生道へ墮ちたものもある。

（大正一〇・一〇・一九 舊九・一九 櫻井重雄録）

## 第一七章 神界旅行の四（一七）

神界の場面が、たちまち一變したと思へば、自分は又もとの大橋の袂に立つて  
ゐた。どこからともなくにはかに大被詞の聲が聞えてくる。不思議なことだと思

ひながら、二三丁辿つて行くと、五十恰好の爺さんと四十かつかうの婦とが背中合せに引着いて、どうしても離れられないでもがいてゐる。男は聲をかぎりに天地金の神の御名を唱へてゐるが、婦は一生懸命に合掌して稻荷を拜んでゐる。男の合掌してゐる天には、鼻の高い天狗が雲の中に現はれて爺をさし招いてゐる。婦のをがむ方をみれば、狐狸が一生懸命山の中より手招きしてゐる。男が行かうとすると、婦の背中にびつたりと自分の背中が吸ひついて、行くことができない。婦もまた行かうとして身悶えすれども、例の背中が密着して進むことができない。一方へ二歩行つては後戻り、他方へ二歩行つては、又「あともしどり」といふ調子で、たがひに信仰を異にして迷つてゐる。自分はそこへ行つて、「惟神靈幸倍坐世」と神様にお願ひして、祝詞を奏上した。そのとき私は、自分ながらも實に涼しい清らかな聲が出たやうな氣がした。

たちまち密着してゐた兩人の身體は分離することを得た。彼らは大いに自分を徳として感謝の辭を述べ、どこまでも自分に従つて、  
「神界の御用を勤めさしていただきます」

と約束した。やがて男の方は肉體をもつて、一度地の高天原に上つて神業に参加しやうとした。しかし彼は元來が強欲な性情である上、憑依せる天狗の靈が退散せぬため、つひには盤古大神の眷族となり、地の高天原の占領を企て、ために、靈は神譴を蒙りて地獄に墮ち、肉體は二年後に滅びてしまった。さうしてその婦は、今なほ肉體を保つて遠く神に従ふてゐる。

この瞬間、自分の目の前の光景は忽ち一轉した。不思議にも自分はある小さな十字街頭に立つてゐた。そこへ前に見た八頭八尾の靈の憑いた男が俵を曳いてやつて来て、

「高天原にお伴させていたいただきますから、どうかこの俵にお召し下さい」といふ。しかし「自分は神界修業の身なれば、俵になど乗るわけにはゆかぬ」と強て斷つた上、徒歩でテクテク西へ西へと歩んで行つた。非常に嶮峻な山坂を三つ四つ越えると、やがてまた廣い清い河のほとりに到着した。河には澄きつた清澄な水が流れてをり、川縁には老松が翠々と竝んでゐる實に景勝の地であつた。自分はこのこそ神界である、こんな處に長らくゐたいものだといふ氣がした。ま

ひとりひとりとぼとぼと進んで行けば、とある小さい町に出た。左方を眺むれば小さな丘があり、山は紫にして河は帯のやうに流れ、蓮華臺上と形容してよからうか、高天原の中心と稱してよからうか、自分はしばしその風光に見惚れて、そこを立去るに躊躇した。

山を降つて少しく北に進んで行くと、小さな家が見つかった。自分は電氣に吸着けらるるごとく、忽ちその門口に着いてみた。そこには不思議にも、かの幽廳にみられた大王が、若い若い婦の姿と化して自分を出迎へ、やがて小さい居間へ案内された。自分はこの大王との再會を喜んで、いろいろの珍らしい話しを聞いてみると、にはかに虎が唸るやうな、また狼が呻くやうな聲が聞えてきた。よく耳を澄まして聞けば、天津祝詞や大祓の祝詞の聲であつた。それらの聲とともに四邊は次第に暗黒の度を増しきたり、密雲濛々と鎖して、日光もやがては全く見えなくななり、暴風にはかに吹き起つて、家も倒れよ、地上のすべての物は吹き散れよとばかり凄じき光景となつた。その濛々たる黒雲の中より「足」といふ古い顔の鬼が現はれてきた。それには「黒」といふ古狐がついてゐて、下界を睥睨し

てゐる。その時にはかに河水鳴りとどろき河中より大いなる龍體が現はれ、またどこからともなく、何とも形容のしがたい悪魔があらはれてきた。大王の居間も附近も、この時すつかり暗黒となつて、咫尺すら辨じがたき暗となり、かの優しい大王の姿もまた暗中に没してしまつた。ただ目に見ゆるは、烈風中に消えなむとして瞬いてゐる一つのかすかな燈光ばかりである。自分は今こそ神を祈るべき時であると不圖心付き、「天照大御神」と「産土神」をひたすらに念じ、悠々として祝詞をすずやかな聲で奏上した。一天にはかに晴れわたり、一點の雲翳すらなきにいたる。

祝詞はすべて神明の心を和げ、天地人の調和をきたす結構な神言である。しかしその言靈が圓滿清朗にして始めて一切の汚濁と邪惡を拂拭することができるのである。悪魔の口より唱へらるる時はかへつて世の中はますます混亂惡化するものである。蓋し悪魔の使用する言靈は世界を清める力なく、欲心、嫉妬、憎惡、羨望、憤怒などの惡念によつて濁つてゐる結果、天地神明の御心を損ふにいたるからである。それ故、日本は言靈の幸はふ國といへども、身も魂も本當に清淨と

なつた人が、その言靈を使つて始めて、世のなかを清めることができ得るのである。これに反して身魂の汚れた人が言靈を使へば、その言靈には一切の邪惡分子を含んでゐるから、世の中はかへつて暗黒になるものである。

さて自分は八衢に歸つてみると、前刻の鬼、狐および大きな龍の惡靈は、自分を跡から追つてきた。「足」の鬼は、今度は多くの眷族を引連れ來たり、自分を八方より襲撃し、おのおの口中より噴霧のやうに幾十萬本とも數へられぬほどの針を噴きかけた。しかし自分の身體は神明の加護を受けてゐた。あたかも鐵板のやうに針を弾ね返して少しの痛痒をも感じない。その有難さに感謝のため祝詞を奏げた。その聲に、すべての惡魔は煙のごとく消滅して見えなくなつた。

ここで一寸附言しておく。「足」の鬼といふのは烏帽子直垂を着用して、あたかも神に仕へるやうな服裝をしてゐた。しかし本來非常に猛惡な顔貌なのだが、一見立派な容子に身をやつしてゐる。また河より昇れる龍は、たちまち美人に化けてしまつた。この龍女は、龍宮界の大使命を受けてゐるものであつて、大神御經綸の世界改造運動に参加すべき身魂であつたが、美しい肉體の女に變じて「足」

の鬼と肉體上の關係を結び神界の使命を臺なしにしてしまった。龍女に變化つたその肉體は、現在生き残つて河をへだてて神に仕へてゐる。彼女が龍女であるといふ證據には、その太腿に龍の鱗が三枚もできてゐる。神界の攝理は三界に一貫し、必ずその報いが出てくるものであるから、神界の大使命を帯びたる龍女を犯すことは、神界としても現界としても、末代神の譴めを受けねばならぬ。「足」の鬼はその神罰により、その肉體の一子は聾となり、一女は顔一面に菊石を生じ、醜い龍の葡萄するやうな痕跡をとどめてゐた。さて一女まづ死し、ついでその一子も滅んだ。かれは罪のために國常立尊に谷底に蹴落され胸骨を痛めた結果、靈肉ともに滅んでしまつた。かくて「足」の肉體もついに大神の懲戒を蒙り、日に瘦衰へ家計困難に陥り、肺結核を病んで悶死してしまつた。

以上の一男一女は「足」の前妻の子女であるが、龍女と「足」の鬼との間にも、一男が生れた。「足」の鬼は二人の子女を失つたので、彼は自分の後繼者として、その男の子を立てやうとする。龍女の方でも、自分の肉體の後繼者としやうとして焦つてゐる。一方龍女には嚴格な父母があつた。彼らもその子を自分の家の相



續者としやうとして離さぬ。「足」の鬼の方は無理にこれを引とらうとして、一人の肉體を、二つに引きち切つて殺してしまつた。靈界でかうして引裂かれて死んだ子供は現界では、父につけば母にすまぬ、母につけば父にすまぬと、煩悶の結果、肺結核を病んで死んだのである。かうして「足」の鬼の方は靈肉ともに一族斷絶したが、龍女は今も後繼者なしに寡婦の孤獨な生活を送つてゐる。

本來龍女なるものは、海に極寒極熱の一千年を苦行し、山中にまた一千年、河にまた一千年を修業して、はじめて人間界に生れ出づるものである。その龍女より人間に轉生した最初の一生涯は、尼になるか、神に仕へるか、いづれにしても男女の交りを絶ち、聖淨な生活を送らねばならないのである。もしこの禁斷を犯せば、三千年の苦行も水の沫となつて再び龍體に墮落する。従つて龍女といふものは男子との交りを喜ばず、かつ美人であり、眼鏡く、身體のどこかに鱗の數片の痕跡を止めてゐるものも偶にはある。かかる龍女に對して種々の人間界の情實、義理、人情等によつて、強て龍女を犯し、また犯さしめるならば、それらの人は龍神よりの恨をうけ、その復讐に會はずにはゐられない。通例龍女を犯す場合は、

その夫婦の縁は決して安全に永續するものではなく、夫は大抵は夭死し、女は幾度縁をかゆるとも、同じやうな悲劇を繰返し、犯したものは子孫末代まで、龍神の祟りを受けて苦しまねばならぬ。

(大正一〇・一〇・一九 舊九・一九 谷口正治録)

## 第一八章 靈界の情勢(一八)

ここで自分は、神界幽界の現界にたいする關係を一寸述べておかうと思ふ。神界と幽界とは時間空間を超越して、少しも時間的の觀念はない。それゆゑ靈界において目撃したことが、二三日後に現界に現はれることもあれば、十年後に現はれることもあり、數百年後に現はれることもある。また數百年數千年前の太古を見せられることもある。その見ゆる有様は過去、現在、未來が一度に鏡にかけたごとく見ゆるものであつて、あたかも過去、現在、未來の區別なきが如くに

して、しかもその區別がそれと歴然推斷され得るのである。

靈界より觀れば、時空、明暗、上下、大小、廣狹等すべて區別なく、皆一様平列的に靈眼に映じてくる。

ここに自分が述べつつあることは、靈界において見た順序のままに來るとはかぎらない。靈界において一層早く會ふた身魂が、現界では一層晩く會ふこともあり、靈界にて一層後に見た身魂を、現界にて一層早く見ることもある。今回の三千世界の大神劇に際して、檜舞臺に立つところの靈界の役者たちの靈肉一致の行動は、自分が靈界において觀たところとは、時間において非常に差異がある。されど自分は、一度靈界で目撃したことは、神劇として必ず現界に再現して、このことを信ずるものである。

さて天界は、天照大御神の御支配であつて、これは後述することにするが、今は地上の神界の紛亂状態を明らかにしたいと思ふ。今までは地上神界の主宰者たる國常立尊は、「表の神諭」に示されたるごとくに、やむを得ざる事情によつて、引退され給うてゐられた。

それに代つて、太古において衆望を擔うて、國常立尊の後を襲ひたまうた神様は、現在は支那といふ名で區劃されてゐる地域に、發生せられたる身魂であつて、盤古大神といふ神である。この神はきはめて柔順なる神にましまして、決して惡神ではなかつた。ゆゑに衆神より多大の望みを囑されてゐたまうた神である。今でこそ日本といひ、支那といひ露西亞といひ、種々に國境が區劃されてゐるが、國常立尊御神政時代は、日本とか外國とかいふやうな差別は全くなかつた。ところが天孫降臨以來、國家といふ形式ができあがり、いはゆる日本國が建てられた。従つて水火沫の凝りてなれるてふ海外の地にも國家が建設されたのである。さて、いはゆる日本國が創建され、諸々の國々が分れ出でたるとき、支那に生まれたまうた盤古大神は、葦原中津國に來たりたまひて國祖の後を襲ひたまふた上、八王大神といふ直屬の番頭神を御使ひになつて、地の世界の諸國を統轄せしめられた。一方いはゆる外國には、國々の國魂の神および番頭神として、國々に八王八頭といふ神を配置された。丁度それは日本の國に盤古大神があり、その下に八王大神がおかれてあつたやうなものである。日本本土における八王大神は、

諸外國の八王八頭を統轄し、その上を盤古大神が總攬したまひましたが、八王八頭は決して悪神ではない。天から命ぜられて各國の國魂となつたのは八王であり、八頭は宰相の位置の役である。こういふ風なのが、今日、國常立尊御復權までの神界の有様である。

さうかうするうちに、露國のあたりに天地の邪氣が凝りかたまつて悪靈が発生した。これがすなはち素盞鳴命の言向和された、かの醜い形の八頭八尾の大蛇の姿をしてゐたのである。この八頭八尾の大蛇の靈が靈を分けて、國々の國魂神および番頭神なる八王八頭の身魂を冒し、次第に神界を悪化させるやうに努力しながら現在にいたつたのである。しかるに一方印度においては、極陰性の邪氣が凝りかたまつて金毛九尾白面の悪狐が発生した。この靈はおのおのまた靈を分けて、國々の八王八頭の相手方の女の靈にのり憑つた。

しかして、また一つの邪氣が凝り固まつて鬼の姿をして発生したのは、猶太の土地であつた。この邪鬼は、すべての神界並びに現界の組織を打ち毀して、自分が盟主となつて、全世界を妖魅界にしようと目論みてゐる。しかしながら日本國

は特殊なる神國であつて、この三種の悪神の侵害を免れ、地上に儼然として、萬古不動に卓立してをることができた。この悪靈の三つ巴のはたらきによつて、諸國の國魂の神の統制力はなくなり、地上の世界は憤怒と、憎悪と、嫉妬と、羨望と、争鬪などの諸罪惡に充ち満ちて、つひに收拾すべからざる三界の紛亂状態を醸したのである。

ここにおいて、天上にまします至仁至愛の大神は、このままにては神界、現界、幽界も、共に破滅淪亡の外はないと觀察したまひ、ふたたび國常立尊をお召出し遊ばされ、神界および現界の建替を委任し給ふことになつた。さうして坤之金神をはじめ、金勝要神、龍宮乙姫、日出神が、この大神業を輔佐し奉ることになり、残らずの金神すなはち天狗たちは、おのおの分擔に従つて御活動申し上げ、白狐は下郎の役として、それぞれ神務に参加することになつた。ここにおいて天津神の嫡流におかせられても、木花咲耶姫命と彦火々出見命は、事態容易ならずと見たまひ、國常立尊の神業を御手傳ひ遊ばすこととなり、正神界の御經綸は着々その歩を進め給ひつつあるのである。それと共にそれぞれ因縁ある身魂は、すべて

地の高天原に集まり、神界の修行に参加し、御經綸の端なりとも奉仕さるることになつてをるのである。

そもそも太古、葦原瑞穂中津國は大國主命が武力をもつて、天下をお治めになつてゐた。天孫降臨に先だち、天祖は第三回まで天使をお遣しになり、つひには武力をもつて大國主命の權力を制し給うた。大國主神も力盡きたまひ、現界の御政權をば天命のままに天孫に奉還し、大國主御自身は、青芝垣にかくれて御子事代主と共に、幽世を統治したまふことになつた。

この時代の天孫の御降臨は、現在の日本なる地上の小區劃を御支配なし給ふためではなく、實に全地球の現界を知食するための御降臨であり給うた。しかしながら未完成的なる世界には、憎惡、憤怒、怨恨、嫉妬、爭鬪等あらゆる邪惡が充満してゐるために、天の大神様の御大望は完成するにいたらず、従つて弱肉強食の修羅の巷と化し去り地上の神界、現界は、ほとんど全く崩壞淪亡しやうとする場合に立ちいたつたのである。

かかる情勢を見給ひし天津神様は、命令を下したまひて、盤古大神は地上一切

の幽政の御権利を、良金神國常立尊に、ふたたび御奉還になるのやむなき次第となつた。ここに盤古大神も既に時節のきたれるを知り、從順に大神様の御命令を奉戴遵守したまうた。しかるに八王大神以下の國魂は、邪神のためにその精靈を全く汚されきつてゐるので、まだまだ改心することができず、いろいろと悪策をめぐらしてゐたのである。なかには改心の兆の幾分見えた神もあつた。

かくの如くにして國常立尊が、完全に地上の神界を御統一なしたまふべき時節は、既に已に近づいてゐる。神界の有様は現界にうつりきたり、神界平定後は天津日繼命が現界を治め給ひ、國常立尊は幽政を總纜したまひ、大國主命は日本の幽政をお司りになるはずである。しかし現在ではまだ、八頭八尾の大蛇、金毛九尾の惡狐および鬼の靈は、盤古大神を擁立して、幽界および現界を支配しやうと、諸々の悪計をめぐらしつつあるのである。

しかしながら從順な盤古大神は、神界に對するかかる反逆に賛同されないので、邪鬼の靈はみづから頭目となり、赤色旗を押し立てていろいろの身魂をその眷族に使ひつつ、高天原乘取策を講じてゐる。



そこで天よりは事態容易ならずとして、御三體の大神が地上に降臨しまして、國常立尊の御經綸を加勢なしたまふことになり、國常立尊は假の御息所を蓮華臺上に建設して、御三體の大神様を奉迎し給ふこととなるのである。

したがって、御三體の大神様の御息所ができたならば、神界の御經綸が一層進んだ證據だと拜察することができる。

（大正一〇・一〇・二〇 舊九・二〇 谷口正治録）

## 第十九章 盲目の神使（一九）

自分は、ある清い水の流れてある河の中へはいつて漁魚をしてゐた。さうすると河の岸に立つて、しきりに呼ぶ者がある。その男の顔を見ると、眼がほとんど閉がつて、一ツも見えない。ようこんな眼で危い河縁の土堤へこられたものだと思つた。

ともかくも河から上つて、その使の側へ寄つて、

「私を呼びとどめたのは何の用か」

とたづねてみた。すると盲目の男は、

「私は地の高天原からのお使で、あなたをお迎ひに参つたものです」

と答へた。そこで自分は、

「いや、先だつて、神界を探險したが、あのやうな状態では、地の高天原も糞も

あつたものではない。むしろ地獄の探險が優しである」

と答へた。そして、

「お前のやうな盲目の使を寄こすやうな神なら、きつと盲目の神であらう。盲目

が眼明きの手をひいて、地獄の谷底へ落すやうなものであるから行かぬ」

と答へた。すると其の使は、

「あなたは私の肉體を見てゐるのか、それとも靈を見てゐるのか。肉體は現存し

てゐるが、私の靈は尊いものである。しかも私の靈はすべての神に優れてゐる」

と誇り氣にいふ。にはかに自分も行きたい氣がして、産土神にむかつてお願ひを

した。すると産土神うぶすなのかみが現あらはれて、兩眼りやうがんに涙なみだをたたへたまひ、  
「とも角かくも世界せかいを救濟きうさいする御用ごようであるから、行いつてくるが宜よかるう。しかし今度こんど  
行いつたら、容易よういに歸かへつてくることはできぬ。いろいろの艱難かんなん辛苦しんくを嘗なめなければ  
ならぬが、神かみから十分保護じゆうぶんほごをするから、使つかひについて高天原たかあまはらへ上のぼつてくれ。自分じぶんも  
産土神うぶすなのかみとして名譽めいよであるから」

と仰あふせられる。そこで自分じぶんはその使つかひとともに、大橋おほはしを渡わたつて、だんだんと何なんとも  
知れぬ、焦あせつくやうな熱あつい空そらを、笠かさも着きず進すすんで行いつた。すると俄にはかにどういふわ  
けか、空そらが眞黒まつくろになつて、雷鳴轟らいめいとどろきわたり、雨あめは車軸しゃじくを流ながすがごとく降ふつてきた。  
眞書まひるにもかかはらず一寸先いっすんさきも見みえぬ眞黒闇まつくらのやみになつて、あまつさへ風かぜひどく一歩いっぽも  
進すすむことができぬ。そのとき心こころに思おもふやう、……高天原たかあまはらから自分じぶんを迎むかひに來きたと  
いふから、承知しょうちして一歩踏いっぽふみだすと此この有様ありさまである。或あるひはこの者ものがさういふて、  
自分じぶんに苦くるしみを與あたへるために連つれて行ゆくのではないか……といふ念ねんが起おこつてきた。  
そこでまた天然笛てんねんぶえを取とりだして吹奏すゐそうした。すると雨あめはカラリと晴はれ、雷鳴らいめいは止や  
み、空そらは明あきらかになつてきた。それから幾いくつも幾いくつも峠たつげを縫ぬつてすすむと、狹せまい

道路にあたつて、種々の大蛇や毒蛇が横たはつてゐるのに出會うた。

盲目の使は大蛇も平氣でその上をドンドン踏みわたつて行く。また蝮がをつても狼が足元に噛みつきかかつても、平氣で歩いてゐる。自分は眼が明いてゐるために、大蛇や、毒蛇や、狼に眼が付き、恐怖心がおこつて進むことを躊躇した。しかしながら盲目の使がするとほり踏んで行けば、別條はなからうと思ひ、怖々踏んで行つた。そのとき天の一方から誰いふとなく、

「眼の見えざる者は幸なり」

との聲が聞えてきた。

それから一の峠の頂上に達して、兩人がそこで暫時休息した。そのとき心に思つたのは……實にこの小さな眼の見えるほど苦痛な、そして不幸なものはない。自分は眼が明いてゐるために、大蛇や狼を防がうとして、色々と心配をするが、盲目はなんとも思はず、平氣で進んで行く。この小さな眼を開くことは要らぬことだ。世界のことは、眼を明けぬ方がよい。たとへ見えても見えぬふりする方が無難である……と覺ることを得た。

すると盲目の使は、諄々と地の高天原における種々の様子を話してくれた。かつて自分の經つてきた幽界や、いまだ探險をせぬ神界の話もした。そこで、  
「貴殿はどうしてこんなに詳しいことが解るか」  
とたづねた。

「あなたをお迎へに来て、お目にかかった時、あなたから光が現はれて、今まで解らなかつたのが、幽界の方は何もかも明瞭になつて、非常に心が勇んできました」  
と答へた。

さうしてその使の言ふには、  
「實は大神の命により、あなたを迎へに来たのであるが、地の高天原は今悪魔が、種々と邪魔をして黒雲に包まれてるので、ひそかに隠れて来たやうな次第であります。そこで神様も單獨では行かず、あなたに来てもらつて、地の高天原を明らかにすべく御用してもらはねばならぬ。あなたも洵に御苦勞なことです」  
といふ。自分はこの山の峠まで引っぱり出されて、かういふことを聞かされたの

である。前回の探険に懲りてをるからと言つて、今さら女々しく引還すこともならず、行けば大變な艱難に會ふことは知れてゐるが、氏神や、神界の命令であるから、どこまでも奉ぜなければならぬと思ひ、勇氣を鼓して地の高天原へゆくことにした。

案の定、高天原の聖地に來てみると、自分の來ることを惡魔が先に知つて、非常に狼狽し、反抗運動の眞最中であつた。丁度自分は、火の燃えてゐる中へ飛びこむ心地がした。

（大正一〇・一〇・一九 舊九・一九 廣瀨義邦録）

### 第三篇 天地の剖判

第二〇章 日地月の發生「二〇」

盲目の神使に迎へられて、自分は地の高天原へたどりついたが、自分の眼の前には、何時のまにか、大地の主宰神にまします國常立大神と、稚姫君命が出御遊ばしたまうた。自分は仰せのまにまにこの兩神より、貴重なる天眼鏡を賜はり、いよいよ神界を探險すべき大命を拜受したのである。

忽ち眼前の光景は見るみる變じて、すばらしい高い山が、雲表に聳えたつてゐる。その山には索線車のやうなものが架つてゐた。自分は登らうかと思つて、一步麓の山路に足を踏みこむと、不思議や、五體は何者かに引上げらるるやうな心持に、直立したままスウと昇騰してゆく。

これこそ佛者のいはゆる須彌仙山で、宇宙の中心に無邊の高さをもつて屹立してゐる。それは決して、肉眼にて見うる種類の、現實的の山ではなくして、全く靈界の山であるから、自分とても靈で上つたので、決して現體で上つたのではない。

自分は須彌仙山の頂上に立つて、大神より賜はつた天眼鏡を取り出して、八方を眺めはじめた。すると茫茫たる宇宙の渾沌たる中に、どこともなしに一つの球い凝塊ができるのが見える。

それは丁度毬のやうな形で、周邊には一杯に泥水が漂うてゐる。見るまにその球い凝塊は膨大して、宇宙全體に擴がるかと思はれた。やがて眼もとどかぬ擴がりに到達したが、球形の眞中には、鮮かな金色をした一つの圓柱が立つてゐた。

圓柱はしばらくすると、自然に左旋運動をはじめめる。周邊に漂ふ泥は、圓柱の回轉につれて渦巻を描いてゐた。その渦巻は次第に外周へ向けて、大きな輪が擴がつていった。はじめは緩やかに直立して回轉してゐた圓柱は、その速度を加へきたるにつれ、次第に傾斜の度を増しながら、視角に觸れぬやうな速さで、回轉しはじめた。

すると、大きな圓い球の中より、暗黒色の小塊體が振り放たるやうにポツポツと飛びだして、宇宙全體に散亂する。觀ればそれが無數の光のない黒い星辰と化つて、或ひは近く、或ひは遠く位置を占めて左旋するやうに見える。後方に太



陽が輝きはじめるとともに、それらの諸星は皆一齊に輝きだした。

その金の圓柱は、たちまち龍體と變化して、その球い大地の上を東西南北に馳せめぐりはじめた。さうしてその龍體の腹から、口から、また全身からも、大小無數の龍體が生れいでた。

金色の龍體と、それから生れいでた種々の色彩をもつた大小無數の龍體は、地上の各所を泳ぎはじめた。もつとも大きな龍體の泳ぐ波動で、泥の部分は次第に固くなりはじめ、水の部分は稀薄となり、しかして水蒸氣は昇騰する。そのとき龍體が尾を振り廻すごとに、その泥に波の形ができる。もつとも大きな龍體の通つた所は大山脈が形造られ、中小種々の龍體の通つた所は、またそれ相應の山脈が形造られた。低き所には水が集り、かくして海もまた自然にできることになった。この最も大いなる御龍體を、大國常立命と稱へ奉ることを自分は知つた。

宇宙はその時、朧月夜の少し暗い加減のやうな状態であつたが、海原の眞中と思はるる所に、忽然として銀色の柱が突出してきた。その高さは非常に高い。それが忽ち右旋りに回轉をはじめた。その旋回につれて柱の各所から種々の種物が

飛び散るやうに現はれて、山野河海一切のところに撒き散らされた。しかしまだその時は人類は勿論、草木、禽獸、蟲魚の類は何物も發生してはゐなかつた。たちまち銀の柱が横様に倒れたと見るまに、銀色の大きな龍體に變じてゐる。その龍體は海上を西から東へと、泳いで進みだした。この銀色の龍神が坤金神と申すのである。

また東からは國祖大國常立命が、金色の大きな龍體を現じて、固まりかけた地上を馳せてこられる。兩つの御龍體は、雙方より顔を向き合はして、何ごとかを謀しあはされたやうな様子である。しばらくの後金色の龍體は左へ旋回しはじめ、銀色の龍體はまた右へ旋回し始められた。そのため地上は恐ろしい音響を發して震動し、大地はその震動によつて、非常な光輝を發射してきた。

このとき金色の龍體の口からは、大なる赤き色の玉が大音響と共に飛びだして、まもなく天へ騰つて太陽となつた。銀色の龍體は見れば、口から霧のやうな清水を噴きだし、間もなく水は天地の間にわたした虹の橋のやうな形になつて、その上を白色の球體が騰つてゆく。このとき白色の球體は太陰となり、虹のやうな

尾を垂れて、地上の水を吸ひあげる。地上の水は見るまに、次第にその容量を減じてくる。

金龍は天に向つて息吹を放つ。その形もまた虹の橋をかけたやうに見えてゐる。すると太陽にはかに光を強くし、熱を地上に放射しはじめた。

水は漸く減いてきたが、山野は搗たての團子か餅のやうに柔かいものであつた。

それも次第に固まつてくると、前に播かれた種は、そろそろ芽を出しはじめる。

一番に山には松が生え、原野には竹が生え、また彼方あなたに梅が生えだした。

次いで杉、檜、榎などいふ木が、山や原野のところどころに生じた。つぎに

切の種物は芽を吹き、今までまるで土塊で作つた炮烙をふせたやうな山が、には

かに青々として、美しい景色を呈してくる。

地上が青々と樹木が生え始めるとともに、今まで濁つて赤褐色であつた天は、

青く藍色に澄みわたつてきた。さうして濁りを帯びて黄ずんでゐた海原の水は、

天の色を映すかのやうに青くなつてきた。

地上がかうして造られてしまふと、元祖の神様も、もう御龍體をお有ちになる

必要がなくなられたわけである。それで金の龍體から發生せられた、大きな劍膚の嚴めしい角の多い一種の龍神は、人體化して、莊嚴尊貴にして立派な人間の姿に變化せられた。これはまだ本當の現體の人間姿ではなくして、靈體の人間姿であつた。

このとき、太陽の世界にては、伊邪那岐命がまた靈體の人體姿と現ぜられて、その神をさし招かれる。そこで莊嚴尊貴なる、かの立派な大神は、天に上つて撞の大神とおなり遊ばし、天上の主宰神となりたまうた。

白色の龍體から發生された一番力ある龍神は、また人格化して男神と現はれたまうた。この神は非常に容貌美はしく、色白くして大英雄の素質を備へてをられた。その黒い頭髮は、地上に引くほど長く垂れ、鬚は腹まで伸びてゐる。この男神を素盞鳴大神と申し上げる。

自分はその男神の神々しい容姿に打たれて眺めてみると、その御身體から眞白の光が現はれて、天に沖して月界へお上りになつてしまつた。これを月界の主宰神で月夜見尊と申し上げるのである。そこで大國常立命は、太陽、太陰の主宰神

が決つたので、御自身は地上の神界を御主宰したまふことになり、須佐之男大神は、地上物質界の主宰となり給うたのである。

(大正一〇・一〇・二〇 舊九・二〇 谷口正治録)

## 第二章 大地の修理固成〔二一〕

大國常立尊はそこで、きはめて莊嚴な、嚴格な犯すことのできない、すばらしく偉大な御姿を顯はし給ひて、地の世界最高の山巔にお登り遊ばされて四方を見渡したまへば、もはや天に日月星辰完全に顯現せられ、地に山川草木は發生したとはいへ、樹草の類はほとんど葱のやうに纖弱く、葦のやうに柔かなものであつた。そこで國祖は、その御口より息吹を放つて風を吹きおこし給うた。その息吹によつて十二の神々が御出現遊ばされた。

ここに十二の神々は、おのおの分擔を定めて、風を吹き起したまうたが、その

風の力によつて松、竹、梅をはじめ、一切の樹草はベタベタに、その根本より吹倒されてしまった。大國常立尊はこの有様を眺めたまうて、御自身の胸の骨をば一本抜きとり、自ら齒をもつてコナゴナに咬みくだき、四方に撒布したまうた。すべての軟かき動植物は、その骨の粉末を吸収して、その質非常に堅くなり、倒れてゐた樹草は直立し、海鼠のやうに柔軟匍匐してゐた人間その他の諸動物も、この時はじめて骨が具はり、敏活に動作することが出来るやうになつた。五穀が實るやうになり、葱のやうに一様に柔かくして、區別さへ殆どつかなかつた一切の植物は、はつきりと、おのおの特有の形體をとるやうになつたのも此の時である。骨の粉末の固まり着いた所には岩石ができ、諸々の礦物が發生した。これを稱して岩の神と申し上げる。

しかるに太陽は依然として強烈なる光熱を放射し、月は大地の水の吸収を續けてゐるから、地上の樹草は次第に日に照りつけられて殆ど枯死せむとし、動物も亦この旱天つづきに非常に困つてゐた。しかし月から、まだ水を吸引すること止めなかつた。このままで放任しておくならば、全世界は干鏝を焦したやうに

熏くすぶつてしまふかも知れないと、大國常立尊おほくにとこたちののみことは山上さんじやうに昇のぼつて、まだ人體化じんたいくわしてをらぬ諸々の龍神りゆうじんに命めいじて、海水かいすゐを口に銜ふくんで持ちきたらしめ給たまうた。

諸々の龍神りゆうじんは命めいを奉ほうじて、海水かいすゐを國祖こくその許もとに持ちきたつた。國祖こくそはその水みづを手てに受うけて、やがてそれを口に吞のみ、天てんに向むかつて息吹いぶきをフーと吹ふき放はなたれた。すると天上てんじやうには色の濃こい雲くもや淡あはい雲くもや、その他種々雑多たしゆじゆざつたの雲くもが起おこつてきた。たちまち雲くもからサツと地上ちじやうに雨あめが降ふりはじめた。この使神つかひがみであつた龍神りゆうじんは無數むすうにあつたが、國祖こくそはこれを總稱そうしやうして雨あめの神かみと名付なづけたまうた。

ところが雨あめが降ふりすぎても却かへつて困こまるといふので、これを調和てうわするため、大國常立尊おほくにとこたちののみことは御身體おからだ一杯いっぱいに暑あついほど太陽たいやうの熱ねつをお吸すひになつた。さうして御自分ごじぶんの御身おから體だの各部かくぶより熱ねつを放射はうしやしたまうた。その放射はうしやされた熱ねつはたちまち無數むすうの龍體りゆうたいと變へんじて、天てんに向むかつて昇騰しやうたうしていつた。國祖こくそはこれに火龍神くわりゆうじんといふ名稱めいしやうをお付つけになつた。(筆ふでに書いては短みじかいが大國常立尊おほくにとこたちののみことがここまで天地てんちをお造つくりになるのに數十すうじふ億年おくねんの歲月さいげつを要えうしてゐる)

尊みことはかくの如ごとくにして人類じんるゐを始め、動物どうぶつ、植物等しよくぶつとうをお創造つくり遊あそばされて、人間にんげん

には日の大神と、月の大神の靈魂を賦與せられて、肉體は國常立尊の主宰として、神の御意志を實行する機關となし給うた。これが人生の目的である。神示に「神は萬物普遍の靈にして人は天地經綸の大司宰なり」とあるも、この理に由るのである。

しかるに星移り年をかさぬるにしたがつて、人智は亂れ、情は拗け、意は曲りて、人間は次第に私欲を擅にするやうになり、ここに弱肉強食、生存競争の端はひらかれ、せつかく神が御苦心の結果、創造遊ばされた善美のこの地上も亦、「もと」の泥海に復さねばならぬやうな傾向ができた。

しかるに地の一方では、天地間に殘滓のやうに残つてゐた邪氣は、凝つて惡龍、惡蛇、惡狐を發生し、或ひは邪鬼となり、妖魅となつて、我儘放肆な人間の身魂に憑依し、世の中を惡化して、邪靈の世界とせむことを企てた。そこで國常立大神は非常に憤りたまうて、深い吐息をおはきになつた。その太息から八種の雷神や、荒の神がお生れ遊ばしたのである。

それで荒の神の御發動があるのは、大神が地上の人類に警戒を與へたまふ時で



ある。かうしてしばしば大神は荒の神の御發動によつて、地上の人類を警戒せられたが、人類の大多数は依然として覺醒しない。そこで大神は大いにもどかしがりたまひ伊都の雄猛びをせられて、大地に四股を踏んで憤り給うた。そのとき大神の口、鼻、また眼より數多の龍神がお現はれになつた。この龍神を地震の神と申し上げる。國祖の大神の極端に憤りたまうた時に地震の神の御發動があるのである。大神の怒りは私の怒りではなくして、世の中を善美に立替へ立直したいための、大慈悲心の御發現に外ならぬのである。

大國常立尊が天地を修理固成したまうてより、ほとんど十萬年の期間は、別に今日のやうに區劃された國家はなかつた。ただ地方地方を限つて、八王といふ國魂の神が配置され、八頭といふ宰相の神が八王神の下にそれぞれ配置されてゐた。しかるに世の中はだんだん惡化して、大神の御神慮に叶はぬことばかりが始まり、怨恨、嫉妬、悲哀、呪咀の聲は、天地に一杯に充ちわたることになつた。そこで大國常立大神は再び地上の修理固成を企劃なしたまうて、ある高い山の頂上にお立ちになつて大聲を發したまうた。その聲は萬雷の一時に轟くごとくであつ

た。大神はなほも足を踏みとどろかして地蹈躡をお踏みになつた。そのため大地は揺れゆれて、地震の神、荒の神が擧つて御發動になり、地球は一大變態を來して、山河はくづれ埋まり、草木は倒れ伏し、地上の蒼生はほとんど全く淪亡るまでに立ちいたつた。その時の雄健びによつて、大地の一部が陥落して、現今の阿弗利加の一部と、南北亞米利加の大陸が現出した。それと同時に太平洋もでき上り、その眞中に龍形の島が形造られた。これが現代の日本の地である。それまでは今の日本海はなく支那も朝鮮も、日本に陸地で連続してゐた。この時まで現代の日本の南方、太平洋面にはまだ數百里の大陸がつづいてゐたが、この地球の大變動によつて、その中心の最も地盤の鞏固なる部分が、龍の形をして取り殘されたのである。

この日本國土の形狀をなしてゐる龍の形は、元の大國常立尊が、龍體を現じて地上の泥海を造り固めてゐられた時のお姿同様であつて、その長さも、幅も、寸法において何ら變りはない。それゆゑ日本國は、地球の艮に位置して神聖犯すべからざる土地なのである。【もと】黄金の圓柱が、宇宙の眞中に立つてゐた位置

も日本國であつたが、それが、東北から、西南に向けて倒れた。この島を自轉倒島といふのは、自ら轉げてできた島といふ意味である。

この島が四方に海を環らしたのは、神聖なる神の御息み所とするためなのである。さうしてこの日本の土地全體は、すべて大神の御肉體である。ここにおいて自轉倒島と、他の國土とを區別し、立別けておかれた。

それから大神は天の太陽、太陰と向はせられ、陽氣と陰氣とを吸ひこみたまうて、息吹の狭霧を吐きだしたまうた。この狭霧より現はれたまへる神が稚姫君命である。

このたびの地變によつて、地上の蒼生はほとんど全滅して、そのさまあたかもノアの洪水當時に彷彿たるものであつた。そこで大神は、諸々の神々および人間をお生みになる必要を生じたまひ、まづ稚姫君命は、天稚彦といふ夫神をおもちになり、眞道知彦、青森知木彦、天地要彦、常世姫、黄金龍姫、合陀琉姫、要耶麻姫、言解姫の三男五女の神人をお生みになつた。この天稚彦といふのは、古事記にある天若彦とは全然別の神である。かくのごとく地上に地變を起さねばなら

ぬやうになつたのは、要するに天において天上の政治が亂れ、それと同じ形に、地上に紛亂状態が現はれ來つたからである。天にある事はかならず地に映り、天が亂れると地も亂れ、地が亂れると、天も同様に亂れてくるものである。そこで大神は天上を修理固成すべく稚姫君命を生みたまうて天にお昇せになり、地は御自身に幽界を主宰し、現界の主宰を須佐之男命に御委任になつた。

(大正一〇・一〇・二〇 舊九・二〇 谷口正治録)

## 第二章 國祖御隱退の御因縁〔二二〕

大國常立尊の御神力によりて、天地はここに剖判し、太陽、太陰、大地の分擔神が定まつたことは、前述したとほりである。しかして太陽の靈界は伊邪那岐命これを司りたまひ、その現界は、天照大御神これを主宰したまふのである。次に太陰の靈界は、伊邪那美命これを司りたまひ、その現界は、月夜見之命これを主

宰さいしたまふ。大地だいちの靈界れいかいは前ぜん述じゆつのごとくに大國常立命おほくにとこたちのみこと之これを司つかさどりたまひ、その大海おほつな原はらは日ひ之のお大神おほかみの命めいによりて須佐之男命すさのをのみことこれを主しゆざい宰さいしたまふ神かむさだ定めとなつた。

しかるに太陽界たいやうかいと、地球界だいちきうかいとは鏡かがみを合あはしたやうに、同一状態どういつじやうたいに混亂紛糾こんらんぶんきうの状じやう態たいを現出げんしゆつした。太陰たいいんの世界せかいのみは、現幽兩界げんいうりやうかいともに元もとのままに、平和へいわに治おさまつてゐる。ひとり太陰たいいんに限かぎつて、なぜ今いまでも平和へいわに治おさまつてゐるかと言いへば、この理りは月つきの形かたちを地上ちじやうから觀測くわんそくしても明あきらかである如ごとく、光ひかりはあれども酷烈こくれつならず、水すゐ氣きはあつても極寒ごくかんではない。實じつに寒暑かんしよの中庸ちゆうようを得えたる至善至美しぜんしびの世界せかいであるからである。これに反はんして太陽たいやうの世界せかいは、非常ひじやうに凡すべてのものが峻烈しゆんれつで光ひかりは鮮あざやかであり、六合りくがふに照徹せうてつする神力しんりきはあれども、それだけまた暗黒あんこくなる陰影いんえいが多い。しかしてまた大地だいちは、もとより混濁こんたくせる分子ぶんしの凝り固かたまつてできたものであるから、勢いきほひとして不淨分子ふじやうぶんしが多い。したがつてまた邪神じゃしんの發生はつせいするものも、やむを得えない次第しだいである。

そこで稚姫君命わかひめぎみのみことは、天稚彦あめのわかひこと共に神命しんめいを奉ほうじて天てんに上のぼり、天界てんかいの神政しんせいを司つかさどらうとしたまうたが、御昇天ごしやうてんの途上とじやうにおいて、地上ちじやうからつき従したがうた邪神じゃしんどもにあやま

られ、天地經綸の機織の仕組を仕損じたまひ、つひに地上に降りたまひて國常立命と共に地底に潛ませられ、あらゆる艱難苦勞を忍びたまふの已むを得ざるに立ちいたつた。稚姫君命の御失敗の因縁については、後日詳しく述べることにする。さて、大國常立命は天地間の混亂状態邪惡分子をば掃蕩して、最初の神界の御目的どほりの幽政を布かうと遊ばしたまうた。これについて國祖は、まづ坤金神を内助の役として種々の神策を企圖したまひ、また、大八洲彦命を天使長兼宰相の地位に立たして、非常に嚴格な規則正しき政を行ひ、天の律法を制定して、寸毫といへども天則に干犯するものは、罰するといふことに定めたまうた。そのために地上の年數にして數百年の間は非常に立派に神政が治まつてゐたが、世が次第に開けゆくにつれて、神界、幽界、現界ともに邪惡分子が殖えてきた。すなはち八百萬の神人は、日増に大神の御幽政に對する不服を訴ふるやうになり、山川草木にいたるまで言問ひあげつらふ世になつた。

そこでやむを得ず宰相大八洲彦命は、國常立尊の御意志に背くと知りつつも、和光同塵の神策をほどこし、言問ひ、論争ふ八百萬の神々を鎮定慰撫しつつ、と

もかくも世を治めてゆかれたのである。

しかるにこのとき靈界は、ほとんど四分五裂の勢となり、一方には、盤古大神（又の御名鹽長彦）を擁立して、幽政を主宰せしめむとする一派を生じ、他方には、大自在天神大國彦を押し立てて神政を支配し、地の高天原を占領せむとする神人の集團が出現し、その他諸々の神々の小集團は、或ひは盤古大神派に、或ひは大自在天神派に付随せむとし、また中には、この兩派に屬せずして中立しながら、國常立尊の神政に反對する神々も生じてきた。

そこで國常立尊はやむを得ず天に向つて救援をお請ひになつた。天では天照大御神、日の大神（伊邪那岐尊）、月の大神（伊邪那美尊）、この三體の大神が、地の高天原に御降臨あそばし給ひ、國常立尊の神政および幽政のお手傳ひを遊ばされることになつた。國常立尊は畏れ謹み、瑞の御舎を仕へまつりて、三體の大神を奉迎したまうた。然るところ、地上は國常立尊の御系統は非常に減少して勢力を失ひ、盤古大神および大自在天神の勢力はなほだ侮り難く、つひには國常立尊に對して、御退位をお迫り申すやうになつた。天の御三體の大神は、地上の暴

悪なる神々にむかつて、あるひは宥め、或ひは訓し、天則に従ふべきことを懇に説きたまうた。されど、時節は悪神に有利にして、いはゆる……悪盛んにして天に勝つ……といふ状態に立ちいたつた。

ここに國常立尊は神議りに議られ、髪を抜きとり、手を切りとり、骨を斷ち、筋を千切り、手足所を異にするやうな惨酷な處刑を甘んじて受けたまうた。されど尊は實に宇宙の大原靈神にまませば、一旦肉體は四分五裂するとも、直ちにもとの肉體に復りたまひ、決して滅びたまふといふことはない。

暴悪なる神々は盤古大神と自在天神とを押し立て、遮二無二におのが要求を貫徹せむとし、つひには天の御三體の大神様の御舍まで汚し奉るといふことになり、國常立尊に退隱の御命令を下し給はむことを要請した。さて天の御三體の大神様は、國常立尊は臣系となつてゐるが、元來は大國常立尊は元の祖神であらせたまひ、御三體の大神様といへども、元來は國常立尊の生みたまうた御關係が坐します故、天の大神様も御眞情としては、國常立尊を退隱せしむるに忍びずと考へたまうたなれど、ここに時節の已むなきを覺りたまひ、涙を流しつつ勇猛



心を振起したまひ、すべての骨肉の情をすて、しばらく八百萬の神々の進言を、御採用あらせらるることになつた。そのとき天の大神様は、國祖に對して後日の再起を以心傳的に言ひ含みたまひて、國常立尊に御退隱をお命じになり、天に御歸還遊ばされた。

その後、盤古大神を擁立する一派と、大自在天神を押し立つる一派とは、烈しく霸權を爭ひ、つひに盤古大神の黨派が勝ち幽政の全權を握ることになつた。一方國常立尊は自分の妻神坤金神と、大地の主宰神金勝要神および宰相神大八洲彦命その他の有力なる神人と共に、わびしく配所に退去し給うた。

地上の神界の主宰たる大神さへ、かくのごとく御隱退になるといふ有様であるから、地上の主宰たる須佐之男命も亦、八百萬の神々に、神退ひに退はるるの已むなきにいたりたまひ、自轉倒島を立去りて、世界のはしに漂泊の旅をつづけられることになつた。しかし須佐之男命は、現界において八岐大蛇を平げ地上を清め、天照大御神にお目にかけて給うたと同じやうに、神界においても、すべての惡神を掃蕩して地上を天下泰平に治め、御三體の大神様にお目にかけて、地上の

主宰しゆさいの大神おほかみとなり給たまふといふのである。

さて、自分じぶんはこれから國常立尊くにとこたちのみことすゑみじゆう隨從しゆじゆうの八百萬やほよろづの神人かみがみの中なかでも、主おもなる神司かみがみの御ご經歷いれき御活動ごくわつどうを述のべ、また盤古大神ばんこだいじんおよび大自在天神だいじざいてんじんを擁立ようりつせる一派いつぱの八百萬やほよろづの神々かみがみの經歷いれきおよび暴動ぼうどう振ぶりを、神界しんかいにて目撃もくげきせるまを述のべておかふと思おもふ。

(大正一〇・一〇・二〇 舊九・二〇 谷口正治録)

## 第二三章 黄金こがねの大橋おほはし (二三)

地ちの高天原たかあまはらは、盤古大神ばんこだいじん鹽長彦系しほながひこけいと大自在天だいじざいてん大國彦系おほくにひこけいの反抗はんかうてき的活動くわつどうによつて、一旦いつたんは滅茶々めちやめちやに根底こんていから覆くつがへされむとした。故ゆゑにその實狀じつじやうを述のべるに先さきだち、地ちの高天原たかあまはらの狀況じやうきやうを概略あらまし述べておく必要ひつえうがある。

自分じぶんの靈魂れいんは今いままで須彌仙山しゆみせんざんの上うへに導みちびかれて、總すべて前述ぜんじゆつの狀況じやうきやうを目撃もくげきしてゐたが、天てんの一方いつぱうより嚙唳じつりやうたる音樂おんがく聞きこえて、自分じぶんの靈體れいたいは得えもいはれぬ鮮麗せんれいな瑞雲ずゐうんに

包つつまれた。その刹せつ那な、場ば面めんは一いつ轉てんして元もとの神しん界かい旅り行りの姿すがたに立たち返かへつてゐた。  
或あるひは細ほそく、或あるひは廣ひろき瓢へう箆たんなりの道み路ちをすすんで行ゆくと、そこには大おほきな河かはが流ながれてゐる。これは神しん界かいの大おほ河かはでヨルダがン河がともいひ、又またこれをイイスラエルの河かはともいひ、また五十い鈴す川がともいふのである。さうしてそこには非ひ常じょうに大おほきな反そり橋ばしが架かつてゐる。

この橋はしは、全ぜん部ぶ黄こ金が造ねりつくで丁ちやう度ど住すみ吉よし神じん社しゃの反そり橋ばしのやうに、勾こう配ぱいの急きな、長ながい大おほきな橋はしであつた。神しん界かい旅り行りの旅たび人びとは、總すべてこの橋はしの袂たもとへ來きて、その莊さう嚴ごんにして美び麗いなのと、勾こう配ぱいの急きなのとに肝きもを潰つぶしてしまひ、或あるひは昇のぼりかけては橋はしから滑すべり落おちて河かはに陷はまりこももある。また一いち面めんには金きん色しよく燦さん爛らんとしてゐるから、おのおの自じ分ぶんの身み魂たまが映うつつて本ほん性しやうを現あらはすやうになつてゐる。それで中なかには非ひ常じょうな猛まう惡あくな惡あく魔まが現あらはれて來きても渡わたられないので、その橋はしを通とほらずに、橋はしの下したの深ふかい流ながれを泳およいで彼むか岸ふぎしに着つて惡あく神がみも澤たく山さんある。それは千せん人にんに一ひと人くらゐの比ひ例れいであつて、神しん界かいではこの橋はしのことを黄こ金がの大おほ橋はしと名なづけられてある。

自じ分ぶんはこの大おほ橋はしを足あしの裏うらがくすぐつたいやうな、眩まぶしいやうな心こころ持もちでだんだん

と彼岸へ渡つた。少し油断をすると上りには滑り、下りになれば仰向けに轉倒するやうなことが幾度もある。要するにこの黄金の大橋は、十二の太鼓橋が繋がつてゐるやうなもので、欄干が無いから、橋を渡るには一切の荷物を捨てて跣足となり、足の裏を平たく喰付けて歩かねばならぬ。

さうしてこの橋を渡ると直に、自分はエルサレムの聖地に着いた。この聖地には黄金とか、瑪瑙とかいふ七寶の珠玉をもつて雄大な、とても形容のできない大神の宮殿が造られてある。

さうしてこの宮はエルサレムの宮ともいへば、また珍の宮とも稱へられてゐる。ウといふのはヴェルの返し、サレムの返しであるから、珍しい宮といふ言葉の意義である。さうしてこの宮の建つてゐる所は、蓮華臺上である。この臺上に上つて見ると、四方はあたかも屏風を立てたやうな青山を廻らし、その麓にはヨルダン河が、布をさらしたやうに長く流れてゐる。また一方には金色の波を漂はした湖水が、麓を取圍んでゐる。その湖水の中には、大小無数の島嶼があつて、その島ごとに宮が建てられ、どれもこれも皆檜造りで、些しの飾りもないが非常

に清らかな宮ばかりである。それからそこに黄金の橋が架けられてあり、その橋の向ふに大きな高殿があつて、これも全部黄金造りである。これを龍宮城といふ。空には金色の鳥が何百羽とも知れぬほど翱翔し、またある時は、斑鳩が澤山に群をなして飛んでをる。さうして湖上には澤山の鴛鴦が、悠々として游泳し、また大小無数の緑毛の龜が遊んでゐる。

この島嶼はことごとく色澤のよい松ばかり繁茂し、松の枝には所々に鶴が巢を構へて千歳を壽ぎ、一眼見ても天國淨土の形が備はつて、どこにも邪惡分子の影だにも認められず、參集來往する神人は、皆喜悅に満ちた面色をしてゐる。これは、國常立尊の治めたまふ神都の概況である。さうしてこの龍宮を占領して、自ら龍王となり、地の高天原の主權を握らむとする一つの神の團體が、盤古大神系である。この團體が、蓮華臺上を占領せむとする大自在天（大國彦）一派の惡神と共に、漸次に聖地に入りこみ、内外相呼應してエルサレムの聖地を占領せむと企らんでゐた。

蓮華臺上に昇り、珍の宮に到りうる身魂は、既に神界より大使命を帶たる神人

であり、また龍宮に到りうるところの身魂は、中位の神人であつて、今までの總ての罪惡を信仰の努めによりて拂拭し、御詫を許され、始めて人間の資格を備へ得たものの行く處である。この蓮華臺上の珍の宮は、天國のままを移寫されたものであつて、天人天女のごとき清らかな身魂の神人らが、天地の神業に奉仕する聖地である。また龍宮は主として龍神の集まる所で、龍神が解脱して美しい男女の姿と生れ更る神界の修業所である。

さうしてこの龍宮の第一の寶は麻邇の珠である。麻邇の珠は一名満干の珠といひ、風雨電雷を叱咤し、自由に驅使する神器である。ゆゑに總ての龍神はこの龍宮を占領し、その珠を得むとして非常な争鬪をはじめてゐる。されどこの珠は工ルサレムの珍の宮に納まつてゐる眞澄の珠に比べてみれば、天地雲泥の差がある。また龍神は實に美しい男女の姿を顯現することを得るといへども、天の大神に仕へ奉る天人に比ぶれば、その神格と品位において著しく劣つてをる。また何ほど龍宮が立派であつても、龍神は畜生の部類を脱することはできないから、人界よりも一段下に位してゐる。ゆゑに人間界は龍神界よりも一段上で尊く、優れて美

しい身魂みたまであるから神かみに代かはつて、龍神りゆうじん以上の神格しんかくを神界しんかいから賦與ふよされてゐるものである。

しかしながら人間界にんげんかいがおひおひと墮落だらくし惡化あくくわし、當然たうぜん上位じやうゐにあるべき人間にんげんが、一段下いちだんしたの龍神りゆうじんを拜祈はいきするやうになり、ここに身魂みたまの轉倒てんたうを來きたすこととなつた。

(大正一〇・一〇・二一 舊九・二一 外山豐二録)

## 第二四章 神世ヨハ開基ハと神息キリス統合ト〔二四〕

神界しんかいにおいては國常立尊くにとこたちのみことが嚴いづの御魂みたまと顯現けんげんされ、神政ヨハ發揚ハ直子の御魂みたま變性へんじやう男子なんしを機關きくわんとし、豐雲野尊とよくもぬのみことは神息キリス統合トの御魂みたまを機關きくわんとし、地ちの高天原たかあまはらより三千世界さんぜんせかいを修理しう固成りこせいせむために龍宮館りゆうぐうやかたに現あらはれたまうた。

龍宮界りゆうぐうかいにおいては、三千年さんぜんねんの長ながき艱難かんなん苦勞くらうを嘗なめた龍神りゆうじんの乙米おとよね姫命ひめのみことは、變性へんじやう男子なんしの系統ひつぽうの肉體にくたいの腹はらをかりて現あらはれ、二度目にどめの世よの立替たてかへの御神業ごしんげふに參加さんかすべく、

すべての珍寶を奉られた。この乙米姫命は、龍神中でも最も貪婪強欲な神であつて、自分の欲ばかりに心を用ひてゐる、きはめて利己主義の強い神であつた。それが現代の太平洋の海底深く潜んでゐたが、海底の各所より猛烈な噴火の出現するに逢ひ、身には日々三寒三熱の苦しみを受けるばかりでなく、その上に猛烈な毒熱を受けて身體を焼かれ、苦しみにたへずして従來の凡ゆる欲望を潔く打ち棄てて、國常立尊の修理固成の大業を感じし、第一番に歸順された神である。かくて凡ての金銀、珠玉、財寶は、各種の眷族なる龍神によつて海底に持ち運ばれ、海底には寶の山が築かれてある。これは世界中もつとも深い海底であるが、ある時期において神業の發動により、陸上に表現さるるものである。要するに物質的の寶であつて、神業の補助材料とはなるが、本當の間にあふ寶とはならぬ。乙米姫命は大神に初めて歸順した時、その寶を持つて來られたなれど、大神はそれ以上の尊き誠の寶を持つてをられるので、人間の目に結構に見ゆるやうなものは、餘り神界では重寶なものと見られない。しかしとに角生命よりも大切にしてみたら一切の寶を投げだした其の改心の眞心に愛でて、従來の罪をお赦しになつた。



この神人が改心して財寶をことごとく捨てて、本當の神の御神意を悟り、麻邇以上の寶を探りあて、はじめて崇高な神人の域に到達し、ここに日の出神の配偶神として顯現されたのである。

つぎに地底のもつとも暗黒い、もつとも汚れたところの地點に押込まれてをられた大地の金神、金勝要神が、國常立尊の出現とともに、天運循環して一切の苦を脱し、世界救済のため陸の龍宮館に顯現された。この神人は稚姫君命の第五女の神である。この金勝要神が地球中心界の全權を掌握して修理固成の大業を遂げ、國常立尊へ之を捧呈し、國常立大神は地の幽界を總攬する御經綸である。

瑞の御魂は、國常立尊の御神業の輔佐役となり、天地の神命により金勝要神と相竝ばして、活動遊ばさるといふことに定められた。これは、いまだ數千年の太古の神界における有様であつて、世界の國家が創立せざる、世界一體の時代のことであつた。

そこで盤古大神（鹽長彦）の系統と、大自在天（大國彦）の系統の神が、大神の經綸を破壊し地の高天原を占領せむため、魔神を集めて一生懸命に押寄せてき

た。しかしながら地の高天原へ攻め寄せるには、どうしてもヨルダンの大河を渡らねばならぬ。ヨルダン河には、前述のごとく、善悪正邪の真相が一目にわかる黄金の大橋がかかつてゐる。それで真先に、その大橋を破壊する必要がおこつてきた。ここに盤古大神の系統は武藏彦を先頭に立てて進んできた。これは非常に大きな黒色の大蛇である。つぎに春子姫といふ悪狐の姿をした悪神が現はれ、次には足長彦といふ邪鬼が現はれ、そして其の黄金の大橋の破壊に全力を傾注した。しかるに此の大橋は、金輪際の地底より湧きでた橋であるから、容易に破壊し得べくもない。思案に盡きたる悪神は、地底における大地の靈なる金勝要神を手に入れる必要を感じてきた。これがために百方手段をつくし奸計をめぐらして、瑞の御魂を舌の劍、筆の槍はまだ愚か凡ゆる武器を整へ、縦横無盡に攻め惱め、かつ、一方には種々姿を變じ善神の假面を被りて、嚴の御魂にたいして讒訴し、瑞の御魂の排斥運動を試みた。嚴の御魂は稍しばし考慮を費し、つひにその悪神の心中謀計を看破され、直ちにその要求をはね付けられた。その時、足長彦の邪鬼、春子姫の悪狐、武藏彦の大蛇の正體は神鏡に照されて奸計のこらず曝露し、

雲霞くもかすみとなつて海山うみやまを越えこ一つは北きたの國くにへ、一つは西南せいなんの國くにへ、一つは遠とほく西にしの國くにへといちはやく逃にげ歸かへつた。

ここにおいて第一だいいっせん戰せんの第一だいいち計畫けいかくは、見事みごと破やぶられた。惡神あくがみは、ただちに第二だいにの計けい畫かくにうつることとなつた。

(附言ふげん)

神ヨハネ世子開キリスト基トと神息キリスト統合トは世界せかいの東北とうほくに再現さいげんさるべき運命うんめいにあるのは、太古たいこよりの神界しんがいの御經綸ごけいりんである。

天てんに王星わうせいの顯あらはれ、地上ちじやうの學者がくしや智者ちしやの驚歎きやうたんする時ときこそ、天國てんこくの政治せいぢの地上ちじやうに移うつされ、仁愛みろく神政しんせいの世よに近づちかいた時ときなので、これがいはゆる三千さんぜん世界の立替たてかへ立直たてなほしの開始かいしである。

ヨハネの御魂みたまは仁愛みろく神政しんせいの根本こんぽん神しんであり、また地上ちじやう創設さうせつの太元たいげん神しんであるから、キリストの御魂みたまに勝まさること天地てんちの間隔かんかくがある。ヨハネがヨルダンがは河がはの上流じやうりうの野やに叫さけびし神聲しんせいは、ヨハネの現人あらはれとしての謙遜けんそん辭じであつて、決けつして眞しんの聖意せいいではない。國常立尊くにこたたちのみことが自己じこを卑ひくうし、他たを尊たふとぶの謙讓けんじやう的てき聖旨せいしに出いでられたままでである。

ヨハネは水をもつて洗禮を施し、キリストは火をもつて洗禮を施すとの神旨は、月の神の靈威を發揮して三界を救ふの意である。キリストは火をもつて洗禮を施すとあるは、物質文明の極點に達したる邪惡世界を燒盡し、改造するの天職である。

要するにヨハネは神界、幽界の修理固成の神業には、月の精なる水を以てせられ、キリストは世界の改造にあたり、火すなはち靈をもつて神業に参加したまふのである。故にキリストは、かへつてヨハネの下駄を直すにも足らぬものである。ヨハネは神界、幽界の改造のために聖苦を嘗められ、キリストは世界の人心改造のために身を犠牲に供し、萬人に代つて千座の置戸を負ひて、聖苦を嘗めたまふ因縁が具はつてをられるのである。これは神界において自分が目撃したところの物語である。

そしてヨハネの嚴の御魂は、三界を修理固成された曉において五六七大神と顯現され、キリストは、五六七神政の神業に奉仕さるるものである。故にキリストは世界の精神上の表面にたちて活動し、裏面においてヨハネはキリストの聖體を

保護ほごしつつしんせい神世を招來せうらいしたまふのである。

耳みみで見みて目めできき鼻はなでもくうてのくうて 口くちで嗅かがねば神かみは判わからず  
耳みみも目めも口くち鼻はなもきき手て足あしきき 頭あたまも腹はらもきくぞ八やつツ耳みみ

(大正一〇・一〇・二一 舊九・二一 櫻井重雄録)

第四篇 龍宮占領戰りゆうぐうせんりやうせん

第二十五章 武藏彦一派の惡計むさしひこいつぱのあくけい〔二五〕

武藏彦、春子姫、足長彦の悪神は、最初の黄金橋破壊に失敗したので、こんどは大擧して一擧に之を打ち落さむとし、數萬の雷神や、悪龍、悪狐および醜女、探女の群魔を堂山の峽に集め密議を凝らした。その時に參加した悪神は竹熊、木常姫を大將とし、八十熊、鬼熊、猿飛彦、魔子彦、藤足彦、中裂彦、土彦、胸長彦、牛人らの悪神が部將の位地につき、黄金橋の占領破壊に全力をつくした。そして木常姫、魔子彦は東の空より、猿飛彦は東南より、牛人、藤足彦は西北より現はれて三角形の陣をとり、數萬の魔神を引率して、疾風迅雷的に龍宮城を占領すべき計畫をめぐらし手筈を定めた。

この目的を達するには、地の高天原を内部より混乱瓦解させねばならぬとし、魔軍はたくみに探女を放ち、そして瑞の靈の肉體を陥れむとして炎の劍や、氷柱の槍にて大々的攻撃を開始した。

瑞靈は茲に靈を下して大八洲彦命と現はれ、寄せくる探女を眞澄の劍を振かざし山の尾ごとに追ひ伏せ、河の瀬ごとに切りまくつた。その神勇に驚き周章ふためき四方に逃げ散つた。竹熊、木常姫らの計畫は全く水泡に歸し、數多の部下を

失ひ、失望の結果、ふたたたび計を定め、金勝要神を藥籠中のものとせむとした。その主謀者は奸智に長けたる春子姫であつた。

春子姫は藤足彦、牛人とともに、小島別を甘言をもつて説きつけ、小島別の手によつてその目的を達せむと企らんだのである。小島別は元來正直の性質であるから、春子姫の詐言を信じて車輪の運動を開始したが、彼は嚴の靈の靈眼に見破られて目的を妨げられ、つひに自棄氣味になつて大々の活動をはじめ、木常姫、中裂彦の惡神を加へ、鞍馬山に立てこもつて該山の魔王と謀し合せ、數萬の邪靈を引つれ、強壓的に龍宮城を占領せむと企てた。しかし注意ぶかき大八洲彦命の炯眼に再び看破られ、小島別の覺醒的返り忠とともに第二の計畫も全然破れてしまひ、春子姫は遂に悶死を遂げ、根の國底の國に落ち行くの止むを得ざる破目となつた。

春子姫の親なる武藏彦は、こんどは筑波仙人の體を藉り、またもや龍宮城の占領を企てた。しかるに武藏彦の目的とするところは龍宮城の占領ばかりではなく、地の高天原の聖地をも占領し、その上國常立尊を退去させ、盤古大神をもつて、

これに代らしめむとするのが根本的の目的であつた。

さて仙人には神仙、天仙、地仙、凡仙の四階級がある。そしてその四種の仙人にも、正邪の區別がある。筑波仙人は邪神界に屬し、第三階級に屬する地仙である。

またもや武藏彦は黒姫、菊姫、八足姫を先頭に立て、竹熊に策を授けて再擧を企てた。竹熊はまづ第一に金勝要神をわが手に籠絡せむとし、土彦、牛人、中裂彦、鬼熊らの部將株と、大江山に集まつて熟議を凝らした。竹熊は表面きはめて温良な風姿を装うてゐるが、その内心は實に極惡無道の性質をもつてをり、いろいろと手を換へ品を換へ、嚴の御魂に取りいつて、表面歸順の意を表し木常姫を手に入れ、またもや小島別を誑惑し、牛人をしてつひに大八洲彦命を計略をもつて亡ぼさしめむとした。牛人の惡靈は謀計をもつて大八洲彦命を堂山の峽に導き、竹春彦、藤足彦その他數名の邪神に命じて、雙方より之を攻め討たしめむとした。そこへ守高彦といふ武勇絶倫の神現はれて、大八洲彦命の危難を救はむとした。されど守高彦はある附屬の女神のために後髪をひかれて、進むことができなかつ



た。

竹熊たけくまの部下ぶかは、今いまや大八洲彦命おほやしまひこのみことに接近せつきんしてきたり、十握とつかの劍つるぎを抜き持ちて前後ぜんご左さい右うより斬りつけた。大八洲彦命おほやしまひこのみことは雷らいのごとき言靈ことたまを活用くわつようし、嚴いづの御魂みたまの御加勢おてつたいにより、脆もろくも敵てきは退散たいさんした。

この時地ときちの高天原たかあまはらにおいては稚姫君命わかひめぎみのみことは大いに御心配ごしんぱいあそばし、不思議ふしぎな神術かむわざを實行じっかうされ、その神術かむわざと言靈ことたまと相俟あひまつて敵てきを退散たいさんせしめ無事ぶじなるを得たのである。その神法しんぽふは千引ちびきの岩いはを大神おほかみの神殿しんでんに安置あんちし、岩いはの上に白しろき眞綿まわたと、赤あかき眞綿まわたとを重ねかさて岩いはにかぶせ、赤色せきしよくの長ながき紐ひもをもつて十二廻じふにめぐり廻まはし、これを固かたく縛しばらせられたのである。これは神界しんかいの禁厭まじなひであつて、一身上いつしんじやうの一大事いちだいじに關くわんした時ときに行おこなふものである。

大八洲彦命おほやしまひこのみことの言靈ことたまの雄健をとけびと神術かむわざの徳とくによつて一旦退却いつたんだいきやくした竹熊たけくまの一派いつぱは、ただちに地ちの高天原たかあまはらに馳はせ登り、稚姫君命わかひめぎみのみことの御前みまへにまかり出いでて表面へうめんに改心かいしんを装よそほひ、命みことをして深く安堵あんどせしめおき、油斷ゆだんの際すきに乗じゃうじて、執念しふねん深くも金勝きんかつ要神やうかみを手てにいれむと百方苦心ひやうしぼうくしんをめぐらし、夜よを日ひについで大々だいだいてきくわつどう的活動くわつどうを續つづけをるを見たまひし

大神は、竹熊一派を憐れみ、善心に立ち歸らしめ、善道に導き救はむとして、種々と因果の理法を説き教へられた。

されど元來悪神の系統なれば、表面には改心せしごとく装ひをれども、内心はますます荒んで來るばかりである。そこへこの度は、大江山から現はれた邪神の頭領株、鬼熊なるもの現はれたり、竹熊と密謀を凝らし、あくまでも最初の目的を達せむと試みたが、この鬼熊と木常姫との間に、非常な意見の衝突をきたしたために、竹熊との關係上自滅的に破れてしまった。竹熊は木常姫と同腹で、今度の計畫を立ててみたのである。そこで鬼熊と木常姫は、意見の大衝突より大闘をはじめた。又ある事情のために竹熊は鬼熊と争ひ、鬼熊に對して非常の打撃を加へた。この衝突たるや總て彼ら悪神の權力争ひのために起つたのである。

(大正一〇・一〇・二一 舊九・二一 加藤明子録)

## 第二六章 魔軍の敗戦 (二六)

竹熊はなほ懲りずに、執念深くも最初の目的を貫徹せむとし、魔子彦、足長彦、牛人、寅熊と相語らひ、こんどは金勝要神を手に入ることを断念し、大八洲彦命を高天原より排除せむとした。然るに、足長彦はなほ依然として金勝要神をねらひ、寅熊も亦同じく之を内心ひそかにねらつてゐた。さうして魔子彦は甘言をもつて大八洲彦命の身邊に近づき、隙あらばこれを刺殺さむとする計畫であつた。しかし、もとの謀主は竹熊であるから、各自の野望を心中深く秘めながら、互ひに自己本位の計畫をたててゐた。竹熊は、大神に信任厚き熊足彦を味方につけ、牛人、與彦、黒姫、菊姫を部將と定めて暗々裡に活動をはじめた。また熊彦は杉山彦、中裂彦、照姫、藤姫、花立姫、土彦、谷熊、蟹熊の邪神を部將として、暗々裡に活動してゐた。さうして熊彦は足長彦を參謀につかつて、盛に大八洲彦命を討取る計畫をすすめてゐた。一方また魔子彦は田依彦、豆寅、胸長彦、草香姫、時津彦、梅若彦、八島姫、高山彦の神々を部將と定め、大八洲彦命の歡心を買ひ、搦手より龍宮城に忍び入り、以て龍宮の實權を握り、その上、事をなさむとの下心であつた。しかしこれらの三巨頭は、表面一致の行動をとつて龍宮占領の計畫

をすすめ、あまたの魔軍をかり集めてまつしぐらに黄金橋に攻めかけた。しかし  
いづれも自己を本位とする魔軍の團結であるから、今一息といふところで、四分  
五裂のやむなきに立ちいたつた。

さる程に、竹熊は猿飛彦、木常姫を背後の參謀として、熊彦、魔子彦を兩翼と  
し、綿密なる作戰計畫に着手した。第一に、自分の地位を保護する必要ありとし、  
牛人および魔子彦を使ひ、足長彦を偽つて遠き土地に去らしめ、與彦、黒姫、菊  
姫をして數多の魔軍を引率せしめ、橄欖山のうしろに忍ばしめて時の來るのを待  
たしめた。また一方魔子彦に命じて、足長彦の行動を監視せしめた。ここに熊彦  
の部下なる土彦は魔子彦の計略を悟り、密使をもつて足長彦に一伍一什を報告し  
た。さうしてまた魔子彦は胸長彦を參謀とし、豆寅の妻なる草香姫をつひに奪ひ  
とつた。魔子彦には、田依彦といふ邪神が影のごとくに附隨して、種々の企策を  
授けてをつた。田依彦は草香姫の弟である。そこで魔子彦の行状をうかがひ知つ  
たる、熊彦の部下なる杉山彦、中裂彦、花立彦、土彦、谷熊、時彦などが憤慨し  
て、魔子彦をヨルダン川に沈め殺さむとした。しかるに、梅若彦、八島姫、高山

彦は魔子彦のきたなき行動に愛想をつかして、その實況を大八洲彦命に報告するとともに善心に立復り、大八洲彦命に心の底から歸順した。

このとき大八洲彦命はヨルダン川を渡り、はるか東方に出陣してゐたのである。一方熊彦は、また竹熊の部下なる牛人、與彦、黒姫、菊姫、谷熊、寅熊とともに、橄欖山の後に陣をかまへて待伏せた。これは大八洲彦命を第一着に亡ぼして目的を達せむためであつた。

大八洲彦命は魔子彦を歸順せしめ、武勇絶倫なる高山彦の軍勢を引率して、龍宮城に歸還し、杉山彦の返り忠なる報告によつて、竹熊の謀計をさとりに、遠巻に橄欖山をとり圍み、一擧にこれを殲滅せむと天の磐船をもつて火弾を投げつけた。たちまち竹熊の軍勢は蜘蛛の子を散らすごとく、四方八方に散亂してしまつた。

(大正一〇・一〇・二一 舊九・二一 谷口正治録)

竹熊、魔子彦、熊彦の三角同盟軍は、前述のごとく内部の暗闘より統制力を失ひ、一時は諸處に潰走した。そのため暫時の間は、地の高天原もやや小康を得てゐた。

以前の失敗に懲りた竹熊は攻撃の方法を一變し、こんどは千辛萬苦の結果、嚴の御魂の信任を得ることに努力した。嚴の御魂はやや安堵され、彼らはほとんど改心の實を擧げたものと思はれ、少しく油斷があつた。そこで竹熊は策の當れるを心ひそかに喜びつつ、嚴の御魂の系統なる木常姫と力を協せ、心を一にし内部より龍宮城を瓦解し、兩神は龍宮城の王たらむとの手筈を定めた。竹熊は自分の妻なる菊姫にワザと汚點をつけこれを離縁し、猿飛彦の妻なる木常姫を奪はむとした。

ここに猿飛彦は竹熊の謀計を覺り、怒つて木常姫を追ひ出した。竹熊と木常姫は謀計の圖に當れるを喜び、龍宮城に參上り言葉たくみに猿飛彦や、菊姫の亂倫悪行の數々を捏造して、これを嚴の御魂に進言した。

ほとんど信任した竹熊、木常姫の言に耳を傾け、嚴の御魂は竹熊と木常姫の結

婚を事情やむを得ずとして、許されることになつた。ここに大八洲彦命と金勝要神は、猿飛彦と菊姫の詳細なる陳情によつて彼らの陰謀を知悉された。竹熊が木常姫と結婚せむとした眞の目的は、木常姫が、嚴の御魂の肉身の系統であるから、自分の權勢力を増しておき、徐に時を待つて龍宮城を占領せむとしたのである。また木常姫は夫なる猿飛彦の頑迷にして、かつ強硬なる態度に、やや嫌忌の情を發してゐた際であるから、表面温良にして多くの者の信任厚き竹熊と夫婦になり、金勝要神や、大八洲彦命の地位に取つて代らむと考へたからである。

竹熊らの陰謀を知悉したる大八洲彦命は、金勝要神と共に面を冒して嚴の御魂に諫言し、かつ速かに竹熊と木常姫の結婚を、破棄せむことを道理の上より強請した。この様子を窺ひ知つたる竹熊と木常姫は、大いに怒つて大八洲彦命に打つてかかつた。しかして一方木常姫はあまたの魔軍の應援を得て、金勝要神を八方より挾撃し、ほとんど窮地に陥れむとした。ここに小島別は、仲裁の勞を執らむとして少數の軍を引率し、急いで龍宮城に馳せ參じ百方手を盡した。しかるに戰鬥はますます激烈となつた。しかして竹熊はエデンの園に陣を取り、木純姫、足

長彦らを參謀として陣營を構へた。

このとき地の高天原も、龍宮城も暗雲に包まれ、天地は慘憺として咫尺を辨ぜざる光景である。さうして天の一方よりは、數萬の魔軍が竹熊にむかつて應援する。その時の大將は大森別、加津彦、杉森彦の面々である。にはかに雷鳴天地にとどろきわたり、雨は盆を覆へすごとく、東北の風は、地上一切のものを天上に捲き上げむとするの慘状であつた。

ここに嚴の御魂は驚きおそれ龍宮城を立ちいで、高杉彦、安熊らの部將を引率れ、シナイ山に避難された。しかして後には金勝要神主宰の下に小島別、元彦、高杉別を部將として、龍宮城を死守した。この時地の高天原も、龍宮城も慘憺たる光景で、殆ど全滅に近かつたのである。

(大正一〇・一〇・二二 舊九・二二 外山豊二録)



このとき大八洲彦命は元彦に命じて少數の神軍を引率れ、橄欖山を守らしめた。この山はエルサレムの西方にある高山で、エルサレムおよび龍宮城を守るには、もつとも必要の地點である。

この時エデンの野に集まりし竹熊は木常姫、足長彦、富屋彦を部將として、第一着に橄欖山の背後に出で、背面より襲撃をしてきた。また一方大森別は中空より高津鳥の魔軍を指揮して、隕石の珠を黄金橋の上に無數に發射した。されども黄金橋は、どうしても落すことはできなかつた。

ここにおいて大八洲彦命は改心したる牛人を引率し、天の高天原に裁斷を仰ぐべく、雲井はるかに舞ひ上り、月の大神の裁斷を乞ひ、かつ應援軍を派遣されむことを歎願した。しかしながら天上においても地の高天原と同様に、正邪兩軍の戦鬪眞最中であつて、月の大神は月宮殿の奥深く隠れたまひ、拜顔することは得なかつた。

大八洲彦命はやむを得ず地上に降臨せむとするに先立ち、牛人をして高天原の實情を金勝要神に報告せしめられた。しかし牛人は途中において竹熊、木常姫の

一派の俘虜となり、大八洲彦命の報告をせなかつた。しかして再び、竹熊の魔軍に從つてしまつたのである。

大八洲彦命は獨り少數の神軍とともに、天山の頂に降つてきた。ここには胸長彦の軍勢が待伏せ、表面では歓迎と見せかけ、山麓に伏兵をおきて一齊に火弾を浴せかけた。そのとき天上に聲あり、

『崑崙山に移れ』

との神命である。

然るに山麓には伏兵が無數に取巻いてゐる。このとき天より天の羽衣が幾つともなく降つてきた。大八洲彦命はじめ從神は、一々これを身に纏ひ、中空を翔つて、やうやく崑崙山に難を避けた。

險峻な山に似ず、山巔には非常な平原が廣く展開されてあり、いろいろの草花が爛漫と咲き亂れ、珍らしい果實が澤山に實つてゐた。大八洲彦命の一隊は、非常に空腹を感じたために、その果物を取つておのおの食料に代へた。胸長彦の軍勢は、またもや山麓に押寄せて八方より喊聲を揚げた。見ると、數百萬の魔軍が

蟻ありの這はひ出いづる隙すきもなきまでヒシヒシと取とり巻まいてゐる。しかしてその軍勢ぐんぜいは十二じふにの山道やまみちを傳つたうて十二方じふにはうより、一度いちどに攻せめ上のほつて來きた。めいめいに手分てわけして、大八おほやしま洲彦命ひこのみことの軍勢ぐんぜいは各自かくじ各部署かくぶしよを定さだめ上のほりくる軍勢ぐんぜいを、そこに實みのつてゐる桃ももの實みを取とつて打うちつけた。たちまち敵軍てきぐんはいづれも、雪崩なだれの如ごとくになつて潰つぶえ、山麓さんろくに落おち込んだ。

この時とき、中空ちゆうくうから何なんともいへぬ妖雲えううんが現あらはるよと見みるまに、大自在天だいじざいてん大國彦おほくにひこの部ぶ下の將卒しやうそつが、四方しはう八方はつぱうより崑崙山こんろんざんを目めがけて破竹はちくの勢いきほひで攻せめかけてくる。大八おほやしま洲彦命ひこのみことは桃ももの枝えだを折おり、それを左右さいうに打うち振りたまへば、部ぶ下の神將しんしやうもおなじく桃ももの枝えだをとつて、大自在天だいじざいてんの魔軍まぐんに向むかつて打うち振ふつた。見みる間に一天いつてんカラリと晴はれわたり、拭ぬぐふがごとく紫むらさきの美うるはしき祥雲しやううんに變かはつてきた。而しかして非常ひじやうに大だいなる太陽たいやうは山腹さんぶくを豊榮とよさかのほ登のぼりに立たち登のぼり、天地てんちの暗やみを照てらして皎々かうかうと山やまの中央ちゆうあうに輝かがきはじめた。しかして黒雲こくうんの中なかから大自在天だいじざいてんの軍勢ぐんぜいの姿すがたは消きえ失うせた。しかし山やまの八合目はちがふめあたりは何なんとなくどよめきの聲こゑが聞きえてきた。敵軍てきぐんが再舉さいきよの相談そうだんの聲こゑである。胸むね長彦ながひこの魔軍勢まぐんぜいは、山麓さんろくの谷たにに落おちて或あるひは傷きずつき、あるひは死しし非常ひじやうな混雜こんざつを極きは

めてゐる。その聲こゑと相合あひがつして何なんともいへぬ嫌いやな感かんじである。よつて大八洲彦命おほやしまひこのみことは、天てんに向むかつて天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうされた。つづいて從屬じゆうぞくの神人かみがみも同おなじく祝詞のりとを合唱がっしやうした。その聲こゑは天地てんちに響ひびきわたつて、そこら一面夜いちめんよが明あけたやうな、壯快さうくわいな感かんじがする。そのとき既すでに太陽たいやうは形かたちを小ちひさくして、中天ちゆうてんに上のぼつてゐた。今いままでの敵軍てきぐんの矢叫やさけびの聲こゑも、大自在天軍だいじざいてんぐんの囁ささやきも松吹まつふく風かぜと變かはつてしまつた。

（大正一〇・一〇・二二 舊九・二二 外山豊二録）

## 第二九章 天津神あまつかみの神算鬼謀しんさんきぼう（二九）

神界しんかいの場面ばめんは、ガラリ一轉いつてんした。大八洲彦命おほやしまひこのみことは少數せうすうの神軍しんぐんとともに、廣大無邊くわうだいむへんな原野げんやに現あらはれた。そして一隊いつたいを引率ひきつれ、東ひがしへ東ひがしへと進軍しんぐんされた。その果はてしもない原野げんやには身みを没ぼつするばかりの種々いろいろの草くさが茫々ぼうぼうと繁しげつてゐる。その刹那せつな、諸方しよほうより火ひの手てがあがつた。しかも風かぜは非常ひじやうに強烈きやうれつな旋風せんふうである。天てんの一方いつぱうを望のぞめば、

常世彦が現はれ軍扇をもつて數多の魔軍を指揮してゐる。

火は諸方より燃え迫り、煙とともに大八洲彦命の一隊を包んでしまつた。ここに大八洲彦命は進退これ谷まり、自分の珍藏してゐる眞澄の珠を、中空にむかつて投げつけられた。その珠は中空に爆裂して數十萬の星となつた。この星は残らず地上に落下して威儀儼然たる數十萬の神軍と化した。さうしてその神軍は、一齊に百雷の一度にとどろくごとき巨大なる言靈を發射した。それと同時に、さも猛烈なる曠野の火焰は「ぱつたり」消滅し、丈高き草はことごとく焼き拂はれた。魔軍の死骸は四方八方に黒焦となつて累々と横たはつてゐた。

それから大八洲彦命の一隊はだんだん東へ向つて進んでいつた。そこに又もや一つの大きな山が出現してゐる。この山には彼の胸長彦の殘黨が立て籠もり、再擧を計つてゐた。

この山を天保山といふ。胸長彦はこんどは安熊、高杉別、桃作、虎若、黒姫を部將として、大八洲彦命の一隊を待ち討たむとしてゐた。このとき眞澄の珠より現はれたる數十萬の軍勢は残らず天へ歸つてしまつた。せつかく勢力を得て、勇

氣百倍せる大八洲彦命は非常に失望落膽して、天にむかひ再び神軍の降下せむことを哀願された。折しも天よりは紫雲に打ち乗つて容姿端麗な白髪の神使が、二柱の實に美はしい女神をしたがへ大八洲彦命の前にお降りになり、嚴かに天津神の命を傳へられた。その命令の意味は、

大八洲彦命が今度世界の修理固成をなして、國常立大神の神業を奉仕したまふ上において、加勢の力を頼むやうなことであつては、この神業は到底完全に成功せぬ。それゆゑ大八洲彦命の膽力修鍊のため、わざとに神軍を引き上げさせ、孤立無援の地位に立たしめたのは神の深き御仁慈である」

と云ひをはり、天の使は掻き消すごとく姿をかくしたまうた。

天保山のはるか東北にあたつて天教山といふのがある。そこには八島別が、天神の命により、大八洲彦命を救援すべく計畫されて、あまたの神軍を引率してをられた。

大八洲彦命は今の神使の教示を聞き、もはや天よりの救援隊は、一神も來らぬものと斷念されてゐた。そのために天教山の八島別の軍勢を、わが援軍なりとは

少しも氣づかず、かへつて天保山の別働隊のやうに思はれたのである。

一方胸長彦は、天保山の陣營が強壓さるることを恐れて、いろいろと謀議を凝らした結果、まづ第一に大八洲彦命を偽つて歸順し、命とともに八島別の陣營なる天教山を殲滅せむことを企てたのである。そこで胸長彦は安熊、桃作、虎若の三部將を軍使として大八洲彦命の陣營に遣はして、歸順の意を表し、かつ天教山には大八洲彦命にとつて、強敵の現はれたことを注進した。

大八洲彦命の陣營は、原野の中心にあつて非常に不利な位置であつた。もし天教山の上より一齊射撃を受けたならば、大八洲彦命の一隊は、全滅さるる恐れがあつたのである。さういふ立場に立ちいたれる大八洲彦命は、渡りに船と快諾されてここに和睦をなし、胸長彦とともに天教山を攻撃することとなつた。

天教山の方においては、胸長彦の先頭に立ちて攻め來るのを見て、「てつきり」敵軍に相違なしと思ひ、山上より大風を起し、岩石を飛ばし、攻めくる敵軍を散々に悩ました。しかも先頭に立つた胸長彦の軍隊は、第一戦において殆ど滅亡されてしまつた。

その次に第二軍として現はれたるは、大八洲彦命の軍勢であつた。命は數十羽の鳥を使つて、天教山なる八島別にたいし、歸順すべく神書を認め、足に括りつけて放たれた。鳥は空中高く舞ひあがるとともに天教山へ昇り、八島別に傳達した。八島別命はその傳達を讀んで、はじめて大八洲彦命の消息を知り、かつ、  
「自分は天の命により、大八洲彦命を救援に來たものである」  
との信書を書いて、同じく鳥の足へ括りつけて放した。鳥にはかに金色の鴉と化り、四方を照しつつ大八洲彦命の前に下つてきた。  
ここにおいて始めて相互の真相がわかり、大八洲彦命の軍は歡喜のあまり天にむかつて神言を奏上した。  
その聲は天教山の八島別の陣營に澄みきることくに響きわたつたので、八島別は山を下らず、そのまま諸軍勢を引き率れ天の一方に姿をかくしてしまつた。かくのごとくして敵軍を殲滅せしめたまひし天津神の神算鬼謀は、實に感歎の次第である。



第三〇章 黄河畔の戦闘〔三〇〕

神界の場面はここに急轉し、大八洲彦命は濁流みなぎる黄河の畔にすすまされた。ここには稲山彦といふ金毛九尾の一派の部將が、鐵城を築きて控へてをる。これは竹熊、木常姫らの部下である。

今や大八洲彦命は黄河を渡つて龍宮城に歸還せられむとするところである。歸還されては竹熊の目的成就し難きをおそれ、ここに稲山彦に命じて、大八洲彦命を中途において亡ぼさむとしたのである。大八洲彦命はかかる企みのあらむとは寸毫も心づかず、少數の部下を引き率れて城下に近づいた。

シナイ山に御座す嚴の御魂はこの現状をはるかに見そなはし、救援のため高杉別に命じ杉松彦、若松彦、田子彦、牧屋彦、時彦の各部將に數百の神軍を引率せしめ、天の磐船に乗りて應援に向かはしめられた。敵の城内よりは盛んに火彈を投下し、縦横無盡に攻め惱まさむとす。このとき前述の應援軍は天の磐船に乗り天上より火彈を投下し敵城を粉碎した。敵は狼狽のあまり四方に散亂した。

折しも大虎彦といふ悪神は、數萬の蒙古の魔軍をかつて大聲叱呼し、よく之を操縦指揮し濁流を渡つて、大八洲彦命の陣營に一直線に襲撃する。にはかに西南の空にあたつて、黒煙濛々と立ち現はれたと思ふ一刹那、雲は左右にサツト分れて勇猛無比の獅子王現はれ、軍扇をあげて咆吼怒號しはじめた一刹那、數萬の暗星は地上に落下した。大小無数の暗星は地上に落下するとともに、大小無数の獅子と變化し神軍目がけて突進してきたつた。

このとき東北の天より雲路を分け火を噴きつつ進みきたる龍體がある。これは乙米姫命であつた。命は大八洲彦命の眼前に現はれ、麻邇の珠を渡し何事か耳語して、また元のごとく東北の天にむかつて歸還した。ここに大八洲彦命は麻邇の珠を受取り、應援軍なる田子彦と牧屋彦に預けた。すると田子彦、牧屋彦にはかに態度一變し、敵の稻山彦についてしまつた。

稻山彦は、大虎彦と獅子王の應援ある上に麻邇の珍寶を手にいれ、勇氣は頓に百倍し大八洲彦命を散々に打ち惱めた。

ああ大八洲彦命の運命は如何になりゆくであらうか。

第三章 九山八海〔三一〕

大八洲彦命は、杉松彦、若松彦、時彦、元照彦の部將とともに、八島別の現はれし天教山に引きかへし、ここに防戦の準備に取りかかった。稲山彦は大虎彦と獅子王の應援を得て勝に乗じ、天教山を八方より取りまいた。

稲山彦は潮満の珠をもつて、天教山を水中に没せしめむとした。地上はたちまち見渡すかぎり泥の海と一變した。このとき天空高く、東の方より花照姫、大足彦、奇玉彦は天神の命によりてはるかの雲間より現はれ、魔軍にむかつて火弾を發射し、天教山の神軍に應援した。されど一面泥海と化したる地上には、落ちた火弾も的確にその效を奏せなかつた。ただジュンジュンと怪しき音を立てて消えてゆくばかりである。されど白煙濛々と立ち昇りて、四邊を閉ざすその勢の鋭さ

に敵しかねて、敵軍は少なからず惱まされた。

このとき稲山彦の率ゆる魔軍は天保山に登り、まづ潮満の珠をもつて、ますます水量を増さしめた。天教山は危機に瀕し、神軍の生命は一瞬の間に迫ってきた。折しも杉松彦、若松彦、時彦は、天教山にすむ鳥の足に神書を括りつけ、天保山に向つて降服の意を傳へしめた。鳥の使を受けた稲山彦は、意氣揚々として諸部將を集め會議を開いた。その結果は、

大八洲彦命が龍宮城管理の職を抛つか、さもなくば自殺せよ。しからば部下の神軍の生命は救助せむ

との返信となつて現はれた。この返信を携へて鳥は天教山に歸つてきた。神書を見たる杉松彦、若松彦、時彦は密かに協議して、自己の生命を救はむために大八洲彦命に自殺をせまつた。

大八洲彦命は天を仰ぎ地に俯し、部下の神司らの薄情と冷酷と、不忠不義の行動を長歎し、いよいよ自分は天運全く盡きたるものと覺悟して、今や將に自殺せむとする時しもあれ、東の空に當つて足玉彦、齋代姫、磐樟彦の三部將はあまた

の風軍を引きつれ、

「しばらく、しばらく」

と大音聲に呼ばはりつつ、天教山にむかつて最急速力をもつて下つてきた。忽然として大風捲きおこり、寄せきたる激浪怒濤を八方に吹き捲つた。泥水は風に吹きまくられて、天教山の麓は水量にはかに減じ、その餘波は大山のごとき巨浪を起して、逆しまに天保山に打ち寄せた。

天保山の魔軍は潮干の珠を水中に投じて、その水を減退せしめむとした。西の天よりは道貫彦、玉照彦、立山彦數萬の龍神を引きつれ、天保山にむかつて大水を發射した。さしもの潮干の珠も效を奏せず、水は刻々に増すばかりである。これに反して天教山は殆ど山麓まで減水してしまつた。南方よりは白雲に乗りて、速國彦、戸山彦、谷山彦の三柱の神將は、あまたの雷神をしたがへ、天保山の空高く鳴り轟き天地も崩るるばかりの大音響を發して威喝を試みた。

ここに稻山彦は、天保山上に立ちて潮満の珠を取りいだし、一生懸命に天教山の方にむかつて投げつけた。水はたちまち氾濫して天教山は水中に陥り、大八洲

彦命の首のあたりまでも浸すにいたつた。

泥水はなほますます増える勢である。このとき東北に當つて、天地六合も崩るるばかりの大音響とともに大地震となり、天保山は見るみるうちに水中深く没頭し、同時に天教山は雲表に高く突出した。これが富士の神山である。

時しも山の頂上より、鮮麗たとふるに物なき一大光輝が虹のごとく立ち昇つた。その光は上に高く登りゆくほど扇を開きしごとく擴がり、中天において五色の雲をおこし、雲の戸開いて威嚴高く美しき天人無數に現はれたまひ、その天人は山上に立てる大八洲彦命の前に降り眞澄の珠を與へられた。その天人の頭首は木花姫命であつた。

この神山の、天高く噴出したのは國常立尊の蓮華臺上に於て雄健びし給ひし神業の結果である。その時現代の日本國土が九山八海となつて、環海の七五三波の秀妻の國となつたのである。

天保山の陥落したその跡が、今の日本海となつた。また九山とは、九天にとどくばかりの高山の意味であり、八海とは、八方に海をめぐらした國土の意味であ

る。ゆゑに秋津島根の國土そのものは、九山八海の靈地と稱ふるのである。

（大正一〇・一〇・二二 舊九・二二 加藤明子録）

### 第三二章 三個の寶珠（三二）

神山の上うへに救すくはれた大八洲彦命おほやしまひこのみことは、天てんより下くだりたまへる木花姫命このはなひめのみことより眞澄ますみの珠たまを受け、脚下あしもとに現あらはれた新あたしき海面かいめんを眺ながめつつあつた。見みるみる天保山てんぱうざんは急きふに陥かん落らくして現今げんこんの日本海にほんかいとなり、潮満しほみつ、潮干しほひるの麻邇まにの珠たまは、稻山彦いなやまひこおよび部下ぶかの魔軍まぐんぜ勢いとともに海底かいていに沈没ちんぼつした。稻山彦いなやまひこはたちまち惡龍あくりゆうの姿すがたと變へんじ、海底かいていに深ふかく沈しづめる珠たまを奪とらむとして、海上かいじやうを縦横無盡じゆうわうむじんに探さぐりまはつてゐた。九山きうざんの上うへより之これを眺ながめたる大八洲彦命おほやしまひこのみことは、脚下あしもとの岩石がんせきをとり之これに伊吹いぶきの神法しんぱふをおこなひ、四し個この石いしを一度いちどに惡龍あくりゆうにむかつて投なげつけた。惡龍あくりゆうは目敏めざとくこれを見みて、ただちに海底かいていに隠かくれ潜ひそんでしまつた。

この四つの石は、海中に落ちて佐渡の島、壹岐の島および對馬の兩島となつたのである。

そこへ地の高天原の龍宮城より乙米姫命大龍體となつて馳せきたり海底の珠を取らむとした。稻山彦の悪龍は之を取らさじとして、たがひに波を起し【うなり】を立て海中に争つたが、つひには乙米姫命のために平げられ、潮満、潮干の珠は乙米姫命の手にいった。乙米姫命はたちまち雲龍と化し金色の光を放ちつつ九山に舞ひのぼつた。この時の状況を古來の繪師が、神眼に示されて「富士の登り龍」を描くことになつたのだと傳へられてゐる。

乙米姫命の變じた彼の大龍は山頂に達し、たちまち端麗莊嚴なる女神と化し、潮満、潮干の珠を恭しく木花姫命に捧呈した。

木花姫命はこの神人の殊勳を激賞され、今までの諸々の罪惡を赦されたのである。これより乙米姫命は、日出る國の守護神と神定められ、日出神の配偶神となつた。

ここに木花姫命は大八洲彦命にむかひ、



「今天より汝に眞澄の珠を授け給ひたり。今また海中より奉れる此の潮満、潮干の珠を改めて汝に授けむ。この珠をもつて天地の修理固成の神業に奉仕せよ」と嚴命され、空前絶後の神業を言依せたまうた。大八洲彦命は、はじめて三個の珠を得て神力旺盛となり、徳望高くつひに三ツの御魂大神と御名がついたのである。

(大正一〇・一〇・二二 舊九・二二 櫻井重雄録)

### 第三三章 エデンの燒盡〔三三〕

大八洲彦命は、天にも昇る心地し三個の珠を捧持し、木花姫命より賜はりし天の磐船に乗りて空中はるかに西天を摩して、龍宮城に歸還した。一方エデンの園に集まれる竹熊をはじめ木純姫、足長彦の大將株は、村雲別の注進により、大八洲彦命の無事に歸城したることを知り、周章狼狽し鳩首謀議の上一計を案出し、

ここに木純姫、足長彦にはかに改心の状をよそほひ、龍宮城に参向して、大八洲彦命の無事凱旋を祝するたためにと詐はりて盛なる宴をひらき、大八洲彦命の御出席を請ひ奉つた。大八洲彦命はもとより仁慈に深き義神なれば、彼らの請を容れ、他意なき體にてエデンの園にいたりたまひ、八尋殿の奥深く迎へられて酒宴の席につきたまうた。その時の従者は守高彦、守安彦、高見姫であつた。木純姫、足長彦は表面歸順をよそほひ、歡待いたらざるなき有様であつた。

大八洲彦命は八鹽折の酒に酔はせたまひて、八尋殿の中に入りて心ゆるして宿泊することとなつた。命の熟睡の様子を窺ひみたる竹熊は、時分はよしと暗夜に乘じ八方より八尋殿に火をかけて従者諸共にこれを焼殺せむとした。時に三柱の従神はおのおの三個の珠を一個づつ捧持して命の枕邊に警護してゐた。火は猛烈に燃えさかつて八尋殿を今に焼きつくさむとする勢である。

このとき眞澄の珠よりは大風吹きおこり、潮満の珠よりは龍水迸りて、瞬くうちに殿の火焰を打ち消した。また潮干の珠よりは猛火を吹出し、眞澄の珠の風に煽れてエデンの城は瞬くうちに焼け落ちてしまつた。竹熊一派は周章狼狽死力を

つくしてヨルダン河を打ちわたり遠く北方に逃れた。この時あまたの從神は河中に陥り、その大部分は溺死してしまつたのである。  
(大正一〇・一〇・二二 舊九・二二 谷口正治録)

### 第三四章 シナイ山の戦闘〔三四〕

エデンの野に敗れたる竹熊一派は、わづかに身をもつて難を免かれ、堂山の峽に身をひそめ、遠近の山の端より、ふたたび魔軍をかり集めて、シナイ山を攻撃せむことを企て、魔軍の猛將なる大虎彦を辭を低うし、禮を厚うして招待し、シナイ山攻撃の援軍を依頼した。もとより同じ心の大虎彦は、竹熊の願望を一も二もなく承諾し、數萬の蒙古軍を堂山の麓に召集し、旗鼓堂々として、士氣冲天の慨があつた。

このとき龍宮城に歸還して神務を管理したまひたる大八洲彦命は、シナイ山の

攻撃軍を掃蕩し、嚴の御魂を救ひ奉らむと、少數の神軍を引率して出陣せむとしまうた。金勝要神は、命の袖を控へて、出陣を中止したまふべく懇請せられた。そのゆゑは龍宮城内に潜める竹熊の一派木常姫は深く城内に醜女、探女を放ち、大八洲彦命の不在を機會に龍宮城を占領せむと、着々と計畫をすすめたる謀計を、金勝要神はよく看破しみたまうたからである。

また木常姫の應援として犬子姫は、檜欒山の麓にひそみ、あまたの魔軍を驅つて内外兩面より龍宮城を占領せむとし、すでに事變の起らむとする間際であつた。しかるに城内の味方は、ほとんどシナイ山に登りて、龍宮城は守り手薄になつてゐたからである。大八洲彦命は金勝要神の進言を容れて、出陣を思ひとどまり龍宮城を固守せむことを決意した。

しかし命の心にかかるは、シナイ山にまします嚴の御魂の御上であつた。吾いま出陣せば龍宮城は敵手に落ちむ。出陣せざればシナイ山の危急を救ふことができぬ。進退これ谷まりし命の心中、實に想察するにあまりありといふべしである。ここに竹熊は大虎彦の應援を得、數萬の蒙古軍を引率して、シナイ山に八方よ

り攻めよせた。竹熊は木純姫、足長彦に命じ、遠近の諸山より集まりきたれる惡龍を指揮して雲を起し、大雨を降らせ、一直線にシナイ山の中腹に攻めよせた。しかるに一方山麓には、大虎彦の蒙古軍が十重二十重に取圍み、もつとも堅固に警戒の網をはつて構えてゐる。ここに山上にまします嚴の御魂はこの光景を瞰下し、事態容易ならずと見たまひ、高杉別を主將とし鶴若、龜若、鷹取、雁姫、稻照彦を部將として、防戦につとめたまうた。されど衆寡敵しがたく、シナイ山の陥落は旦夕に迫り、嚴の御魂の御身邊の危険は刻々に迫つてきた。このとき天上よりは自在天大國彦の部下の魔軍無數に現はれ、火彈を投下し、嚴の御魂の神軍を窮地に陥れた。嚴の御魂は鷹取、雁姫を急使として、龍宮城にまします金勝要神に味方の窮状を報告し、應援軍を差向けらるるやう申し渡したまうた。

大八洲彦命は進退ここに谷まつて、千考萬慮の末、眞澄の珠を、鷹取、雁姫に托したまうた。鷹取、雁姫は天空高く、敵軍の上を飛揚してシナイ山頂に達し、眞澄の珠を嚴の御魂の大神に奉つた。嚴の御魂は喜び勇んで珠を手に取りたまひ、攻めくる敵軍にむかつて珠を口にあて、力をこめて息吹き神業をおこなひたま

うた。東にむかつて吹きたまへば、東の魔軍はたちまち潰れ、西にむかつて吹きたまへば、西の魔軍はことごとく散亂し、かくのごとくに於て、八方の魔軍は眞澄の珠の神力により、或ひは雲にのつて逃れ、或ひは霞に包まれてかくれ、四方八方へ散亂し遁走し全く影をかくしてしまつた。

今まで暗黒なりし天地にはかに快明となり、シナイ山の神軍はたちまち蘇生の思ひをなし、隊伍をととのへ堂々として無事龍宮城に凱旋した。

(大正一〇・一〇・二二 舊九・二二 谷口正治録)

### 第三十五章 一輪の祕密 (三五)

嚴の御魂の大神は、シナイ山の戦闘に魔軍を潰走せしめ、ひとまづ龍宮城へ凱旋されたのは前述のとほりである。

さて大八洲彦命は天山、崑崙山、天保山の敵を潰滅し、天教山に現はれ、三個

の神寶を得て龍宮城に歸還し、つづいてエデンの園に集まれる竹熊の魔軍を破り、一時は神界も平和に治まった。されど竹熊の魔軍は勢やむを得ずして影を潜めた。のみなれば、何どき謀計をもつて再擧を試みるやも計りがたき状況であつた。まづ第一に魔軍の恐るるものは三個の神寶である。ゆゑに魔軍は百方畫策をめぐらし、或ひは探女を放ち、醜女を使ひ、この珠を吾が手に奪はむとの計畫は一時も弛めなかつた。

茲に艮の金神國常立尊は、山脈十字形をなせる地球の中心蓮華臺上に登られ、四方の國型を見そなはし、天に向つて神言を奏上し、頭上の冠を握り、これに神氣をこめて海上に投げ遣りたまうた。その冠は海中に落ちて一孤島を形成した。これを冠島といふ。しかして冠の各處より稻を生じ、米もゆたかに穰るやうになつた。ゆゑにこの島を稻原の冠といひ、また茨の冠ともいふ。つぎに大地に向つて神言を奏上したまひ、その穿せる沓を握り海中に抛げうちたまうた。沓は化して一孤島を形成した。ゆゑにこれを沓島といふ。冠島は一名龍宮島ともいひ、沓島は一名鬼門島ともいふ。

ここに國常立尊は嚴の御魂、瑞の御魂および金勝要神に言依さしたまひて、この兩島に三個の神寶を祕め置かせたまうた。

潮満の珠はまた嚴の御魂といふ。「いづ」とは泉のいづの意であつて、泉のごとく清鮮なる神水の無限に湧出する寶玉である。これをまたヨハネの御魂といふ。つぎに潮干の珠はこれを瑞の御魂といひ、またキリストの御魂といふ。「みづ」の御魂は「みいづ」の御魂の意である。「みいづ」の御魂は無限に火の活動を萬有に發射し、世界を清むるの活用である。要するに水の動くは火の御魂があるゆゑであり、また火の燃ゆるは水の精魂があるからである。しかして火は天にして水は地である。故に天は尊く地は卑し。ヨハネが水をもつて洗禮を施すといふは、體をさして言へる詞にして、尊き火の活動を隠されてをるのである。またキリストが靈（靈は火なり）をもつて洗禮を施すといふは、キリストの體をいへるものにして、その精魂たる水をいひしに非ず。

ここに稚姫君命、大八洲彦命、金勝要大神は、三個の神寶を各自に携帶して、目無堅間の船に乗り、小島別、杉山別、富彦、武熊別、鷹取の神司を引率して、



まづこの龍宮ケ島に渡りたまうた。しかし龍宮ケ島には嚴の御魂なる潮満の珠を、大宮柱太敷立て納めたまひ、また瑞の御魂なる潮干の珠とともに、この宮殿に納めたまうた。この潮満の珠の又の名を豊玉姫神といひ、潮干の珠の又の名を玉依姫神といふ。かくて潮満の珠は紅色を帯び、潮干の珠は純白色である。

國常立尊は冠島の國魂の神に命じて、この神寶を永遠に守護せしめたまうた。

この島の國魂の御名を海原彦神といひ、又の御名を綿津見神といふ。つぎに沓島に渡りたまひて眞澄の珠を永遠に納めたまひ、國の御柱神をして之を守護せしめられた。國の御柱神は鬼門ケ島の國魂の又の御名である。

いづれも世界の終末に際し、世界改造のため大神の御使用になる珍の御寶である。しかしして之を使用さるる御神業がすなはち一輪の祕密である。

この兩島はあまたの善神皆龍と變じ、鰐と化して四邊を守り、他神の近づくを許されないのである。

(大正一〇・一〇・二三 舊九・二三 外山豊二録)

第三十六章 一輪の仕組〔三六〕

國常立尊は邪神のために、三個の神寶を奪取せられむことを遠く慮りたまひ、周到なる注意のもとにこれを龍宮島および鬼門島に秘したまうた。そして尚も注意を加へられ大八洲彦命、金勝要神、海原彦神、國の御柱神、豊玉姫神、玉依姫神たちにも極秘にして、その三個の珠の體のみを兩島に納めておき、肝腎の珠の精靈をシナイ山の山頂へ、何神にも知らしめずして秘し置かれた。これは大神の深甚なる水も洩らさぬ御經綸であつて、一厘の仕組とあるのはこのことを指したまへる神示である。

武熊別は元よりの邪神ではなかつたが、三つの神寶の秘し場所を知悉してより、にはかに心機一轉して、これを奪取し、天地を吾ものにせむとの野望を抱くやうになつた。そこでこの玉を得むとして、日ごろ計畫しつつありし竹熊と語らひ、竹熊の協力によつて、一舉に龍宮島および大鬼門島の寶玉を奪略せむことを申し込んだ。竹熊はこれを聞きて大いに喜び、ただちに贊成の意を表し、時を移さず

杉若、桃作、田依彦、猿彦、足彦、寅熊、坂熊らの魔軍の部將に、數萬の妖魅軍を加へ、數多の戦艦を造りて兩島を占領せむとした。

これまで數多の戦ひに通力を失ひたる竹熊一派の部將らは、武熊別を先頭に立て、種々なる武器を船に満載し、夜陰に乗じて出發した。一方龍宮島の海原彦命も、鬼門島の國の御柱神も、かかる魔軍に計畫あらむとは露だも知らず、八尋殿に枕を高く眠らせたまふ時しも、海上にどつとおこる鬨の聲、群鳥の噪ぐ羽音に夢を破られ、龍燈を點じ手に高く振翳して海上はるかに見渡したまへば、魔軍の戦艦は幾百千とも限りなく軍容を整へ、舳艫相啣み攻めよせきたるその猛勢は、到底筆舌のよく盡すところではなかつた。

ここに海原彦命は諸龍神に令を發し、防禦軍、攻撃軍を組織し、對抗戦に着手したまうた。敵軍は破竹の勢をもつて進みきたり、既に龍宮島近く押寄せたるに、味方の龍神は旗色悪く、今や敵軍は一擧に島へ上陸せむず勢になつてきた。このとき海原彦命は百計盡きて、かの大神より預かりし潮満、潮干の珠を取りだし水火を起して、敵を殲滅せしめむと爲し給ひ、まづかの潮満の珠を手にして神息を

こめ、力かぎり伊吹放ちたまへども、如何になりしか、この珠の神力は少しも顯はれなかつた。それは肝腎の精靈が抜かされてあつたからである。次には潮干の珠を取りだし、火をもつて敵艦を焼き盡くさむと、神力をこめ此の珠を伊吹したまへども、これまた精靈の引抜かれありしたため、何らの效をも奏さなかつた。鬼門ヶ島にまします國の御柱神は、この戦況を見て味方の窮地に陥れることを憂慮し、ただちに神書を認めて信天翁の足に括りつけ、龍宮城にゐます大八洲彦命に救援を請はれた。

このとき地の高天原も、龍宮城も黒雲に包まれ咫尺を辨せず、荒振神どもの矢叫びは天地も震撼せむばかりであつた。

ここにおいて金勝要大神は祕藏の玉手箱を開きて金幣を取りだし、天に向つて左右と打ちふり給へば、一天たちまち拭ふがごとく晴れわたり、日光燦爛として輝きわたつた。金勝要神は更に金幣の一片を取缺きたまひて信天翁の背に堅く結びつけ、なほ返書を足に縛りて、天空に向つて放ちやられた。信天翁は見るみる中天に舞ひ上がり、東北の空高く飛び去つた。信天翁はたちまち金色の鷄と化

し、龍宮島、鬼門島の空高く縦横無盡に飛びまはつた。今や龍宮島に攻め寄せ上陸せむとしつつありし敵軍の上には、火弾の雨しきりに降り注ぎ、かつ東北の天よりは一片の黒雲現はれ、見るみる満天墨を流せしごとく、雲間よりは幾百千とも限りなき高津神現はれきたりて旋風をおこし、山なす波浪を立たしめ敵艦を中天に捲きあげ、あるひは浪と浪との千仞の谷間に突き落し、敵船を翻弄すること風、木の葉の散るごとくであつた。このとき竹熊、杉若、桃作、田依彦の一部隊は、海底に沈没した。

國常立尊はこの戦況を目撃遊ばされ、敵ながらも不愆の至りと、大慈大悲の神心を發揮し、シナイ山にのぼりて神言を奏上したまへば、一天にはかに晴渡りて金色の雲あらはれ、風凧ぎ、浪静まり、一旦沈没せる敵の戦艦も海底より浮揚り、海面はあたかも疊を敷きつめたるごとく穩かになつてきた。

このとき兩島の神々も、諸善龍神も竹熊の敵軍も、一齊に感謝の聲をはなち、國常立大神の至仁至愛の惠徳に心服せずにはをられなかつた。廣く神人を愛し、敵を敵とせず、宇宙一切の衆生にたいし至仁至愛の大御心を顯彰したまふこそ、

實に尊き有難ききはみである。

(大正一〇・一〇・二三 舊九・二三 櫻井重雄録)

第五篇 御玉の爭奪

第三十七章 顯國の御玉〔三七〕

國常立尊の嚴命を奉じ、ここに天使稚姫君命、同大八洲彦命、金勝要神の三柱は、高杉別、森鷹彦、田依彦、玉彦、芳彦、神彦、鶴若、龜若、倉高、杉生彦、時彦、猿彦以下の神司を引率し、流れも清き天安河の源に參上りたまうた。この山の水上にはシオンの靈山が雲表高く聳えてゐる。シオンの山の意義は、「淨

行日域ぎやうにちのみきといつて天男女てんなんてんによの常つねに來りて、音樂おんがくを奏し舞曲ぶきよくを演じて、遊樂いうらくする」といふことである。この山の頂やまいただきには廣ひろき高原かうげんがあつて、珍めづひしき五色ごしきの花はなが馥郁ふくいくたる香氣かうきをはなつて、春夏秋冬しゆんかしうとうの區別くべつなく咲さき満みちてゐる。また種々しゆじゆの美味びみなる果實くわじつは木々きぎの梢こつゑに枝えだもたわわに實みのつてゐる安全境あんぜんきやうである。この高原かうげんの中央ちゆうあうに、高さたか五十間幅つけんはばごじつけんの方形ほうけいの極きはめて堅固けんこなる岩石がんせきが据すゑられてゐる。これは國常立尊くにとこたちのみことが天あめの御柱みはしらの黄金こがねの柱はしらとなつて星辰せいしんを生うみ出し給たまひしとき、最初さいしよに現あらはれたる星巖せいがんである。神業かむわざ祈念きねんのために最初さいしよの一個いっこを地上ちじやうにとどめ、これを地上ちじやうの國魂くにたまの守護しゆこと定さだめて今いままで祕ひめおかれたのである。

天地てんち剖判ぼうはんの初はじめより、一週間いっしうかんごとに十二柱じふにはしらの天人てんにん、この山上さんじやうに現あらはれて遊樂いうらくする時とき、この星巖せいがんを中なかに置おき、天男てんなんは左ひだりより、天女てんによは右みぎより廻めぐりて音樂おんがくを奏そうし、舞ぶき曲よくを演えんずる所ところである。そのとき天男てんなん、天女てんによの薄衣うすぎぬのごとき天あまの羽衣はころもの袖そでにすり磨みがかれて、その星巖せいがんは自然しぜんに容積ようせきを減げんじ、今いまは中心ちゆうしんの玉たまのみになつてゐたのである。この玉たまは直徑ちよくけい三尺さんじやくの圓球えんきうである。これを見みても天地てんち剖判ぼうはんの初はじめより幾萬億年いくまんおくねんを經けい過くわしたるかかを想像さうざうされる。

稚姫君命以下わかひめぎみのみことの神司かみがみは、天あまの安河原やすかはらの溪流けいりゅうに御禊みそぎの神業しんげふを修しうしたまひ、ただちに雲くもを起おこし、これに乘のり、シオン山ざんの頂いただきに登のぼりたまひ、山上さんじやうの高原かうげんを殘のこる隈くまなく踏查たふさし、諸天神しよてんじんの御魂みたまの各自かくじの御座所ござしよを定さだめ、地鎮祭ぢちんさいをおこなひ、神言かみことを奏上そうじやうし、永遠えいゑんに神かみの靈地れいちと定さだめたまうた。

この高原かうげんの中央ちゆうあうには、前記ぜんき十二柱じふにはしらの天男女てんなんてんによが一個いっこの星巖せいがんを中心ちゆうしんに、左右さいうより廻り遊あそんでゐた。ここに稚姫君命以下わかひめぎみのみことの神司かみがみは、その星巖せいがんに近ちかづきたまへば、天てん男なんてんによ天女てんによははるか後方こうほうに退しりぞき、地上ちじやうに拜跪はいきして太古たいこより今日こんにちまで星巖せいがんを磨みがき、かつ守護しゆごせしことの詳細しやうさいを命みことに進言しんげんした。

稚姫君命わかひめぎみのみことは多年たねんの勞苦らうくを謝しやし、かつ神勅しんちよくに違たがはず、數萬年間すうまんねんかんこれを守護しゆごせしその功績こうせきを激賞げきしやうし、種々しゆじゆの珍めづらしき寶たからを十二じふにの天人てんにんにそれぞれ與あたへたまうた。

一見いつけんするところ此この圓まるき星巖せいがんは地球ちきうに酷似こくじしてゐる。大地だいちの神靈しんれいたる金勝きんかつ要神やのかみは、いと輕々かるがるしくその圓巖ゑんがんを手てにして三回さんくわいばかり頭上づじやう高く捧ささげ、天てんに向むかつて感謝かんしやし、ついでこれを胸先むなさきに下くだし、息吹いぶきの狭霧さざりを吹ふきかけたまへば、圓巖ゑんがんはますます圓まるく形かたちを變化へんくわし、その上得うへえもいはれぬ光澤くわうたくを放射ほうしやするにいたつた。このとき金勝きんかつ



要神はいかが思召けむ、この圓巖を山頂より安河原の溪流めがけて投げ捨てたま  
うた。急轉直下、六合も割るばかりの音響を發して谷間に轉落した。稚姫君命  
以下の諸神司は諸々の從臣と共に、星巖の跡を尋ねてシオン山を下り、星巖の行  
方いかにと谷間の彼方あなたを捜させたまうた。はるか上流に當つて、以前の十  
二の天人霧立ちのぼる谷間に面白く舞ひ狂うてゐる姿が目につき、玉の行方は確  
にそこと見定め、溪流を遡りたまうた。幾百丈とも知れぬ大瀑布の下に、以前の  
星巖落ちこみ瀧水に打たれ、或ひは水上に浮かび、あるひは水中に沈み、風船玉  
が水の力によつて動くがごとく、あるひは右に或ひは左に旋轉して圓さはますます  
す圓く、光はますます強く金剛不壞の寶珠と化してゐる。この時金勝要神はたち  
まち金色の龍體と化し、水中に飛びいり兩手にその玉を捧げて、稚姫君命の御前  
に捧呈された。洗ひ晒された此の玉は、表側は紫色にして、中心には赤、白、青  
の三つの寶玉が深く包まれてゐるのを外部から透見することができ。これを顯  
國の御玉と稱え奉る。

(大正一〇・一〇・二三 舊九・二三 加藤明子録)

第三十八章 黄金水の精（三八）

ここに稚姫君命、金勝要神、大八洲彦命は歡喜のあまり、シオン山の大峽小峽の木を切り新しき御船をつくり、また珠をおさむる白木の御輿をしつらへ、恭しく顯國の御玉を奉按し、これを御輿もろとも御船の正中に安置し、安河を下りて龍宮城に歸還し、三重の金殿に深く祕藏したまうた。この御玉はある尊貴なる神の御精靈體である。

話はもとへかへつて、高杉別、森鷹彦は大神の命を奉じ、黄金造の器にシオンの瀧の清泉を盛り、御輿の前後に扈從し目出度く歸城したまひ、この清泉は命の指揮の下に龍宮城の眞奈井に注ぎ入れられた。それよりこの水を黄金水といふ。顯國の御玉の龍宮城に御安着とともに、三方より不思議にも黒煙天に沖して濛々と立ち騰り、龍宮城は今將に焼け落ちむとする勢である。この時たちまち彼の眞奈井より黄金水は龍の天に昇るがごとく中天に噴きあがり、大雨となつて降り下り、立ち上る猛火を鎮定した。龍宮城の後の光景は不審にも何の變異もなく、依

然として元形をとどめてみた。

金剛不壞の顯國の御玉は、時々刻々に光度を増し、一時に數百の太陽の現はれしごとく、神人皆その光徳の眩ゆさに眼を開く能はず、萬一眼を開くときは失明するにいたるくらみである。

ここに國常立尊は、神威の赫灼たるに驚喜したまひしが、さりとしてこのまま龍宮城にあからさまに奉祭することを躊躇したまひ、天運の循環してきたるまで、至堅至牢なる三重の金殿に八重疊を布き、その上に御輿もるとも安置し、十二重の戸帳をもつてこれを掩ひ深く祕齋したまうた。

それより三重の金殿にはかに光を増し、その光は上は天を照し、下は葦原の瑞穂國隈なく照り輝くにいたつた。金色の鷄は常に金殿の上空に翱翔し、天地の諸善神、時に集まりきたつて、微妙の音楽を奏し遊び戯れたまふ、實に五六七神世の實現、天の岩戸開きの光景もかくやと思はるばかりである。

天の眞奈井の清泉にはかに金色と變じ、その水の精は、十二個の美しき玉となつて中空に舞ひ上り、種々の色と變じ、ふたたび地上に降下した。このとき眼

ざとくも田依彦、玉彦、芳彦、神彦、鶴若、龜彦、高倉、杉生彦、高杉別、森高彦、猿彦、時彦の十二の神司は争うてこれを拾ひ、各自に珍藏して天運循環の好期を待たむとした。

この十二の玉はおのおの特徴を備へ、神變不可思議の神力を具有せるものである。

ここに竹熊の一派は、危急を救はれし大神の厚恩を無視し、生來の野心をますます増長し、金殿に安置せる顯國の御玉を洗しくもらせ、無用の長物たらしめむとして四方の曲津神と語らひ、なほ懲りずまに計畫を廻らしてゐた。この目的を達するには、その第一着手として黄金水の精より成り出でたる十二個の玉を手に入れねばならぬ。この玉をことごとく手に握れば、彼らの目的は達するものと深く信じたからである。ここにおいて竹熊は、將を射むとするものは先づその馬を射よとの戦法を應用せむとし、あらゆる方策を講じて龍宮城の從臣なる十二柱の神司を説き落とし、あるひは討ち亡ぼして、その玉をいよいよ奪ひ取らむとした。この玉は十二個のうち、一個不足しても何の用をもなさないのである。

第三九章 白玉の行衛（三九）

黄金水の精より出でたる十二の寶玉は、個々別々に使用しては何の效用も現はれないものである。しかしこれを拾ひ得たる十二柱の神司も、竹熊の一派もその眞相を知らず、一個を得れば一個だけの活用あり、二個を得れば二個だけの神力の現はるるものといづれの者も確信してゐた。

そこで竹熊は、第一番に田依彦の持つてをる白色の玉を、手に入れむことを計畫したが、どうしても田依彦を説服して、その自分に譲らしむることの容易ならざるをさととり、ここに竹熊は一計を案出し、田依彦のもつとも信賴措かざる魔子彦を、物質欲をもつて甘く自分の參謀にとりいれた。魔子彦は容姿端麗なる美男である。さうして田依彦の姉にして豆寅の妻なる草香姫といふのがあつた。これ

もまた非常な麗しき容貌を備へていた。しかるに草香姫はいつとなく、魔子彦に思ひをかけてゐた。

このとき竹熊は魔子彦に種々の珍しき寶を與へ、また非常に麗しき衣服を與へた。ここに魔子彦はその美衣を身に着し、薰香つよき膏を肉體一面に塗りつけ、草香姫が吾に戀愛の情を深からしめむとした。この行動は竹熊の内命に従つたものである。

ここに草香姫はますます戀慕の情が募つてきた。されども、あからさまに心の思ひを魔子彦に打ちあけることを愧ぢて、日夜悶々の情に堪へかねてゐた。つひに草香姫は氣鬱病になり、病床に臥して呻吟し、その身體は日一日と瘦衰へ、生命は旦夕に迫つてきた。弟田依彦は大いに驚き、かつ悲しみ、いかにもして草香姫の病を癒やし救はむと、百方苦慮しつつかつた。

時に田依彦は自分の信ずる魔子彦が、内々竹熊の參謀役になつてをることは夢にも知らず、魔子彦をよんで、草香姫の病氣をいかにせば全快せむやと、顔の色をかへ吐息をつきながら相談をしかけた。

魔子彦は時節の到来と内心ひそかに打ち喜びつつ、田依彦に向つて言葉をかまへていふ。

「われ一昨夜の夢に、高天原にまします國常立尊、枕頭に現はれたまひて、言葉厳かに宣り給ふやうは、……草香姫はもはや生命旦夕に迫る。これを救ふの道は、ただ單に田依彦のもてる白色の玉を草香姫に抱かしめ、日十日、夜十夜これを枕頭より離れざらしめなば、病はたちまち癒ゆべし……との大神のお告であつた。しかし貴下はわが夢に見しごととき美しき白玉を果して所持さるるや、夢のことなれば信を措くにたらず、癡人夢を語るものと失笑したまふ勿れ」と空とぼけて、田依彦の心を探つてみた。

田依彦は平素信任する魔子彦の言を、少しも疑ふの餘地なく、ただちに自分が件の玉を拾つて珍藏してをることを、あからさまに答へ、その玉の神力によつて姉の命が救はるるものならば、これに越したる喜びなしと雀躍し、肩を揺りながら直ちに草香姫の許にいたり、魔子彦の神夢の次第を語り、

「この玉を十日十夜抱きて、寝ねよ」

と告げ、玉を草香姫に渡し、會心の笑を漏らして歸つてきた。

ここに草香姫は田依彦の厚意を喜び、教へられし如くにして、五日を經過た。

しかるにその病氣に對しては少しの效力もなく、身體は日夜衰へゆくのみであつた。時分はよしと魔子彦は、美麗やかに衣服を着かざり、身に薰香を浴びつつ四邊を芳香に化してしまつた。その香ばしき匂ひは、病の床にあつて苦悶しつつある草香姫の鼻に、もつとも強く感じた。

草香姫はこの匂ひを嗅ぐとともに、すこしく元氣が恢復したやうな心持になつた。しばらくあつて魔子彦は病氣見舞と稱して、いと靜かに這入つてきた。さうして田依彦に偽り傳へた神夢を、さも眞實しやかに草香姫に物語つた。草香姫は眞偽を判別するの暇なく、一方は弟の言葉といひ、一方は日ごろ戀慕する魔子彦の親切なる言葉なれば、あたかも大慈大悲の大神の慈言の如く驚喜した。さうして玉の神力の數日を経ても、顯はれないにかかはらず、

『貴下の麗しき御姿を拜してより、にはかに元氣恢復して、精神涼しく爽快さを

感じたり』



と顔を赧めつつ、小聲で咳くやうに心のたけをのべ傳へた。

してやつたり、願望成就の時こそ今と、魔子彦は、後をむいて舌を出し、素知らぬ顔に言葉をもうけていふやう、

「すべて神の授けたまふ神玉は、熱臭き病人の肌を抱くは、かへつて神威を汚しするものなり。この玉を抱いて、病を癒やさむとせば、まず汝が身體に薫香の強き膏を塗布し、芳香を四邊に放ち、室の空氣を一變し、天地清淨ののちに非ざれば、效なかるべし」

と告げた。草香姫は、

「薫香の膏は、いづれにありや」

と反問した。魔子彦はすかさず腮を「しやくり」ながら、

「この膏は容易に得らるべきものにあらず、シオン山の南方にある小さき峰の頂に、時あつて湧出するものなり」

と、その容易に得べからざることの暗示を與へた。

ここに草香姫は口ごもりつつ、

「この玉を貴下の肌はだに抱いだきたまひて玉たまを清きよめ、玉たまの神力しんりきを發揮はつきせしめ給たまはずや」と嘆願たんぐわんした。魔子彦まごひこはわざと躊躇ちうちよの色いろを見せながら、内心ないしん欣喜きんき雀躍じゃくやくしつつ、なまなまに玉たまを抱いだくことを承諾しやうたくした。不思議ふしぎにも草香くさか姫ひめの病やまひは、白色はくしよくの玉たまが魔子彦まごひこの懷ふところに抱いだかれるとともに、ほとんど癒いえたやうな氣分きぶんになつた。

魔子彦まごひこは庭園ていえんの景色けしきを賞ほめつつ、何なにくはぬ顔かほにて徜徉せうやうしつつありしが、庭内ていないに聳そびえたつ一本いっほんの老松おいまつの枝えだに手てをかけ、樹上じゆじやうに昇のぼるや否いなや、西方せいほうより翱かけきたる天あまの鳥船とりふねに身みを托たくし、雲上うんじやう高く姿すがたを隠かくした。しかるにこの玉たまを乗のせたる鳥船とりふねは、中空ちゆうくうにおいて大虎彦おほとらひこの乗のれる鳥船とりふねに衝突しやうつうし、玉たまは飛とんで大虎彦おほとらひこの鳥船とりふねに入り、魔子彦まごひこは中空ちゆうくうよりシナイ山ざんの溪谷けいこくに墜落つゐらくして、靈體れいたいともに粉碎滅亡ふんさいめつぼうしてしまつた。大虎彦おほとらひこの手てに入いつた玉たまは、やがて竹熊たけくまの手てに渡わたされた。竹熊たけくまは謀計ぼうけいの後のちに破やぶれむことを恐おそれて、中途ちゆうとに大虎彦おほとらひこをして魔子彦まごひこを亡ほろぼさしめたのである。惡靈あくがみの仕しぐ組みは實じつにどこまでも注意ちゆうい深い、いやらしきものである。

(大正一〇・一〇・二四 舊九・二四 谷口正治録)

第四〇章 黒玉の行衛〔四〇〕

竹熊は謀計をもつて、田依彦の持てる玉を手に入れたるより大いに勢を得、今度はすすんで玉彦の持てる黒色の玉を、奪取せむことを企てた。玉彦は名譽欲が強く、つねに衆人の下位に立ち不平満々で日を送つてゐたのである。

しかるに茲に黒玉を得て心中勇氣を増し、意氣揚々として龍宮城内を闊歩し、他の者たちに對して、

「われは位の低き者なれども、大神より特に選ばれて、黄金水の黒玉を得たり。かならずや時きたらば、われは立派なる上の位地にのぼり、龍宮城の權力を掌握するにいたらむ」

と心ひそかに期待してゐた。

竹熊は醜女、探女を放ちて、玉彦の心中を探り、玉彦の持てる玉を奪らむとすれば、まづ名譽欲をもつてこれにのぞまねばならぬことを知つた。そこで竹熊は大八洲彦命の部下の長彦を誑らかし、長彦の手より玉彦の妻坂姫を説き、坂姫よ

り玉彦の黒玉を得むとした。長彦は十二の玉のうち一個の玉も吾が手に入らざりしを心足りなく思ひみたる矢さきなれば、玉彦に對しても、やや嫉妬の念の萌してゐた際である。そこへ自分の下位にある玉彦は、玉を得て高慢心を生じ、長彦の命を時どき拒むやうになつた。長彦はいかにもして玉彦の髙き鼻をくじかむと、百方焦慮してゐたのである。

そこへ竹熊の間者なる鳥熊は、大八洲彦命の命と佯はり、かつ曰く、  
「玉彦のこのごろの行動もつとも不穩なり、彼がごとき者に玉を抱かしむるは、はなはだ危険なり。もしこの玉にして長彦の手に入らば、玉の神力はいやが上にも發揮せむ。何とぞ長彦はわれの内命を諾なひ、かの玉を奪取せよ……との嚴命なり」

と、私かに長彦の家にしたつて教唆した。

ここに長彦は一計をめぐらし、玉彦の妻坂姫を言葉たくみに説きつけ、坂姫の手よりこの玉を奪はしめむとした。坂姫は容色端麗なる龍宮城の美人であつた。玉彦は、平素より坂姫の美貌に戀々たる有様で、坂姫の一言一動は玉彦の生命の

鍵かぎであつた。そこを窺うかがひ知つた長彦ながひこは、いかにもして坂姫さかひめの首くびを縦たてに振ふらしめむとした。坂姫さかひめはいたつて舞曲ぶきよくが好きであつた。

そこで長彦ながひこと鳥熊とりくまは、シオン山ざんにおいて見たる天男てんなん、天女てんによの舞曲ぶきよくを思おもひだし、ひそかに舞曲ぶきよくの稽古けいこにかかつた。百日百夜の習練しうれんの結果けつかわは實じつに妙めうを得え、神しんに達たつした。もはやこれならば坂姫さかひめの心こころを動うごかすに足たらむと自信じしんし、坂姫さかひめの住すまへる室へやの庭先にはさきにいたつて、さかんに舞まひはじめた。坂姫さかひめは何心なにこころなく押戸おしどを開あけて庭先にはさきを眺ながめたが、ふたりの妙めうをえたる舞踏ぶたふに膽きもを奪うばはれ、しばし恍惚くわうこつとしてこれに見惚みとれてゐた。つひには自分じぶんも立つてその場ばに顯あらはれ三巴みつどもゑとなつて、たがひに手てを取り踊をどりまはつた。かくしていつの間まにか坂姫さかひめは、長彦ながひこ、鳥熊とりくまらと無二むにの親友しんいうとなつてしまつた。その翌日よくじつもまたその翌日よくじつも、三人さんにんはその庭前ていぜんに出いでて舞曲ぶきよくに餘念よねんなく、歡喜くわんきの聲こゑは四邊しへんにひびき、園内えんないにはかに陽氣やうきとなつてきた。

このとき別殿べつでんに控ひかへたる玉彦たまひこは、最愛さいあいの妻つまの舞まひ狂くるふ優美いうびなる姿すがたに見惚みとれ、玉たまを奥殿おくでんに祕藏ひざうしおき、三人さんにんの前まへに立現たちあらはれた。鳥熊とりくま、長彦ながひこは巧言令色こうげんれいしよくいたらざるなく、玉彦たまひこを主座しゆざに据すゑ、尊敬そんけいのあらむ限かぎりをつくし、玉彦たまひこの歡心くわんしんを求もとめた。こ

ここに玉彦は、自分の上位にある長彦に尊敬されるのは、全く坂姫の舞曲の妙技の然らしむるところと心中に深く坂姫に感謝した。坂姫は玉彦にむかひ、

「貴下も共に舞ひたまへ」

と無理にその手を取つて舞踏せしめむとした。玉彦には坂姫の一言一句は、常に微妙なる音楽と聞ゆるのである。少しでも坂姫の心に逆らへば、坂姫の顔色はたちまち憂愁に沈む。いかにもして坂姫に笑顔を作らしめむと心を悩ましてゐた。

ここに鳥熊、長彦は、「獅子王、玉を争ふ」の舞曲を演ぜむことを申し込んだ。坂姫は第一に賛成の意を表し、玉彦に黒色の玉を持ちいだし、舞曲の用に供せむことを懇請した。玉彦はいかに最愛の妻なればとて、

「こればかりは許せよ。わが位地昇進のための重寶なれば」

と拒んだ。坂姫はたちまち顔色曇り、地上に倒れ伏し聲をあげて夫玉彦の無情に泣いた。玉彦はやむを得ず、坂姫の請を容れて、不安の内にも此の玉を奥殿より取り出した。坂姫は喜色満面に溢れ、ここに四柱は、玉を争ふ獅子王の舞曲を奏しはじめた。四柱はただちに牡丹の園へ出て、各自獅子に變装した。まづ玉を坂

姫の獅子に持たせた。鳥熊、長彦の變化獅子は、坂姫を左右より取りまき、鳥熊はその玉を取るより早く、口に含み庭先の湯津桂の樹上高くかけ登った。つづいて長彦もかけ登った。このとき鳥熊は足もて、長彦を地上に蹴落した。長彦は、庭先の置石に頭を打ち砕きことぎれた。

玉彦、坂姫は、驚き周章て狼狽ある其の間に、西方の天より空中をとどろかして、大虎彦の邪神は天の鳥船に乗りきたり、鳥熊を乗せて遠く西天に姿を没した。鳥熊の持てる黒玉は大虎彦の手に入るとともに、鳥熊の身體は鳥船より蹴落され、シナイ山の深き谷間に落ちて、その肉體はたちまち粉碎の厄に遇うた。

ア、何處までも巧妙なる邪神の奸策よ。いかに善良なる神人といへども、心中に一片の執着ある時はかならず邪鬼妖神のために犯さるるものである。慎むべきは一切の物に執着の念を断つべきことである。

(大正一〇・一〇・二四 舊九・二四 加藤明子録)

第四章 八尋殿の酒宴の一（四一）

竹熊は奸計を廻らし、やうやく二個の玉を手に入れたが、後にまだ十個の玉が残つてゐるのを手に入れねばならぬ。しかし是はなかなか容易の業ではないと悟つた竹熊一派は、一擧に十個の玉を得むことを企畫した。そこで先づ第一に龍宮城の宰相神なる大八洲彦命を誑かる必要に迫られた。竹熊は大虎彦と共に種々の珍しき寶を持ち、大八洲彦命の御前に出で、以前の惡逆犯行の重き罪を、空涙とともに謝罪した。

その時の有様は、土間に兩名四つ這となり、地に頭を下げ、もつて絶對的歸順を装うたのである。大八洲彦命は元來仁慈無限の神にして、かつ戰鬥を好まず、惡靈を善道にみちびき神界を泰平ならしめむと、日夜焦慮してをられた。そこへ兩名の歸順の態度を見て心中深く憐れみ、邪惡無道の敵ながらも氣の毒なりと、つひにその請ひを許し、將來は相提携して神業に奉仕せむことを教示せられた。兩名は感謝の意を表はし、恭しく禮を陳べこの場を立去つた。



しかして竹熊、大虎彦は門外に出づるや否や、たがひに面を見合せて舌を出し、苦笑した。このとき大八洲彦命は、田依彦、玉彦が竹熊の奸計によりて、玉を奪取されたことを感知してゐなかつた。田依彦、玉彦は己が失策を責められむことを恐れて、たれにも口外せず、ただ獨り煩悶してゐたからである。

ここに竹熊、大虎彦は、新しき八尋殿を建てて諸々の珍器を飾り、金銀珠玉をちりばめたる金殿玉樓を造り、平和歸順の目出度記念として大祝宴を張らむとし、第一に大八洲彦命を招待した。大八洲彦命は、玉照彦、大足彦を左右にしたがへ、神彦、芳彦、高杉別、森鷹彦、鶴若、龜若、倉高、時彦、杉生彦、猿彦らと共にこの祝宴に臨まれた。また竹熊の方では、大虎彦をはじめ、玉若、繁若、坂熊、寅熊、桃作、木常姫、中裂彦らが宴に侍した。

大八洲彦命は竹熊らの歡待に満足し、大杯を擧げて祝された。しかして一同にむかひ、

斯くのごとく互ひに打ち解け歸順和合の上は、もはや世界に敵味方の區別なし。たがひに力を協せ心を一にし、親子兄弟のごとく相和し相親しみ、もつて神業に

奉仕せよ」

との訓示を傳へ、かつ竹熊、大虎彦らに厚く禮を述べ、玉照彦、大足彦とともに鳥船に乗りて、龍宮城へ無事歸城された。

大八洲彦命の退座されし後は、もはや少しの氣兼ねなく、たがひに心を打ちあけ無禮講をなさむとて、さかんに飲み食ひ、かつ亂舞に時を移した。時分はよしと竹熊は、田依彦、玉彦より奪ひたる玉に金箔を塗り、玉の一部分に生地を露はし、その生地のところ日月の形を造り、宴席の上座に持出して、

「これは餘がかつて天神より賜はりたる金剛水の玉なり、この玉ある時は世界は自由自在なり」

と誇り顔に陳べた。竹熊の從臣は、「われにも斯かる珍器あり」とて、圓き石に種々の箔を着せ、宴席に持出し、非常に玉の功用を誇った。高杉別以下の龍宮城の神司は面目を失つた。たちまち負けぬ氣になつた芳彦は、懷より紫の玉を取出し、

「諸神よ、あまり輕蔑されな。われにも斯くのごとき寶玉あり」

と席上せきじやうに持出もちだし、これを机上きじやうに据すゑ肩かたをはり鼻息はないきたかく頤あごを振ふつてみせた。ここに神彦かみひこは、「われにも玉たまあり」とて、黄色きいろの玉たまを持出もちだし、机上きじやうに据すゑてその珍寶ちんぼうを誇ほこり、意氣揚々いきやうやうとして座ざに復ふくした。

そのとき大虎彦おほとらひこは席上せきじやうに立たち、

「われ等の部下ぶかにはかくの如ごとき數多あまたの玉たまを有いうす。然しかるに龍宮城りゆうぐうじやうの神司かみがみに玉少たますくなきは如何いかに」

と暗あんに敵愾心てきがいしんを挑發てうはつせしめた。このとき負けぬ氣きの倉高くらたかは、

「貴下きからの玉たまは、吾われらの所持しよぢする寶玉ほうぎよくに比くらぶれば、天地霄壤てんちせうじやうの差さあり、天下無雙てんかむさう、古今獨歩ここんどくぼ、珍無類ちんむるゐの如意にょいの寶珠ほうしゆの玉たまを見みて驚おどろくな」

と酒氣しゆきにまかして、前後ぜんごの辨わかまへもなく、鼻高々はなたかだかと机上きじやうに据すゑわが席せきに復かへつた。竹たけ熊くまは大おほひに笑わらひ、

「いかに立派りつぱなる龍宮りゆうぐうの寶玉ほうぎよくとて、ただ三個さんごにては何なんの用ようをかなさむ。吾われには無むす數うの寶玉ほうぎよくあり」

とて、なほ奥おくの間まより一個いっこの偽玉にせたまを持出もちだしてきた。

一見實に立派なものであるが、その内容は粘土をもつて固められた偽玉である。  
羨望の念に驅られたる杉生彦、猿彦は負けぬ氣になり、  
『斯くのごとき寶玉は、いかに光り輝くとも何かあらむ、今わが持ち出づる玉を  
見て肝を潰すな』

と酒氣にまかせて机上に持出し、玉の由來を誇り顔に物語つた。

このとき高杉別、森鷹彦、鶴若、龜若、時彦は苦り切つた顔色をなし、酒の酔  
も醒め色蒼白めて控へてゐる。竹熊、大虎彦は五柱の神司にむかひ、言葉汚く、

『汝らは龍宮城の從臣なりと聞けども、ただ一個の寶玉も無し。ただ汝の持てる

ものは大なる肛門の穴か、八疊敷の鞞丸のみならむ』

と冷笑した。五柱は怒り心頭に達した。されども深く慮つて、容易にその玉を出  
さなかつた。

(大正一〇・一〇・二四 舊九・二四 外山豊二録)

第四章 八尋殿の酒宴の二（四二）

ここに竹熊、大虎彦は威丈高になり、高杉別、森鷹彦、鶴若、龜若、時彦を眼下に見下し、

「汝らは龍宮城の神司とはいへ、その實は有名無實にして、糞土神同様なり。玉なき者は、この席に列なる資格なし。ああ汚らはしや」と鹽をふり、臀部をまくり、あらゆる侮辱を加へた。五柱の從臣は、勘忍に勘忍を重ね、これも畢竟惡魔の世迷ひ言に過ぎずとして、つひには少しも耳をかさなかつた。

玉を差し出したる龍宮城の五柱の神司も、竹熊一派の者も、共に聲を揃へて、高杉別以下の神司をさんざん罵倒した。酒宴はますます酣となつた。

この時、竹熊は左より大虎彦は右より、彼我的手を結びあはせ、圓を描いて高杉別以下四柱の神司を中に取まき、惡聲を放ちつつ踊り狂ひはじめた。

五柱の神司は、遁れ出づるに由なく、何時また吾が玉を奪はるるやも知れずと、

非常に苦心した。されど竹熊の執拗なる計略も、この五柱の神司の玉のみは、どうしても奪ることはできなかつた。そこで更に第二次會に臨まむことを告げた。酔ひつづれた彼我の者たちは、一も二もなく、手を拍つて賛成した。

要するに、玉を差し出したる五柱の神司は、知らず知らずのまに、全く竹熊の捕慮となつたのである。高杉別以下四柱の神司は、いかにして此の場を遁出さむかと苦心すれども、彼らはなかなか油斷はしない。やむなく引きずられて、第二次會の宴席に臨むことになつた。

第二次の宴會は開かれた。ここは以前の席とは變つて、よほど大きな廣間であつた。廣間は上下の二座に別たれて、上座には八重疊が敷きつめられ、種々の珍寶が飾り立てられてある。席の中央には、得もいはれぬ美しき花瓶に、芳香馥郁たる珍らしき花樹が立てられてある。これに反して、下座には目もあてられぬやうな、汚い破れ疊が敷きつめてあつた。

各自席に着くや、竹熊は立つて一同に向ひ、

「この席は、玉を差し出したる心美しき者のみ集まる、神聖なる宴席である。玉

を差し出さざる心汚き者は、下の席に下れよ』  
と、おごそかに言ひ渡した。

そこで、一同は立つて、高杉別以下四柱の神司を下座に押しやつた。五柱の神司は、この言語道斷なる虐待に慷慨悲憤の念に堪へなかつたが、深くこれを胸の中に秘めて、せきくる涙を「ぞつ」と押へてゐた。

上座の席には、海河山野の種々の珍らしき馳走が列べられ、一同は舌鼓を打つて或ひは食ひ、あるひは飲み、太平樂のあらむかぎりを盡してゐた。下座におかれた五柱の神司の前には、破れた汚き衣を纏へる年老いたる醜女數名が現はれて、膳部を持ち運んできた。その酒はと見れば牛馬の小便である。飯はと見れば蝨ばかりがウヨウヨと動いてゐる。その他の馳走は蜈蚣、蛙、蜥蜴、蚯蚓などである。五柱の神司は、あまりのことに呆れかへつて、暫しは、ただ茫然と見詰めてゐるより外はなかつた。

その時、汚き老婆は、

☐ 竹熊さまの御芳志である。この酒を飲まず、この飯を食ひたまはずば、竹熊さ

まに對して、禮を失するならむ、親交を温むるため是非々々、御遠慮なく、この珍味を腹一杯に召し上れ」

と、無理矢理に奨めておかない。上座よりは、酒に酔ひつづれた者が集まりきたりて、手を取り、足を取り、無理無體に頭を押へ、口を捻ぢ開け、小便の酒を飲ませ蝨の飯を口に押込み、その他いやらしい物を強て食はせてしまつた。

そこへ芳彦座を立ち酔顔朦朧として、高杉別以下の神司にむかひ、

「貴下らは竹熊さまの誠意を疑ひ、玉を祕して出さざるため、かかる侮辱と迫害を受くるものならむ。よし玉を出したりとて、決して奪はるるものにあらず、速やかにその玉を差し出し机上に飾りたて龍宮城の威勢を示し、もつて竹熊さまの心を柔げられよ」

と忠告した。

この時、高杉別は首を左右に振り聲を勵まし、

「吾はたとへ如何なる侮辱を受くるとも、いかなる迫害に遭ひ、生命を絶たるるとも萬古末代、この玉は斷じて離さじ」



と、キツパリ強く言ひはなつた。残りの四柱神司も同じく、「高杉別の意見に同意なり」と答へた。をりしも、金色の咫尺の鳥數百千とも限りなく中空より、光を放つて現はれ、高杉別以下四神司を掴んで、龍宮城へ飛び歸つた。

つづいて數多の怪鳥は天空に舞ひ亂れ、砂礫の雨しきりに降りきたり、屋根の棟を打ち貫き、宴席に列べる芳彦、神彦、倉高、杉生彦、猿彦の頭上を碎き、その場に悶死せしめた。

ア、貴重なる龍宮の黄金水の玉は、惜しい哉、七個まで竹熊の手に渡つてしまつたのである。

(大正一〇・一〇・二四 舊九・二四 櫻井重雄録)

#### 第四三章 丹頂の鶴〔四三〕

鶴若は、黄金水の精なる赤色の玉を得てより、信念ますます鞏固となり、ひそ

かに、シオン山に登りて多年の修業をなし、ある時はシオンの瀧に飛び込み、ある時はシオンの谷川に楔身をなし、つひには、神通力を自由自在に發揮し得るやうになつた。鶴若はその名のごとく、鶴と變じて空中を翱翔し、天地間を上下して、神界の天使とならむと、一意専念に苦しき修行をつづけてゐた。

ここに竹熊一派の悪神は、鶴若の神通力を奪ひ、地上に落下せしめむとして苦心してゐた。鶴若は空中を一瀉千里の勢をもつて、諸方を翻けめぐつた。ときに前方にあたつて紫雲棚びく高山が目についた。山頂は雲の上に白く浮出てゐる。鶴若は、その山に引きつけらる心地していつの間にか、山上に翻けりついた。折しも、山腹の紫雲の中より四方を照らす鮮光あらはれ、光はおひおひ山頂を目がけて立騰つていった。そして、それが一個の紅色の玉となつた。このとき鶴若は、鶴の姿を變じて、莊嚴なる神人と化してゐたのである。その玉は、見るみる左右にわかれて、中より天女が現はれてきた。鶴若はこの天女の美貌に見惚れてゐると、天女はまた鶴若を見て秋波を送り、無言のまま鶴若の側に立寄つてきた。この高山はアルタイ山で、この天女は名を鶴姫といふ。鶴若、鶴姫はここに夫婦

の約を結んだ。これと同時に鶴若はたちまち通力を失ひ、空中飛行の術が利かなくなつた。

山の中腹には巨大な岩窟がある。ふたりはこの岩窟を棲所とし、遠近の山々の者を集めて、ここを中心として一つの國を立てた。さうして、廣き岩窟の奥には赤玉を安置し、これを無二の神寶と崇め祀つた。ふたりはたがひに相親しみ、相愛し、永き年月をアルタイ山に送つてゐた。

然るにふたりの若き姿は年とともにおひおひ瘦せ衰へ、頭には白髪が生えだし、何となく淋しさを感じてきた。ふたりは後繼者たる子の生れ出でむことを希求するやうになつた。

ここに竹熊の部下、鶴析姫は、うるはしき天使の姿に變じてアルタイ山の山頂にのぼり、雷鳴を發し大雨を降らしめた。雨は瀧の如くにふりしきり、たちまち山の一角を崩壊し、濁水は流れて岩窟の前に溢れいで、少時にして、その雨も歇み、岩窟の前には、一つの柔かき麗しき鮮花色の玉が残されてゐた。鶴若は手にとりてこれを眺むるに、あたかも搗きたての餅のやうな柔かさである。鶴姫はこ

れを見て、にはかにこの玉を食ひたくなり、鶴若の手より之を奪らむとして、つひに兩方よりその玉を引き千切つてしまつた。この引き千切られた玉は、自然にふたりの口に入り腹中に納まつてしまつた。それよりふたりは情欲をさとることになり、鶴姫はつひに妊娠し、月満ちて玉のごとき女子が生れた。これを鶴子姫と名付けた。

二人は鶴子姫を生んで、寵愛斜ならず、這へば立て、立てば歩めの親心、鶴子姫の泣くにつけ、笑ふにつけても心を動かし、子のためには一切を犠牲にしても悔いがないといふ態度であつた。鶴子姫は、兩親の愛育によりて、追々成長し、言語を發するやうになつて、初めて「ターター」と啼きだした。兩親はその啼聲が氣にかかり「ターター」とは、如何なる意味かと非常に苦心したが、到底その意味はわからなかつた。鶴子姫は、今度は「マーマー」と啼きだした。何の意味か、これも判らなかつた。しばらくすると鶴子姫は「タマ、タマ」と啼きだした。これを聞いて兩親は、種々の鳥類の卵を從臣に命じて集めさせたが、鶴子姫はしきりに首を左右に振り、卵を吸ふことを嫌つた。兩親は晝夜膝を交へて、その鶴子

姫のいふ「タマ」とは、如何なる意味かと首を傾け色々と考へたが、どうしてもわからなかつた。時に兩親は萬の從臣を集め、赤玉の祀りある玉の宮の祭典をおこなひ、鶴子姫の無事成長せむことを祈つた。その時鶴子姫は、鶴子姫に抱かれて祭場に列した。ここに鶴子姫は、はじめて笑顔をつくり「赤玉、々々」といつて喜んだ。兩親は目の中へはいつても、痛くは思はぬ愛兒の鶴子姫の笑顔に、満腔の喜びをおぼえ、鶴子姫の要求なれば、自分の生命を捨てても惜くはないとまで愛してゐたのである。祭典は無事にすみ、ふたりは廣大なる岩窟の居間に歸つた。萬の從臣は直會の酒に酔ひ、萬歳を連呼し、各自の住所に歸つた。あとに親子三名は奥の一室に入り、やすやすと寝についた。夜半にいたり、鶴子姫にはかに「タマ、タマ」と啼きだした。鶴子姫は之を聞いて始めて其の意をさとり、鶴子姫が「タマ、タマ」といふのは、かの玉を要求してゐるに違ひなしと思ひ浮かべ、その旨を鶴若に話しかけた。鶴若にはかに床上に起き上り、腕を組み、思案にくれて、一言も發せず伏向いてゐた。鶴子姫の啼き聲はますます激しくなり、兩親の胸を引き裂かむばかりに聞えた。兩親はみたたまらず、夜中をも顧みず、鶴

若は起つて玉の宮に入り、御神體の赤玉を捧持し、恭しく居間の机上に据ゑた。すると鶴子姫の啼き聲は頓にやんで笑ひ聲と變じ、その玉に手を觸れ、玉の周圍を嬉々として飛びまはつた。兩親はそのまま玉を床上に据ゑ、鶴子姫の機嫌とりの玩具とした。

鶴子姫はかくてだんだんと成長したが、ある日たちまち其の姿を黒龍と變じ、その玉をとるや否や、黒雲を捲きおこし雷雨をよび、大音響とともに、父母を捨て、西方の空高く姿を隠してしまつた。後に残りしふたりは驚き呆れ、かつ玉と愛兒の行方を眺めて長嘆止まなかつた。ふたりは鶴子姫が邪神の靈の變化なりしことを悟りて、姫の身については斷念せるものの、斷念め切れぬのはかの赤玉である。かつて竹熊らの侮辱壓迫にたへ、生命にかへて守護したる、かの寶玉を敵に奪はれては、大八洲彦命にたいして一言の申譯なしと、天地にむかつて號泣し、その一念凝つて、頭上に赤玉の痕をとどむるにいたつた。これを丹頂の鶴といふのである。焼野の雉子、夜の鶴、兒を愛すること鶴に優るものなきも、これが縁由である。

第四四章 綠毛の龜〔四四〕

龜若は綠の玉を生命にかけて死守してゐた。いかなる名譽欲も、物質欲も眼中におかず、ただこの玉のみを保護することに心魂を凝らしてゐた。しかるに龜若は八尋殿の酒宴のみぎり竹熊の奸計にかかり、毒蟲を多く腹中に捻込まれたのが原因をなして、身體の健康を害し、病床に臥し全身黄綠色に變じ、つひに歸幽した。龜若の妻龜姫は、天地に慟哭し、足邊に腹這ひ頭邊に這ひまはり、涕泣日を久しうした。その悲しみ泣き叫ぶ聲は風のまにまに四方にひびき、つひには悲風慘雨の絶間なきにいたつた。この間およそ百日百夜に及んだ。

この時ガリラヤの海より雲氣立ち登り、妖雲を巻きおこして一種異様の動物現はれ、龍宮城近く進んできた。異様の動物は、たちまち美はしき神人と化した。

そして龜姫の家に龜若の喪を弔うた。この者は其の名を高津彦といふ。龜姫は高津彦を見て大いに喜び、その手を取つて一間に導き、いろいろの酒肴を出して饗應し、かつ、

「貴下はわが最も愛する龜若ならずや」  
と訝かり問ふた。高津彦は、

「われは龜若なり、決して死したるに非ず、毒の廻りし體を捨て、新に健全なる體を持ち、汝の前きたりて偕老同穴の契を全くせむとすればなり」

と言葉たくみに物語つた。龜姫は高津彦の顔色といひ、容貌といひ、言葉の色といひ、その動作にいたるまで龜若に寸毫の差なきを見て、心底より深くこれを信ずるにいたつた。ここにふたりは水も洩さぬ仲のよき夫婦となつた。

龜姫は再生の思ひをなし、一旦長き別れと斷念した不運の身に、夫のふたたび蘇生してきたつて鴛鴦の契を結ぶは如何なる宿世の果報ぞと、手の舞ひ足の踏むところを知らなかつた。

夫婦の仲は蜜のごとく漆のごとく親しかつたが、ふとしたことより風邪のため



に高津彦は重い病の床についた。今まで歡喜に満ちた龜姫の胸は、ふたたび曇らざるを得なかつた。手を替へ品を換へ看病に盡した。幾日たつても何の效も見えず、病はだんだん重るばかりである。このとき高津彦の友の高倉彦きたりて病床を見舞ひ、かつ醫療の法をすすめた。百草を集め種々の醫藥をすすめた。されど病は依然として重るばかりである。龜姫の胸は、實に熱鐵を當るごとくであつた。不思議にも高倉彦の容貌、身長、言語は、龜若に酷似してゐた。ここに龜姫は、その眞偽に迷はざるを得なかつた。そこで龜姫は、かつ驚き、かつ怪しみ、

「貴下はいづれより來ませしや」

といぶかり問ふた。高倉彦は、

「われは龍宮城の神司にして、龜若のふるくよりの親しかりし美はしき友なり」と答へた。そこで龜姫は、

「高倉彦の龜若に酷似したまふは如何なる理由ぞ」

と反問した。高倉彦は答へて、

「實際吾は龜若とは雙生兒である、されどわが父母は世間を憚り、出産とともに

他に預けたのである。そして龜若と吾とは此の消息を少しも知らず、心の親友として幼少のころより交はつてゐた。然るにある事情より吾はこの事を感じせしが、今ここに病みたまふ龜若は、この真相を御存じないのである。われは骨肉の情に惹かれて、同胞の苦しみを見るに忍びず、いかにもしてこの病を恢復せしめ兄弟睦じく神業に奉仕せむと焦慮し、神務の餘暇を得て、ここに病床を訪ねたのである」

とはつきり物語つたので、龜姫の疑ひは全く氷解した。

高倉彦は、龜姫の信賴ますます加はつてきた。一方龜若の病氣はだんだん重るばかりである。そこで龜姫はふたたび、

「夫の病を救ふ妙術はなきや」

と面色憂ひを含んで高倉彦に相談をした。そのとき高倉彦は、實に當惑の面持にて、

「ああ氣の毒」

と長歎息をなし、腕を組んで頭を垂れしばしは何の返答もなかつた。ややあつて

思ひ出したやうに高倉彦は喜色を満面にたたへて、

「その方法たしかにあり」

と飛び立つやうな態度をしながら答へた。龜姫は顔色にはかに輝き、驚喜して、

「いかなる神法なりや聞かま欲し」

と高倉彦の返辭をもどかしがつて待つた。

高倉彦はわざと落着いて手を洗ひ口嗽ぎ、天に向つて永らくのあひだ合掌し、

何事か神勅を請ふもののやうであつた。病床にある龜若はしきりに苦悶の聲を發

し、既に斷末魔の容態である。龜姫の胸は矢も楯もたまらぬやうになつた。たと

へ自分の生命は失ふとも最愛の夫、龜若の生命を救はねばおかぬといふ決心であ

る。一方高倉彦の様子いかにと見れば悠々として天に祈り、いささかも急ぐ様子

がない。高倉彦はおもむろに祈りを捧げた後、室内に這入つてきた。このとき龜

姫は渴きたる者の水を求むるごとくに、高倉彦の教示や如何にと待ち詫びた。高

倉彦はこの様子を見て心中に謀計のあたれるを打ち喜び、外知らぬ顔にて左も勿

體らしく言葉をかまへていふ、

「當家には貴重なる緑色の玉が秘藏されてある。この玉を取りだして月の夜に高臺を設けてこれを奉安し、月の水をこの玉に凝集せしめ、その玉より滴る一滴の水を龜若に吞ましめなば、病癒えなむとの月讀神の神勅なり」  
と誠にやかに教示した。龜姫は天の佑けと喜び勇んで直ちに高臺を造り、その玉を中央に安置した。その刹那一天たちまち掻き曇り、黒雲濛々として天地をつつみ、咫尺を辨ぜざるにいたつた。時しも雲中に黒龍現はれ、その玉を掴みて西方の天に姿をかくした。數日を経てこの玉は、竹熊の手に入つたのである。今まで夫と思ふてゐた偽の龜若は、にはかに大龍と變じた。また高倉彦はガリラヤの大なる竈に還元し、龜姫を後に残して雲をおこし姿をかくした。龜姫は地團駄踏んで侮しがり、精魂凝つて遂に緑毛の龜と變じ龍宮海に飛び入つたのである。龜は萬年の齡を保つといふ。龜若は八尋殿の宴會において毒蟲を食はせられ、それがために短命にして世を去つた。それから龜姫の靈より出でし龜は、衛生に注意して毒蟲を食はず、長壽を保つことになつた。

(大正一〇・一〇・二五 舊九・二五 加藤明子録)

第四十五章 黄玉の行衛（四五）

時彦は黄金の玉を生命にかへても、神政成就の曉まで之を保護し奉らねばならぬと決心し、既に龍宮神の不覺不注意より九個の玉を竹熊に奪はれ、無念やるかたなく、せめてはこの玉をわれ一人になるとも保護せむとて龍宮城にいたり、言靈別命の許しをえて諸方を逍遙し、つひにヒマラヤ山に立て籠つた。そしてヒマラヤ山に巖窟を掘り、巖中深く之を秘め、その上に神殿を建て時節のいたるを待ちつつあつた。居ること數年たちまち山下におこる鬨の聲、不審にたへず殿を立ちいで聲するかたを眺むれば、豈計らむや、大八洲彦命は大足彦、玉照彦を兩翼となし數多の天津神龍宮の神司と共に、デカタン高原にむかつて錦旗幾百ともなく風に靡かせ、種々の音楽を奏しつつ旗鼓堂々として進行中である。

時彦は山上より遠くこれを見渡せば、十二個の同型同色の神輿をあまたの徒歩の神司が擔いで進みくるのである。時彦は直ちに天の鳥船を取出し、從臣をして地上に下り一行の動靜を窺はしめた。從臣はその莊嚴なる行列と大八洲彦命の盛

装を見て肝を潰し、あはただしく鳥船に乗じてヒマラヤ山にその詳細を復命したのである。

時彦は大八洲彦命の一行と聞きて心も心ならず、吾は徒に深山にかくれて、ミロク神政の神業参加に後れたるかど大地を踏んで残念がり、ただちに天の鳥船に打乗りて地上に下り、大八洲彦命の一行の後にいでて恐るおそる扈従した。されども時彦は吾が身の神業に後れたるを恥ぢて、花々しく名乗も得せず、デカタン高原に着いたのである。

デカタン高原には莊嚴なる殿堂が幾十とも限りなく建て列べられ、八百萬の神司は喜々として神務に奉仕してゐる。四邊は得もいはれぬ香氣をはなてる種々の花木に廻らされ、天人天女の歡び狂ふ有様は、實に天國、淨土、地の高天原の光景であつた。

大八洲彦命は中央の莊嚴なる殿堂に立ち、八百萬の神司らにむかつて宣して曰く、

ミロクの世は未だ時期尚早なれども、國常立尊の天に嘆願されし結果、地上の

神人を救ふため、末法の世を縮めて天の岩戸を開き、完全なる神代を現出せしめ、このデカタンの野を地の高天原と定めたまへり。されど悲しむべし、黄金水より出たる十二個の寶玉はもはや十一個まで悪神の手に占領されたるを、大神の神力によりてこれを敵より奪り還し、ここに十二の神輿を作りて、この地の高天原の治政の重要な神器として、永遠に保存すべしとの神命なり。されど一個の黄色の玉の行衛は今に判明せず、この玉なきときは折角のミロクの世も再び瓦壊するの恐れあり、かの黄玉を携へたる龍宮城の從臣たりし時彦は、今いづこに在るや、彼が持てる一個の寶玉は、この十一個の玉に匹敵するものなり。もし時彦にして後れ馳せながらも、いづれよりか其の玉を持ちきたらば、神界の殊勳者として吾は之を天神に奏上し、わが地位を譲らむ」と大聲に呼ばはりたまうた。

このとき、時彦思へらく、「われ多年苦心慘愴して此の玉を保護す。しかるに今大八洲彦命の教示を聞き喜びに堪へず、この時こそ吾は花々しく名乗りを上げ、もつて神界の花と謳はれむ」と笑みを満面にたたへ、恐るおそる大八洲彦命の御

前まへに出いで九首三拜きゅうしゆさんぱいして、

□ 時彦ときひこここに在あり、黄色わうしよくの玉たまを持参ぢざん仕かまつり候さぶらふ□

と言葉ことばすずしく言上ごんじやうした。あまたの神司かみがみは、突如とつじよとして名告なり出いでたる時彦ときひこの様子やうすを見て感かんに打うたれたものごとく、時彦ときひこは神司かみがみらの羨望せんぼう的まとなつた。

大八洲彦命おほやしまひこのみことは大いおほに喜よろこび、かつ時彦ときひこを招まねき殿内でんない深く入いりたまうた。殿内でんないには十

二にの同どう型けいの立派りつぱな神輿みこしが奉安ほうあんされてある。大八洲彦命おほやしまひこのみことは正中せいぢゆうにある一個いっこの神

輿しの扉とびらを開ひらき、

□ 十一個じふいつこは各色かくしよくの玉たまをもつて充みたされあり、されど見みらるる如ごとくこの神輿みこしは空虛くうきよ

なり。速すみやかに汝なれが玉たまを是これに奉安ほうあんし、ミロクミロクの代よのために盡つくされよ□

と嚴命げんめいした。この時とき、時彦ときひこは歡天喜地くわんでんきち身みのおくところを知らず、ただちに玉たまを取とり

出だし神輿みこしの中深なかふかくこれを納をさめた。そこでいよいよ十二じふにの神輿みこしに種々しゆじゆの供そなへ物ものを獻けん

じ、莊嚴さうげんなる祭典さいてんがおこなはれた。ついで十二じふにの神輿みこしはデカタン國こくの麗うるはしき原野げんや

を神司かみがみらによつて擔かつぎまはされた。實じつに賑にぎはしき得えもいはれぬ爽快さうくわいな祭典さいてんであつた。

原野げんやの中心ちゆうしんに各自かくじ神輿みこしを下おろし神司かみがみらの休憩きうけいを命めいじたまうた。



折をりから天てんの一方いつぱうに妖雲えううんおこり、たちまち雲中うんちゆうより種々しゆじゆの鮮光せんくわうがあらはれた。その光景くわうけいはあたかも花火はなびを數百千すうひやくせんともなく一度いちどに觀みるやうな壯觀さうくわんであつた。神司かみがみらは、皆天みなてんの一方いつぱうに心こころを惹ひかれて見みつめてゐた。そのあひだに大八洲彦命おほやしまひこのみこと、大足彦おほだるひこは神輿みこしの位置あちを變更へんかうしておいた。いづれの神輿みこしも同型同色どうけいどうしよくのものである。

にはかに天てんの一方いつぱうより黒雲くろくもおこり雨あめは地上ちじやうに瀧たきのごとく降ふりそそいだ。あまたの神司かみがみは狂氣きやうきのごとく神輿みこしの中なかより各自かくじに黄色わうしよくの玉たまを取りだし四方しはうに解散かいさんした。時彦ときひこは驚おどろいて吾わが奉たてまつれる玉たまを保護ほごすべく神輿みこしに近ちかづき、その玉たまを懷中ふところに入れむとした。いづれの者ものも四方しはう八方はつぱうに四散しさんして、宮殿きうでんはいつしか荒涼くわうりやうたる原野げんやに化くわしてゐた。

時彦ときひこは夢ゆめに夢見ゆめみる心地こころちしてその玉たまを取りだし點檢てんけんした。こはそも如何いかに、容積ようせきにおいて光澤くわうたくにおいて、少すこしも變化へんくわはない。されど重量ぢゆうりやうのはなはだ輕かるきを訝いぶかり、混雜こんざつに紛まぎれて吾わが玉たまを取換とりかへられしやと齒はがみをなして口惜くちをしがつた。

このとき空中くうくうに聲こゑあり、

「大馬鹿者おほばかもの！」

と叫ぶ。今まで、大八洲彦命と見えしは武熊別の變身であり、大足彦以下の正神と見えしは彼が部下の邪神であつた。アゝいかに信仰厚く、節を守るとも、時彦のごとく少しにても野心を抱く時は、ただちに邪神のために誑らかされ、吞臍の悔を遺すことあり。注意すべきは、執着心と巧妙心である。

花と見て來たであらうか火取蟲

(大正一〇・一〇・二五 舊九・二五 櫻井重雄録)

#### 第四六章 一島の松(四六)

ここに竹熊は武熊別と共に、あまたの者を集め、大祝宴を張つた。その理由は、十二個の寶玉はわが神智神策をもつて十個まで手に入れたり、餘すところただ二

個のみ。いかなる神力の強き神人なりとて、これを奪取するに何の苦心かあらむと、おのが智略に誇り、ここに一同を集め祝宴を張つてゐた。

時しも末席より鬼彦肩を揺りながら立ち現はれ、竹熊、武熊別の前に出で、  
『今日は實に大慶至極の日なり。しかるによき事の續けばつづくものかな。ただ今龍宮城より高杉別、森鷹彦の二神司、二個の玉を持ち献上せむことを申込みたり。いかが取計らつてよかるべきや』

と述べた。酒宴の酒に酔ひて醉眼朦朧たる竹熊らは、願望成就の時節到来と欣喜雀躍し、ともかく二神司を引見せむことを承諾した。ややありて高杉別、森鷹彦は侍者の案内に伴れて、殿中深く竹熊の前に現はれ一禮をなし、且つおのおの玉を献上せむことを申込んだ。

竹熊は胸を躍らせた。注意深き武熊別は二神司にむかひ、

『この貴重なる龍宮城の神寶を何ゆゑ吾らに譲與せらるるや。その理由を聞かまほし』

と詰つた。二神司は喜色満面を粧ひながら、おもむろに答ふるやう、

「貴下等の神算鬼謀は吾らをして舌を巻かしむるに足る。既に十個の玉は貴下の手に入れり。われ二個の玉を以て貴下と争ふといへども、十對二の比例をもつて、何ぞよく貴下の軍に勝たむや。それよりも潔く吾らは此の玉を貴下に獻じ、たがひに和親を結び、もつて天下泰平を祈らむのみ」  
と、言葉涼しく答ふるのであつた。

竹熊は二個の玉を熟視して大いに驚き、その光澤に感激止まなかつた。このとき高杉別、森鷹彦は言葉を設けて曰く、

「この玉は十二個のうち特殊の神力あり、故に惡臭に觸れ、惡風にあたらば靈力迸出して何の效用も爲さじ。いづれの者にも拜觀を許さず、ただちに函を作り十重二十重に之をつつみて奥殿深く奉安し、危機一髪の場合にこれを使用したまへ」と述べた。竹熊も武熊別も二神の誠意を疑はず、ただちに言のごとく之を幾重にも函に包み、固く封じて奥殿深く藏めたのである。

しかるにこの玉は眞赤な偽玉であつた。注意深き二神司は竹熊の機先を制し、もつて眞玉の奪取を免れたのである。その後高杉別、森鷹彦は竹熊の氣にいりと

なり、重く用ゐられた。しかし眞正の玉は、森鷹彦は大八洲彦命に獻り、高杉別は從臣の杉高に命じ、口に吞まして地中海に羅列せる島嶼に之を永遠に祕藏し、杉高をこの島の守護神に任命した。一つ島に堅き岩窟を掘り、玉を深く藏め、その上に標の松を植ゑておいた。これを一つ島の一つ松といふ。これより二神司は竹熊の信任をえ、武熊別と列んで三羽鳥と稱せられ、帷幕に參ずるにいたつた。ア、今後の高杉別、森鷹彦は如何なる行動に出づるであらうか。

(大正一〇・一〇・二五 舊九・二五 外山豊二録)

#### 第四七章 エデン城塞陷落(四七)

竹熊は大小十二の各色の玉を得て意氣天を衝き、虚勢を張つて横暴の極を盡した。さうして高杉別、森鷹彦を深く信任し、高杉別をして武熊別の地位にかはら

しめた。武熊別は竹熊の態度に憤怨やるかたなく、ここに一計をめぐらし、ウラル山に割據する鬼熊に款を通じ、竹熊、高杉別、森鷹彦を滅ぼさむとした。鬼熊はその妻鬼姫に計を授けて龍宮城の奥深く忍ばしめ、遂には稚姫君命、大八洲彦命のやや信任を得るにいたつた。鬼熊は鬼姫の苦心により、つひに龍宮城に出入を許さるとこまで漕ぎつけた。さうして鬼熊の子に月彦といふ心の麗しき者があつた。この者は稚姫君命の大變なお氣にいりであつた。悪霊夫婦の子に、かくのごとき善人の生れ出でたるは、あたかも泥中より咲く蓮華のやうなものである。ここに稚姫君命は、ふたたび世界の各所に群がりおこる悪霊の騒動を鎮定すべく、國常立尊の神命を奉じ、月彦、眞倉彦を伴ひ、目無堅間の御船にのり、眞澄の珠を祕めおかれたる沓島にわたり、諸善神を集めて、魔軍鎮定の神業を奉仕されたのである。この時秋津島根に攻めよせきたる數萬の黒龍は、龍宮の守り神および沓島の守り神、國の御柱命の率ゐる神軍のために、眞奈井の海においてもろくも全滅した。しかるに陸上の曲津らは、勢力猖獗にして容易に鎮定の模様も見えなかつた。これは、ウラル山に割據する鬼熊の部下の悪霊らの、権力爭奪の悪魔戦

であつた。鬼熊は部下の者共の統一力なきを憂へ、ここに一計をめぐらし、龍宮城に出入して根本的權力を得、部下の悪靈を鎮定し、すすんで地の高天原を占領せむとする企畫をたててゐた。

稚姫君命一行の沓島に出馬されし後の龍宮城は、大八洲彦命、眞澄姫をはじめ、竹熊、高杉別、森鷹彦、龍代姫、小島別等のあまたの神司が堅く守つてゐた。武熊別は如何にもして、竹熊、高杉別を亡ぼさむとし、鬼熊、鬼姫に對し、

大八洲彦命、竹熊等は神軍を整へ、大擧してウラル山を攻落し、貴下を討滅せむと種々畫策の最中なり。われは探女を放ちてその詳細を探知せり

と種々の虚偽を並べ、鬼熊、鬼姫の心を動かさむとした。ここに鬼熊、鬼姫の憤怒は心頭に達し、

大八洲彦命、竹熊一派らを亡ぼすは今を措いて好機はなし。今吾、彼らを滅ぼさずんば、吾は彼に早晚亡ぼされむ。機先を制するはこの時なり

と鬼熊、鬼姫は武熊別を部將として、ウラル山の鬼神毒蛇を引率し、まづ竹熊の屯せるエデンの城を襲ひ、ついで龍宮城を襲撃せむとした。鬼熊の魔軍は驀地に

すすんで、八方よりエデンの城塞に迫った。時しも竹熊は、龍宮城の留守役として不在中なりしかば、エデン城は戦はずしてもろくも鬼熊の手に落ちた。  
(大正一〇・一〇・二六 舊九・二六 谷口正治録)

#### 第四八章 鬼熊の終焉(四八)

ここに鬼熊はエデンの城塞を奪取し、牛熊、牛姫をして數多の魔軍を統べて之を守らしめ、鬼熊、鬼姫のふたりは龍宮城の裏門より潜かに忍び入った。鬼熊は巨大なる鐵棒を提げ、鬼姫は都牟刈の太刀を懷に秘め、奥殿深く進みいり、大音聲に叫んで曰く、  
『鬼熊、鬼姫これに在り、大八洲彦命は何處に在るぞ、見參せむ』  
とますます奥深く獅子奮迅の勢をもつて、ふたりは襲ひいつた。

このとき大八洲彦命は病に臥して、戸を堅く閉鎖し差籠もつてをられた。鬼熊、



鬼姫は満身の力をこめて、その室の扉を叩き破らむとした。その聲に驚いて馳集まりしは龍世姫、高杉別であつた。たちまち彼我のあひだに大格闘がはじまつた。高杉別は今や鬼熊のために亡ぼされむとする時、小島別驅來つて、忠臣藏の加古川本藏が鹽谷判官を抱止めたやうに背後より無手と組みつた。他の神司は鬼熊の手や足に組みつた。鬼熊は進退谷まつて、鬼姫の救いを叫んだ。鬼姫は鬼熊を救はむとして走りゆかむとするを、ここに菊姫現はれて後より八尋繩を首に打ちかけ仰向けに倒した。あまたの女性は群がりたかつて鬼姫を縛しあげた。時しも竹熊は中殿より現はれ來りて、進退谷まり身動きのままならぬ鬼熊の面上目がけて、鐵鎚を打下した。血は流れて泉のごとく、慘状目もあてられぬ有様である。かかるところへ現はれ出でたる眞澄姫、龍世姫は、日ごろの鬱憤を晴らし悪心懲すは今この時なりと、女性の淺果敢にも弱りきつたる鬼熊を荊の鞭にてやみくもに亂打打擲する。一同の猛り狂ひ叫ぶ聲は四邊に洪水のごとく響きわたる。病床にありし大八洲彦命は、スワこそ一大事勃發せりと病の床をはね起き、現場に馳着け、小島別、高杉別を宥め、かつ鬼熊の負傷を懇切に見舞ふた。まこと

に智仁勇兼備の神將である。

稚姫君命は沓島の神業を了へ、二柱の從臣と共に歸城され、この場の光景を眺めて大いに怒らせたまひ、眉をひそめて、

「鬼熊を討ちし無法のものはたれぞ」

と色をなして詰問された。このとき鬼熊は狼狽のあまり、その下手人の誰なるかを知らなかつた。されど彼は邪推を廻らし、

「わが面體を打ちしは確に龍世姫、高杉別、虎彦ならむ」

と血泥の物凄き顔を振りたてて奏上した。小島別は鬼熊の言葉を遮り、

「否然らず、小臣はその現場を目撃せる證神なり。鐵棒をもつて討ちしことは竹

熊の所爲なり」

と、言葉に力をこめて言明した。

稚姫君命は竹熊に向ひ、

「汝の行動はなはだ暴逆無道なり、妾はいまだ心底より汝が改心の實證を認むる能はず。今はもはや是非なし、神界の規定にしたがひ速に根の國底の國に降るべ

し  
」

と嚴命げんめいされた。竹熊たけくまは首くびを左右さいうに振り、

否々いないな、下手人げしゆにんはわれに非あらず、高杉別たかすぎわけ以下いかの所為しよゐなり」

と強辨きやうべんした。小島別こじまわけ以下いかは現場げんばの實状じつじやうを目撃もくげきせるをもつて、あくまで竹熊たけくまの所為しよゐ

なりと主張しゆぢやうした。

おほやしまひこのみこと  
大八洲彦命おほやしまひこのみことは、

大神おほかみの神業しんげふに出島しゆつたうされし不在ふざいちゆう中ちゆうにかくのごとく不祥事ふしやうじを惹起じやくきせしめたるは、全まつた

く吾わが不注意ふちういの罪つみなり。何なにとぞ吾われを根ねの國くに、底そこの國くにへ追放おひやりて竹熊たけくまの罪つみを赦ゆるしたま

へ  
」

と涙なみだとともに言上ごんじやうされた。

わかひめぎみのみこと  
稚姫君命わかひめぎみのみことは大八洲彦命おほやしまひこのみことの慈愛じあいに厚あつき眞心まごころに感かんじ、諸神しよしんにむかつて今後こんごを戒いましめ、

この場ばは事こと無なく事こと濟すみとなつた。鬼熊おにくまはこの負傷ふしやうが原因げんいんとなり、運命うんめい盡つきて遂つひに

落命らくめいするにいたつた。妻つまの鬼姫おにひめは竹熊たけくまの非道ひだうを怒いかり、仇あだを報ほうぜむとし、武熊別たけくまわけと

ともに弔とむらひひ合戦がっせんを計畫けいかくした。しかして鬼熊おにくまは怨靈おんりやう凝こつて、終つひにウラル山ざんの黑龍こくりゆうと

なつた。

（大正一〇・一〇・二六 舊九・二六 外山豊二録）

#### 第四九章 バイカル湖の出現（四九）

大八洲彦命の仁慈に充てる犠牲的至誠より、竹熊の罪は赦された。しかしながら衆神の手前もあり、竹熊も龍宮城に出入せしむることを禁ぜざるを得ない立場になつた。竹熊はやむを得ず、もとのエデンの城塞に歸らうとした。この時エデンの城塞は既に鬼熊に占領されてゐた。そして鬼熊の滅亡後鬼姫は、牛熊、武熊別を部將とし、あまたの魔軍を集めてこれを死守してゐた。竹熊は高杉別、森鷹彦の心中を少しも知らず、全く自分の無二の味方であると信じてゐた。竹熊は高杉別、森鷹彦に命じてエデンの城塞を前後より襲撃し回復せむとした。されどもふたりは言を左右に託して竹熊の命に従はず、かへつて竹熊の暴悪不道

の行爲を責め門内よりこれを突出し、門扉を固く鎖して、再び竹熊の出入し得ざるやう、きびしく警護した。

龍宮城の出入を禁ぜられた竹熊は、鬼城山に城塞を構へ數多の魔軍をしたがへ割據する、木常姫の陣營にむかひ救援を求めた。木常姫は何條否むべき、同志の竹熊にして亡ぼされなば吾が大望を達する望みなしと、ここに魔鬼彦、鷹姫等とともに軍容を整へ、エデンの城塞にむかつて短兵急に攻めいつた。鬼姫は牛熊、牛姫に命じて敵のヨルダン河を渡るを拒止せしめた。木常姫は雲を呼び、風を起し、雨を降らし、死力をつくして争うた。河水はたちまち氾濫し、水量おひおひに増して、エデンの城塞はほとんど水中に没するばかりである。ここに鬼姫は進退谷まり、竹熊より奉れる眞贋十二の玉を抱き、従者とともに黒雲に乗じ天空はるかに逃げゆく。天日暗澹として常暗のごとく、鬼姫一行の邪神隊はウラルの山上目がけて一目散に姿を隠した。

たちまち前方より奇晴彦、村雲別は國常立尊の命を奉じ、火龍となつて中空に現はれ、鬼姫の前後左右より焰を噴きだし攻めきたる。鬼姫の一隊は苦みにたへ

ず、少時は死物狂ひとなつて應戦せしが、つひに力盡きて地上に落下した途端に、大地は大震動とともに陥落し、長大なる湖水を現じた。これをバイカル湖といふ。そして鬼姫は茲に終焉を告げバイカル湖の黒龍となり、再び變じて杵築姫となり、執念深く龍宮城を附け狙うたのである。エデンの城塞はかくして再び竹熊の手に還つた。

(大正一〇・一〇・二六 舊九・二六 加藤明子録)

## 第五〇章 死海の出現〔五〇〕

鬼熊、鬼姫は竹熊との戦ひに敗れ、ウラル山およびバイカル湖の悪鬼邪靈となり、一時は其の影を潜め、ために龍宮城はやや安靜になつてきた。

國常立尊は大八洲彦命および稚姫君命の功績を賞し、ここに靈國天使の神位を授けたまうた。さても竹熊は高杉別、森鷹彦の變心に恨みを呑み、いかにもして

ふたりを亡ぼし仇を報ぜむと企てた。ついでには第一に又もや天使大八洲彦命を滅ぼすの必要を感じたのである。

今や竹熊はエデンの城塞を回復し、中裂彦、大虎彦を部將とし、牛熊、牛姫を參謀として再び事を擧げむとし、鬼城山に割據せる木常姫の應援軍を必要とした。木常姫は魔鬼彦、鷹姫、松山彦らの部將を督し、前後より天使大八洲彦命を攻撃せむと計畫を回らしつ々あつた。

大八洲彦命は猿飛彦、菊姫の密告により竹熊、木常姫の反逆的擧兵の消息を知り、龍宮城は、花照彦、花照姫、香川彦、速國彦、戸山彦、佐倉彦の部將をして城の各門を守らしめた。もはや後顧の憂ひなければ、ここに大八洲彦命は高杉別、森鷹彦、時代彦の部將とともに神命を奉じて、シオン山に向つて出發した。この用務は大神の神勅を諸天神へ報告のためであつた。諸天神は命の報告を聞き、天軍を起して竹熊、木常姫の暴逆を懲すの神策を定めたまうた。時しも天上より天使天明彦命あまたの天軍を従へ、シオン山頂の高原に下り、大八洲彦命に向ひ、危機一髪の場合は天軍の應援をなさむ、されど竹熊、木常姫の魔軍は決して恐

るるに足らず」

とて金色の頭槌をもつて地上を打ちたまへば、シオン山の地上より瑞氣顯はれ天に舞ひ上り再び大八洲彦命の前に降下した。これを頭槌の玉といふ。

かくして三個の玉を鳴り出で給ひ、「この精靈をもつて魔軍を掃蕩せよ」との言葉とともに、天明彦命は群神を率ゐて天使は天に還らせたまうた。大八洲彦命は天を拜し地に伏して、神恩の洪大無邊なるに感謝された。

竹熊、木常姫は全力を盡して前後左右より龍宮城を取り圍んだ。勇猛なる香川彦以下の神司は全力を擧げて之を撃退し、押し寄する敵の魔軍は或ひは傷つき或ひは倒れ、全軍の三分の一を失つた。時に探女あり、「天使大八洲彦命は、シオン山に在り」と密告した。竹熊、木常姫は時を移さず、黒雲を起し風を呼び、シオン山の空をめぐらして鷲地に攻め寄せた。

この時、大八洲彦命は天明彦命より賜はりし頭槌の玉を一つ取りだし、竹熊の魔軍にむかつて空中高く投げ打ちたまへば、その玉は爆發して數萬の黄龍となり、竹熊に前後左右より迫つた。この空中の戦ひに竹熊は通力を失ひ、眞鷹十二個の



玉とともに無惨にも地上へ墜落し、たちまち黒龍と變じ、地上に打ち倒れた。しばらくあつて竹熊は起上がり、ふたたび魔軍を起して防戦せむとする折しも、天上より金勝要神、未姫命の二柱の女神は、天の逆鋒を竹熊が頭上目かけて投げ下したまうた。一個は竹熊の頭にあたり一個は背にあたり、その場に倒れ黒血を吐き、ここに敢なき終焉を告げた。

竹熊の血は溢れて湖水となつた。これを死海といふ。竹熊の靈魂はその後死海の怨靈となつた。死海の水は苦くして、からく粘着性を帯ぶるは、天の逆鋒の精氣と血（のり）の精の結晶である。竹熊の靈はふたたび化して棒振彦となり、天使大八洲彦命を執念深く幾度も悩ました。竹熊部下の惡靈もまた此の湖水の邪鬼となつた。そしてその怨靈は世界に擴まり、後世に至るまで、種々の祟りをなすにいたつた。その方法は淵、河、池、海などに人を誘ひ、死神となつてとり憑き溺死せしめるのである。故にこの湖水を楔身の神業をもつて清めざれば、世界に溺死人の跡は絶たぬであらう。

シオン山の後方の天より襲ひきたる最も猛烈なる木常姫の魔軍に對して、大八

洲彦命は第二の頭槌の玉を空中に投げ捨てたまへば、たちまち爆裂し、木常姫の一軍は神威におそれ狼狽の極、死海の周囲に屹立せる禿山の山上に墜落し、岬角に傷つき、最後を遂げた。木常姫の靈はふたたび變じて高虎姫となり、棒振彦とともに、大八洲彦命を絶對的に惱まさむとした一切の徑路は、おひおひ述ぶるところによつて判明する。

竹熊の所持せる十個の玉と、二個の偽玉は一旦死海に沈み、歳月を経ておひおひに雲氣となつて舞ひ上り、世界の各地に墜落し邪氣を散布し、あらゆる生物を困ましめたのである。さしもの黄金水より出でたる十個の寶玉も、竹熊の血に汚されて惡靈と變じ、諸國に散亂して種々の惡事を現出せしむる惡玉と變化したのである。この玉の散布せる地は最も國魂の惡き國土である。

天の一方より村雲押開きて天使の群、幾百千となく現はれ、地上に漸次降りくるよと見るまに、瑞月の身體はたちまち極寒を感じ、ふと眼を開けば、身は高熊山の巖窟の前に寒風に曝されてゐた。

(大正一〇・一〇・二六 舊九・二六 櫻井重雄録)

附記 靈界物語について

瑞月 出口王仁三郎

靈界物語は總計壹百二十卷をもつて完成する豫定になつてをります。しかしながら是だけ浩瀚な著述を全部讀了せなくては、神幽現の三界の經緯が判らないなどと思ふのは間違ひの甚だしきものです。經を訓むには、冒頭的一篇を充分に玩味して腹に疊み込めば、すべての精神が明瞭に解し得らるるものです。どんな人間といへども最初の一瞥によつて其の内容や心が讀めるものです。刀劍は鯉口一寸の窓さへ開けて視れば、その名刀たり鈍刀たることが判り、蛇は三寸ばかり見ればモウそれで全體の見當がつくものである。詩經も最初の周南篇に自餘の篇が包まれてあり、周南は『關々たる雎鳩は河の洲にあり』の首語に包まれてあることが判るやうに、本書もまた第一卷の或る一點を讀めば全卷の精神が判るはずである。本書の基本宣傳歌三章だけでも全部の大精神が判る。教祖の書き残された

一萬卷の筆先も初發に現はれた、

「三千世界一度に開く梅の花良の金神の世になりたぞよ。須彌仙山に腰を懸け世の元の生神表に現はれて三千世界を守るぞよ。神が表になりて上下運否の無きやうに枳掛ひきならして、世界の神、佛、人民の身魂を改めて彌勒の世に立替立直して天地へお目に掛ける云々」

の神示で全部の御經綸や大神の意志が判るものであります。キリスト教の聖書だつて、「神世界を創造たまへり。又初めに道あり、道は神なり、神は道と俱にありき、萬物これによつて造らる」の聖句さへ腹に疊み込めば聖書の全體の精神が判るのである。たとへば茶室の中に一輪の朝顔が床柱に掛けてあるのも、見やうによつて茶室内は愚か天地全體が朝顔化するものである。凡て物は個體によつて全體が攝取され得るものである。華嚴經の一花百億國とは、一微塵に三千世界を包むといふの意義であります。こういふ見地に立つた時は、何ほど大部の本書もただ一章の註釋に過ぎないのであります。最奧天國の天人になると、智慧證覺が他界の天人に比して大變に勝つてゐるので、他界の天人が數百萬言の書を讀んで

も、まだ充分じゆうぶんに理解りかいし得えないやうなことで、簡單かんたんなる一いち二に言ごんに由よつて良よく深遠しんえん微妙びめうなる大眞理だいしんりを悟さとるものである。要えうするに未いまだ第一だいいち天國てんごく天人てんにんの境域きやうぬきにその靈性れいせいの達たつしてゐない人ひとのために、神意しんいに従したがひ斯かくのごとき長物語ながものがたりを著述ちよじゆつしたのであります。讀者どくしゃ諸氏しよしさい幸さいひに御諒解ごりやうかいあらむことを、茲こゝに一いち言ごん述のべておきます。

~~~~~

靈界物語 第一卷 靈主體從 子の卷

終り